

^ひ尾 ^じ立 ^い遺 ^{せき}跡

四国横断自動車道(南国～伊野) 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1995・3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

ひ尾 じ立 い遺 せき跡

四国横断自動車道（南国～伊野）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1995・3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



緑釉陶器（外面）



緑釉陶器（内面）



調査区と周辺の状況



調査区と周辺の状況

序

高知は、南に広大な黒潮の洗う太平洋を臨み、北には四国山地が迫るという、海と山に挟まれた独特の特徴及び環境をもっており、それらと同様に、その風土の中で独特の歴史と文化を育み、現在に至っております。

尾立遺跡のある高知市は、東西に長い高知県の中でもほぼ中央に位置し、古来より政治、経済、文化と、土佐の中心地としていくつもの歴史を積み重ねてきております。それらの発展に欠かせないものが、交通であり、今回の調査においても、古代・中世において、高知県外の多くの遠方の地域との、物質面での交流が営まれていたことが、出土遺物より証明されております。

四国横断自動車道建設は、新たな交通網の誕生といった点からも高知県にとって重要な課題であります。また、その計画地にはいくつかの遺跡が存在しており、文化財を保護する立場の私どもとしましては、文化財の保護と開発が共存できるような形で歴史が歩んで行くことを望んでおります。関係方面の一層のご理解とご協力をいただけますように、よろしくお願い申し上げます。

平成7年3月

財団法人 高知県文化財団埋蔵文化財センター

所長 原 雅彦

例 言

1. 本書は四国横断自動車道用地内における埋蔵文化財の記録保存を目的として行なった発掘調査の記録である。
2. 発掘調査は、日本道路公団高松建設局高知工事事務所の委託を受けて、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は、平成5年10月15日～平成6年1月21日であり、試掘調査と本調査を並行して行なった。
4. 調査体制
庶 務 三浦康寛（埋蔵文化財センター主事）
試掘調査 江戸秀輝（埋蔵文化財センター調査員）
本 調 査 江戸秀輝・松村信博（埋蔵文化財センター調査員）
5. 整理作業は下記の職員が行なった。
江戸秀輝・松村信博
6. 本文の執筆・編集は江戸秀輝が行なった。なお執筆・編集にあたっては松村信博氏に多くの協力を得た。
7. 発掘区の設定並びに遺構の測量にあたっては公共座標を使用した。標高は海拔高を示す。
8. 調査にあたっては、日本道路公団高松建設局高知工事事務所・高知県教育委員会・高知市教育委員会・地元関係者に全面的な協力をいただいた。関係者各位に厚く御礼申し上げたい。
9. 緑釉陶器については、京都市埋蔵文化財研究所の平尾政幸氏に鑑定をお願いした。記して感謝する次第である。
10. 現場での発掘調査並びに、整理作業、報告書執筆では、武田恭彰氏、橋本久和氏、百瀬正恒氏、埋蔵文化財センターの先輩諸氏から多くのご教示、ご援助をいただいた。記して感謝する次第である。
11. 発掘調査、整理作業では多くの方々の協力を得た。名前を記して謝意を表したい（敬称略）。
(発掘調査)
今村重臣・大賀幸子・小原勝雄・加志崎悦子・菊地直樹・国沢英子・国沢数代・近藤朋美・高橋初・松本明美・森田数子・森田徳美
(整理作業)
岩貞泰代・臼木由里・楠瀬憲子・小松経子・竹村延子・中西純子・西内宏美・松木富子・宮本幸子・矢野雅・山本裕美子

本文目次

巻頭カラー

序

例言、報告書要約

目次（本文目次／挿図目次／写真図版目次）

第Ⅰ章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境	1
1 地理的環境	1
2 歴史的環境	3
第Ⅱ章 調査に至る経過	4
1 調査に至る経過	4
2 調査の方法	5
第Ⅲ章 調査の成果	7
1 基本層準	7
各調査区セクション図	11
2 検出遺構と遺物	21
遺構平面図	24
第Ⅳ章 考察	35
出土遺物法量表	40
出土遺物実測図	48

挿 図 目 次

Fig.1：尾立遺跡周辺の遺跡分布図	Fig.23：2－1区北側遺構平面図
Fig.2：調査区位置図	Fig.24：2－4区東側遺構平面図
Fig.3：試掘トレンチ位置図	Fig.25：2－4区中央部遺構平面図
Fig.4：1－1区1－2区セクション	Fig.26：2－4区西側遺構平面図
Fig.5：2－1区セクション	Fig.27：2－3区遺構平面図
Fig.6：2－2区セクション	Fig.28：3－1区東側遺構平面図
Fig.7：2－4区セクション	Fig.29：3－1区西側遺構平面図
Fig.8：3－1区東側セクション	Fig.30：3－2区西側第1検出面遺構平面図
Fig.9：3－1区西側中央部セクション	Fig.31：3－2区西側第2検出面遺構平面図
Fig.10：3－1区西側セクション	Fig.32：3－2区西側第3検出面遺構平面図
Fig.11：3－2区南北壁セクション	Fig.33：3－2区遺構平面図
Fig.12：3－2区東西壁セクション	Fig.34：出土遺物実測図
Fig.13：3－3区セクション	Fig.35：出土遺物実測図
Fig.14：1－2区北側遺構平面図	Fig.36：出土遺物実測図
Fig.15：1－2区南側第1検出面遺構平面図	Fig.37：出土遺物実測図
Fig.16：1－2区南側第2検出面遺構平面図	Fig.38：出土遺物実測図
Fig.17：1－3区第2検出面遺構平面図	Fig.39：出土遺物実測図
Fig.18：1－3区第1検出面遺構平面図	Fig.40：出土遺物実測図
Fig.19：1－4区遺構平面図	Fig.41：出土遺物実測図
Fig.20：2－1区南側第1検出面遺構平面図	Fig.42：出土遺物実測図
Fig.21：2－1区南側第2検出面遺構平面図	Fig.43：出土遺物実測図
Fig.22：2－1区南側第3検出面遺構平面図	

写真図版目次

- P L 1 発掘調査前風景・3-3区TR1発掘状況
- P L 2 3-2区TR2検出状況・3-2区TR2検出状況
- P L 3 3-2区TR2検出状況・3-2区TR2完掘状況
- P L 4 3-2区TR2検出状況・3-2区TR2完掘状況
- P L 5 2-4区TR3検出状況・2-4区TR3完掘状況
- P L 6 2-4区TR3完掘状況・2-4区TR3集石遺構
- P L 7 2-3区TR4検出状況・2-3区TR4発掘状況
- P L 8 1-2区TR5完掘状況・3-1区石列遺構状況
- P L 9 3-1区石列遺構状況・3-1区完掘状況
- P L 10 3-2区完掘状況・3-2区完掘状況
- P L 11 3-2区完掘状況・遺物出土状況
- P L 12 遺物出土状況・遺物出土状況
- P L 13 遺物出土状況・遺物出土状況
- P L 14 遺物出土状況・2-4区完掘状況
- P L 15 2-4区完掘状況・2-3区完掘状況
- P L 16 2-3区完掘状況・2-3区完掘状況
- P L 17 2-2区セクション・2-1区完掘状況
- P L 18 2-1区検出状況・2-1区完掘状況
- P L 19 2-1区完掘状況・1-4区完掘状況
- P L 20 1-4区完掘状況・1-3区完掘状況
- P L 21 1-3区完掘状況・1-3区完掘状況
- P L 22 1-2区完掘状況・1-2区1-3区完掘検出状況
- P L 23 1-2区完掘状況・1-2区完掘状況
- P L 24 1-1区発掘状況・1-1区発掘状況
- P L 25 出土遺物（土師質土器）
- P L 26 出土遺物（土師質土器）
- P L 27 出土遺物（土師質土器）
- P L 28 出土遺物（土師質土器）
- P L 29 出土遺物（土師質土器）
- P L 30 出土遺物（土師質土器）
- P L 31 出土遺物（土錘・土師質土器）
- P L 32 出土遺物（金属製品・緑釉陶器）
- P L 33 出土遺物（緑釉陶器）

P L 34 出土遺物（青磁・陶磁器等）

P L 35 出土遺物（土師質土器・須恵器・陶器）

P L 36 出土遺物（土師質鍋・瓦質鍋・陶器等）

P L 37 出土遺物（石鏃・石製品）

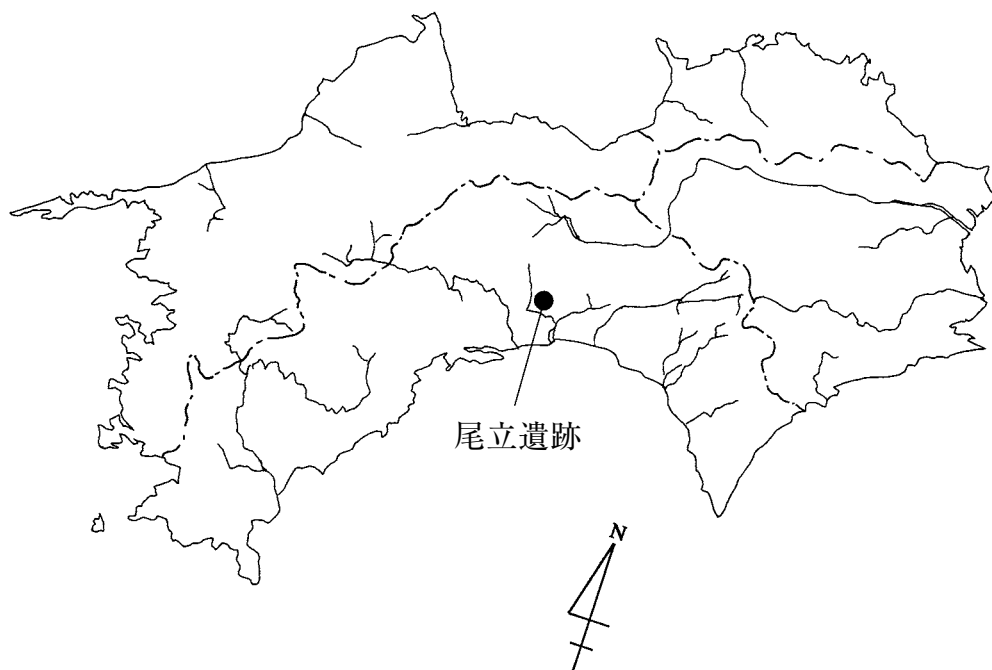
第Ⅰ章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境

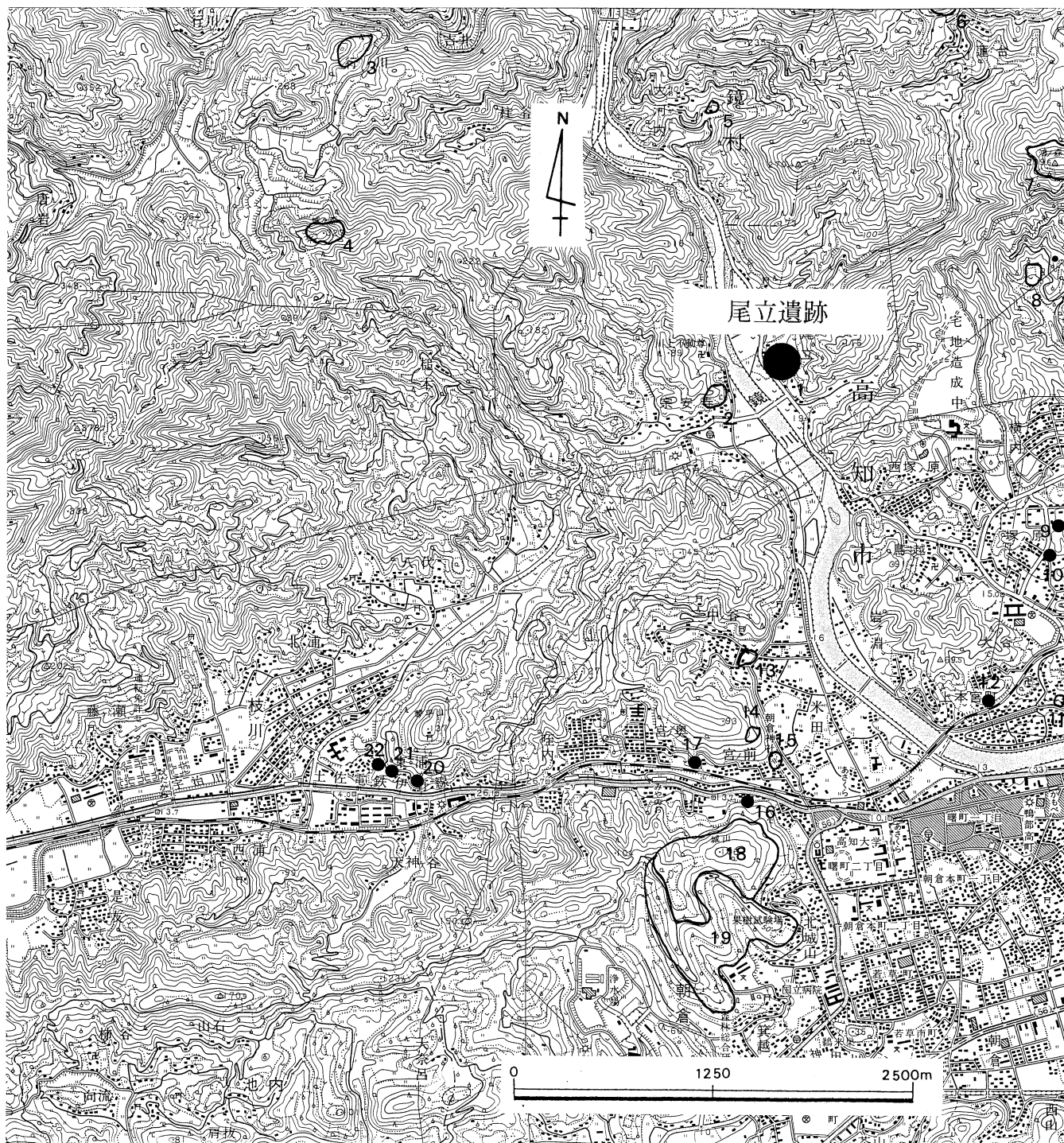
1. 地理的環境

尾立遺跡は高知市尾立129-4他に所在する。高知市は、高知県の中央部に位置し、東は南国市、西は吾川郡（伊野町・春野町）、北は土佐郡（鏡村・土佐山村）と接し、南は土佐湾へと開いており、高知県の県庁所在地になっており、人口は、約31万人で高知県の人口の約35%が集中し、政治、経済、行政の中心地となっている。高知市は1889年の市政施行以来、数度にわたって町村合併を行い現在の面積143.23km²である。

高知市の地形は、大きく分けると北側からの北部山地、中央低地、南部山地、南部低地に分けられ、さらに浦戸湾を境に東西に分かれる。現在の高知市中心部は、浦戸湾の西側の中央低地に開けているが、開発の歴史は比較的新しく慶長6年（1601）の山内氏の高知城築城に始まる。それまでも長宗我部氏の築城計画などが行なわれたが、鏡川、久万川によって形成されたデルタであるため大規模な治水工事を行なわねばならず、いずれも計画半ばで断念されている。このように現在の高知市の大部分、特に浦戸湾周辺は古代、湿地帯であったと考えられる。このため、古代の土佐国の中心である国衙は南国市比江付近に置かれていたと考えられている。

このように、現在の高知市を形成し地理的な特徴付けをなしているものに鏡川が挙げられる。鏡川は北部山地の工石山（1176.4m）に源を発し鏡村を経て南下し高知市北西部で大きく流れを東に変え高知市中心部を東に流れる。中流域では河岸段丘の発達もみられ、大きく蛇行する高知市朝倉、旭地区では扇状地を形成し下流ではほとんど河床勾配がなく、堆積作用は大きくデルタを形成して





No.	遺跡名称	時代・種別	No.	遺跡名称	時代・種別
1	尾立遺跡	弥生～近世・集落跡等	12	田城跡	中世・城館跡
2	旧宗安寺跡	古代・社寺跡	13	朝倉願成寺遺跡	古代・散布地
3	行川城跡	中世・城館跡	14	赤鬼山遺跡	弥生・散布地
4	長畝城跡	中世・城館跡	15	朝倉神社	古代・社寺跡
5	吉末筑前守光勝の墓	中世・古墓	16	野中碗屋敷跡	弥生・近世・散布地・屋敷跡
6	蓮台寺跡	古代・社寺跡	17	朝倉古墳	古墳・古墳
7	鴻ノ森城跡	中世・城館跡	18	朝倉城跡	中世・城館跡
8	舟ヶ谷遺跡	弥生・散布跡	19	朝倉城山遺跡	弥生・散布地
9	塚ノ原2号古墳	古墳・古墳	20	枝川1号古墳	古墳・古墳
10	塚ノ原1号古墳	古墳・古墳	21	枝川2号古墳	古墳・古墳
11	上本宮町遺跡	弥生・散布地	22	枝川3号古墳	古墳・古墳

Fig.1 周辺遺跡分布図

いる。鏡川の特徴は、全長が3.2 kmと短く、上流部は勾配が急であるにもかかわらず、下流で河床勾配が非常に緩やかになるため、近世まで幾度となく氾濫を繰り返し、その流路を変える暴れ川であったことである。このためか、鏡川沿いに遺跡の分布は少なく高知県の大川である四万十川や仁淀川、物部川と対照をなしており、高知市における確認されている近世以前の遺跡の数の少なさにつながっていると考えられる。

高知市の遺跡の分布は、非常に特徴的で特に浦戸湾の西側の中央部において顕著である。それは先の鏡川の影響でほぼ古代以前の遺跡が中央低地にはみられないことであり、その分布は、大部分が北部山地、南部山地の縁辺部に立地し、わずかに北西部の扇状地で見られる程度である。

当該調査対象地である尾立遺跡は、高知市北西部、尾立に所在している。ここで述べた鏡川の中流域の東岸に所在する数少ない遺跡のひとつである。やはり、調査の結果でも確認されているが、幾度となく堤防などが決壊し川縁の耕作地を襲った跡が残っていた。

2. 歴史的環境

高知県で、現在まで確認されているもっとも古い遺跡は、旧石器時代の遺跡で幾つかの存在が知られている。この中で高知市に所在するのは、南国市との境にある高天原遺跡で旧石器ではもっとも新しい段階の細石核が出土している。しかし高知市中心部の歴史はこの段階まで遡るとは考えにくく、その上限は正蓮寺遺跡、宇津野遺跡、柳田遺跡の縄文時代後期におくのが適切であると考えられる。

高知市の遺跡分布については、前で述べたように山上か山際に沿うように立地しており、一般的にこのような場所に立地することが多い縄文時代の遺跡だけでなく弥生時代から中世を通じて平地部に比べて圧倒的に多いことが特徴となっている。その中で注目されるのが縄文時代後期から古代の複合遺跡である柳田遺跡である。この遺跡は鏡川の旧扇状地に立地しており、住居跡は確認されていないが、多量の土器と多種類の石器が出土し、木器も粘土層の中から良好な状態で出土している。

尾立についてみると、地名の由来は、昔、小立足尼（ひじのすくね）が国造となり当地を領有、そのため小立が、後転化して尾立となったという。地内に古城跡があり、「南路志」は中島氏3代の居城とするが、「土佐国古城略志」では尾立城とあり、本山氏に属した大黒下野守の居城であるという。

中世以後尾立村という村名が織豊期に見え、土佐郡のうちである。天正16年の朝倉荘尾立村他三村地検帳には「尾立村」と見え、ほかに宗安寺村・枝郷村・池内村の計4ヶ村が記されており、うち尾立村分は、中内記の給分と御直分（歳入地）が多く、大宮神田・大応院・天神領などの寺社領があった。当村の検地面積は本田2町2反余・出田7反余。

この後、近世・近代を経て、現代今日の高知市尾立へ至る。

〔参考文献〕

- 『高知県の地名』日本歴史地名大系40巻 平凡社 1983年
- 『39高知県』角川日本地名大辞典 角川書店 1986年

第Ⅱ章 調査にいたる経過と調査の方法

1. 調査に至る経過

四国横断自動車道（南国～伊野）の建設工事の開始を機会に、南国インターチェンジ以西の埋蔵文化財についての調査も本格的にスタートした。すでに開通している南国インターチェンジまでの区間では幾つかの遺跡が発掘調査され、そして記録保存されている。今回の南国～伊野間では、平成5年2月の栄エ田遺跡の試掘調査をスタートにして、奥谷南遺跡・栄エ田遺跡・長畝古墳、そして南国市から高知市に移り、福井遺跡・尾立遺跡と調査の必要な遺跡について、計画、実施されている。この建設計画によって高速道路が県都である高知市に接続されるということもあり、さまざまな面で、例えば、情報・物資の輸送、産業の充実・発展にとって新たな展望を見いだすものといえよう。高速道路：四国横断自動車道の延進は高知県にとって、県政の重要施策であり、高知と他の地域を結ぶ交通輸送体系の幹線として、発展を促進することになる。南国～伊野間の次には伊野～須崎間の計画されており、その区間にも多くの遺跡が存在する。これらの遺跡の一つ一つは言うまでもなく私達の祖先がその営みを大地に刻み込んだ歴史そのものであり、地域の歴史を包蔵するかけがえのない文化遺産である。文化財保護の立場から高知県教育委員会は、日本道路公団高松建設局高知工事事務所と協議を重ね、埋蔵文化財に対する理解と協力を求めた。

平成5年4月1日付けで、高知県教育委員会との調整のもとに、日本道路公団高松建設局長より高知県文化財団埋蔵文化財センターに対して埋蔵文化財発掘調査業務の委託について依頼があり委託契約を締結し、平成5年10月15日より発掘調査を実施することになった。



作業風景

2. 調査の方法

尾立遺跡の道路建設予定地内では、中世の遺物が地表散布しており、当該期の遺構が存在するのではないかと予想されていた。そして当遺跡については、建設工事施工との関係もあり、試掘調査と本調査を継続して行なうことにした。そして平成5年10月15日に調査に入った。

まず試掘調査は Fig. 3 で示したようにTR 1 からTR 5 までの試掘調査区を設定し、TR 1 から調査を開始した。TR の大きさは基本を5 m×4 mとした。TR 1 については若干の遺物は出土したが、遺構と判断できるものは検出されなかった。TR 2 からTR 5 については、いずれも遺物・遺構ともに出土・検出がみられ、それらの部分を中心に本調査を行なうこととし、本調査に着手した。

本調査は、調査対象地を大きく3区に分け、それをさらに調査区の地形等を考慮し、1区：1-1区～1-4区・2区：2-1区～2-4区・3区：3-1区～3-3区に区分した。なお3-3区についてはTR 1 の区域であり本調査は実施しなかった。建設工事の工期との関係により、3区～2区～1区の順番で調査を進めた。調査の手順としては、表土等を重機を用いて除去した後、人力で検出作業を進めた。遺物の取り上げ、遺構の実測については公共座標の記された工事用の測量杭を利用して進めた。遺構実測及び土層断面図については20分の1の縮尺を基本に測量を実施した。標高については、日本道路公団設置の水準点を利用して調査区内にベンチマークを設定し測量を実施した。

調査面積は、試掘調査は100㎡、本調査は1,500㎡発掘調査を実施した。

上の調査区についてさらに説明すると、1-2区については、北側に「1-2区北側」南側に「1-2区南側第1検出面」、南側の中でも北側より下層を検出した「1-2区南側第2検出面」を、そして1-3区については、南側に「1-3区第1検出面」北側に「1-3区第2検出面」とした。2-1区については、南側は上層から順に「2-1区南側第1検出面」「2-1区南側第2検出面」「2-1区南側第3検出面」とした。その北側に「2-1区北側」を設けた。2-4区については調査区をもとの地形の段差に合わせて3分割して調査を行い「2-4区東側」「2-4区中央部」「2-4区西側」とした。3-1区については「3-1区東側」「3-1区西側」とし、3-2区については、まず3-2区の西側を3面に渡って調査し、上層より「3-2区西側第1検出面」「3-2区西側第2検出面」「3-2区西側第3検出面」とし、この調査区をさらに東側へ拡張し「3-2区」とした。

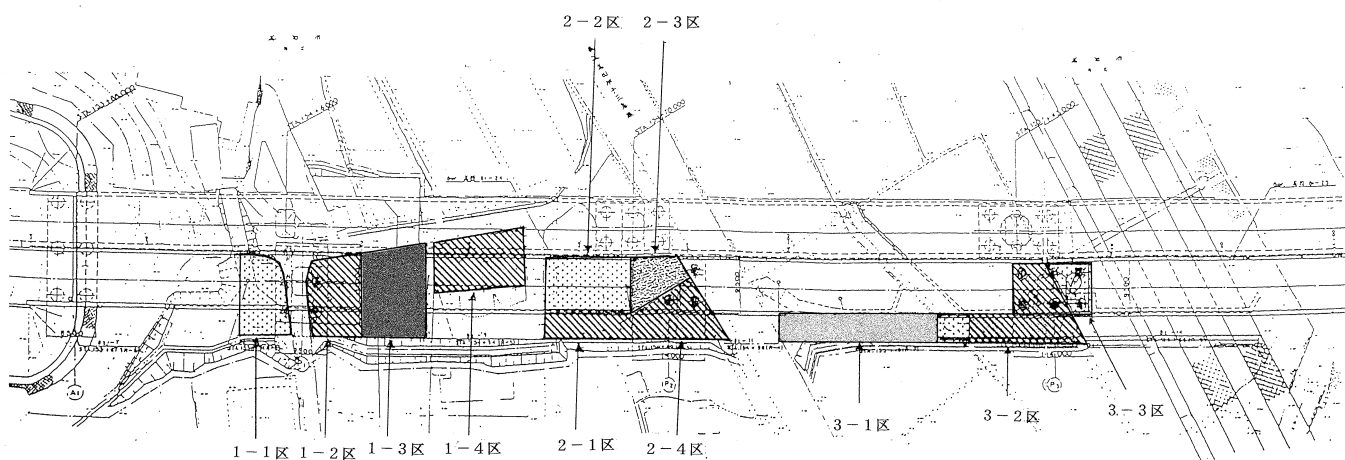


Fig.2 調査位置図

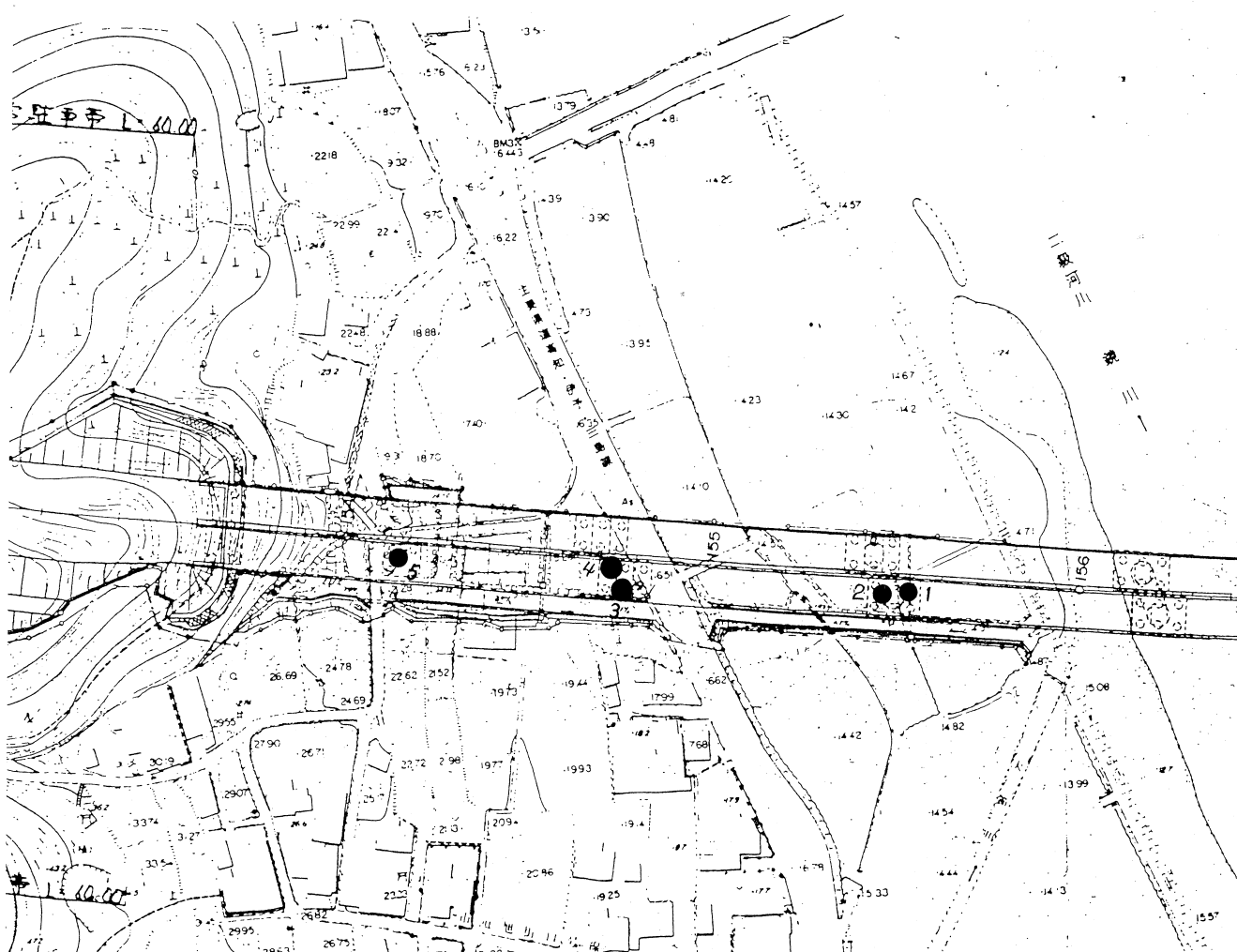


Fig.3 試掘トレンチ位置図

第Ⅲ章 調査の成果

1. 基本層序

基本層序については、尾立遺跡の所在する場所の関係から、調査区毎にさまざまな層序であるため、すべての調査区において共通するものを示すことができないので、各調査区について簡単に述べることにする。

1区：基本的には山の斜面であり、耕作土を表土とし、それが幾層か層をなし、その下層に遺物包含層が存在している。遺構直上の包含層はその下にあり、黄色あるいは褐色等の礫混の地山の上面において検出することができる。

1-1区 西壁・北壁セクション

- I-1：灰褐色土（耕作土）
- I-2：橙色粘土
- II：灰褐色土（小礫混）
- III：黄灰褐色土
- IV-1：茶灰褐色土（粒が荒い）
- IV-2：茶灰褐色土
- V：暗灰褐色土（小礫混）
- VI：濃暗灰褐色土（小礫混）
- VII：黄褐色礫

1-2区 東壁・南壁・西壁セクション

- I-1：暗灰色土礫混
- I-2：褐色土礫混
- I-3：茶褐色粘土
- II：暗灰褐色土礫多混
- III：暗灰褐色土礫混
- IV：暗茶褐色土
- V：茶褐色粘質土

2区：1区の土層の延長的な内容であるが、川原に近い理由からか、2区の中でも低い部分は遺構検出面に、丸礫の大型のものを幾つか確認することができる。部分的に遺構の検出面は幾層か繰り返されて存在しており、時代で見ると、古代から中世というところである。

2-1区 北壁セクション

- I：灰褐色土
- II：橙色粘質土礫混
- III：黒灰褐色土炭混
- IV：黄色土礫混

2-1区 南壁・西壁セクション

- I：灰褐色土
- II：暗灰褐色土小礫混
- III：橙色小礫
- IV：灰褐色小丸礫混
- V：黄褐色土丸礫混

2-2区 西側北壁・東側北壁セクション

- I : 暗灰褐色土 (耕作土)
- II : 褐色土
- III : 明黄褐色土礫混
- IV : 褐色土小礫多混
- IV-2 : 褐色土礫混
- V : 黒灰褐色土
- VI : 橙褐色土
- VII : 淡黒灰褐色土小礫混
- VII-2 : 灰褐色粘質土
- VIII : 暗灰褐色土
- IX : 黄灰褐色土礫混
- X : 灰褐色礫
- X I : 黄色粘礫土

2-4区 北壁・南壁セクション

- I : 灰褐色土 (耕作土)
- I-2 : 灰褐色土 (土器・礫混)
- II : 暗褐色土黄色礫多混
- III-1 : 暗褐色土黄色小礫多混
- III-2 : 暗褐色土黄色小礫混
- III-3 : 暗褐色土黄色小礫多混
- III-4 : 暗褐色土黄色小礫混
- IV : 暗灰褐色土小礫混
- V : 暗灰褐色土
- VI : 黒灰褐色土小礫少混
- VII : 暗茶褐色土小礫少混
- VIII : 黒色粘質土
- IX : 茶色粘質土
- X : 黄色土・礫

3区：現状は県道下の耕作地になるのだが、どの部分からも河川の氾濫による堆積であると確認でき得る土層に出会うことができた。旧耕作土の繰り返しの中にも洪水による堆積、堤防の決壊による急激な堆積を確認できた。川に近い部分は比較的浅い部分より川原石ばかりの砂礫層になっている。

3-1区 東側北壁セクション

- I : 灰色粘土
- II : 黄灰色粘土
- III : 灰色粘土
- III-2 : 灰色粘土黄色礫混
- IV : 暗茶灰色粘質土
- V : 暗茶灰色シルト
- V-2 : 暗茶灰色シルト (下層に礫混)
- VI : 明灰色シルト
- VII : 黄灰色シルト
- VIII : 暗茶灰色粘土
- IX : 明灰色シルト

3-1区 東側南壁・東壁セクション

- I : 灰色粘土
- II : 灰褐色粘質土
- III : 暗茶灰色粘質土
- IV : 暗茶灰色粘質土
- V : 暗茶灰色シルト
- V-2 : 灰色砂礫質粘土
- VI : 明灰色シルト
- VII : 黄灰色シルト
- VIII : 暗茶灰色粘土
- VIII-2 : 暗茶灰色粘土細礫混
- IX : 明灰色シルト

3-1区 西側中央部北壁セクション・中央部南壁セクション

I-1：灰色粘質土砂礫混	VI-3：明灰色シルト
I-2：暗灰色粘土	VII：明灰色粘土礫混
II：灰褐色粘土	VIII-1：灰色粘質土
III：褐色礫黄色礫混	VIII-2：灰色砂質土
IV-1：灰色砂礫	VIII-3：茶灰色粘土
IV-2：灰色シルト砂礫混	IX-1：灰色シルト鉄分沈着
IV-3：灰色シルト小礫混	IX-2：茶褐色砂
V-1：明灰茶色シルト	IX-3：赤鉄色砂質粘土
V-2：灰褐色砂礫シルト	IX-3-2：灰色シルト鉄分沈着
VI-1：灰色シルト	IX-4：茶灰色粘土礫混
VI-2：灰褐色シルト砂礫混	IX-5：灰色シルト鉄分沈着

3-1区 西側中央部南壁セクション

I：灰色褐色粘土互層
II：灰色シルト
III：灰茶色シルト
IV：灰色シルト炭化物混
V：明灰色シルト
VI：明灰色シルト遺構埋土
VII：灰褐色粘土
VIII：鉄分沈着灰色砂質シルト

3-1区 西側北壁・西壁・西側西端北壁セクション

I-1：灰茶色土白砂混	II-3-2：灰色シルト炭化物混
I-2：灰褐色土黄色礫混	II-4：暗灰茶色シルト
I-3：灰色土山土混	II-5：灰色シルト礫炭化物混
I-4：灰褐色粘土山土混	II-6：茶褐灰色砂質シルト
I-5：灰色粘土山土混	II-7：灰色砂礫
I-6：暗灰色粘土山土混	III-1：明灰色シルト
I-7：灰褐色粘土山土混	III-2：明黄灰色シルト
II-1：灰茶色シルト	III-3：灰色シルト
II-1-2：灰色シルト	III-4：黄灰色シルト
II-2：暗茶灰色シルト	III-5：茶褐色粘質土
II-2-2：暗灰色シルト	III-6：灰色粘礫砂
II-3：灰色シルト	

3-2区 南壁・北壁セクション

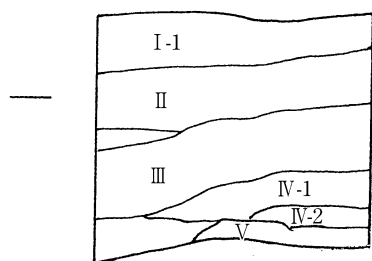
- | | | | |
|------|---------------------|-------|------------|
| I | : 灰褐色土 | VII | : 茶灰色砂 |
| II | : 橙黄色礫 | VIII | : 茶灰色粘土 |
| II-2 | : 灰褐色土 | IX | : 茶褐色砂 |
| III | : 灰色粘土橙黄色礫互層 (旧耕作土) | X | : 鉄分沈着茶灰色砂 |
| IV | : 暗灰褐色粘質土礫混 | X I | : 黒灰褐色砂 |
| V | : 茶灰色砂 | X II | : 黒灰褐色砂礫混 |
| VI | : 茶灰色砂礫混 | X III | : 礫 (川原石) |

3-2区 東壁・西壁セクション

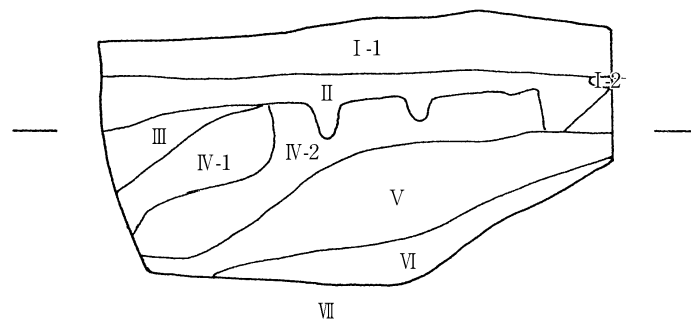
- | | |
|-------|---------------------|
| I | : 灰褐色土 |
| II | : 橙黄色礫 |
| III | : 灰色粘土橙黄色礫互層 (旧耕作土) |
| IV | : 暗灰褐色粘質土礫混 |
| V | : 茶灰色砂 |
| VI | : 茶灰色砂礫混 |
| VII | : 茶灰色砂 |
| VIII | : 茶灰色粘土 |
| IX | : 茶褐色砂 |
| X | : 鉄分沈着茶灰色砂 |
| X I | : 黒灰褐色砂 |
| X II | : 黒灰褐色砂礫混 |
| X III | : 礫 (川原石) |

3-3区 西壁・東壁セクション

- | | |
|------|-----------------|
| I | : 灰褐色土 (耕作土) |
| II | : 橙色粘質土礫多混 (床土) |
| III | : 灰色砂質土 |
| IV | : 黒褐色粘質砂 |
| V | : 茶灰色粘質土 |
| VI | : 黒褐色砂小礫混 |
| VII | : 灰色砂礫 |
| VIII | : 礫 (川原石) |
| IX | : 砂礫 (小礫多) |

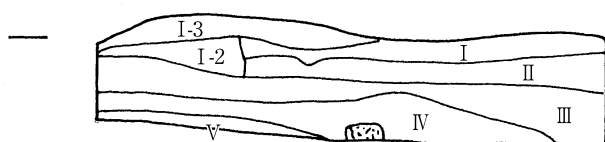


1-1区西壁セクション

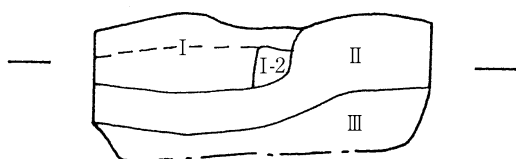


1-1区北壁セクション

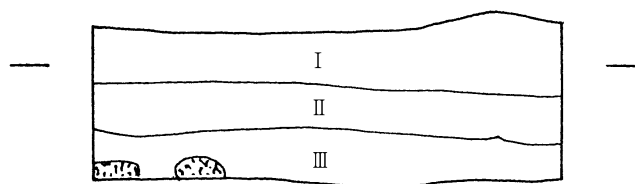
- I : 灰褐色土 (耕作土)
- I-2: 橙色粘土
- II : 灰褐色土 (小礫混)
- III : 黄灰褐色土
- IV-1: 茶灰褐色土 (粒が荒い)
- IV-2: 茶灰褐色土
- V : 暗灰褐色土 (小礫混)
- VI : 濃暗灰褐色土 (小礫混)
- VII : 黄褐色礫



1-2区東壁セクション



1-2区西壁セクション



1-2区南壁セクション

- I : 暗灰色土礫混
- I-2: 褐色土礫混
- I-3: 茶褐色粘土
- II : 暗灰褐色土礫多混
- III : 暗灰褐色土礫混
- IV : 暗茶褐色土
- V : 茶褐色粘質土



DL = 23.500m



Fig.4 1-1区・1-2区セクション

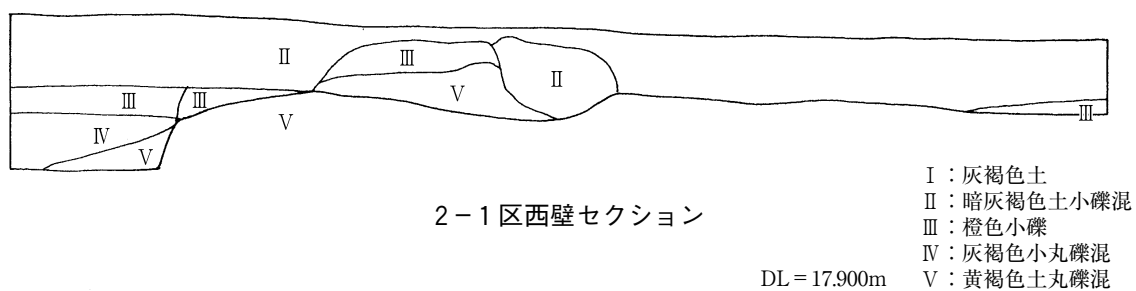
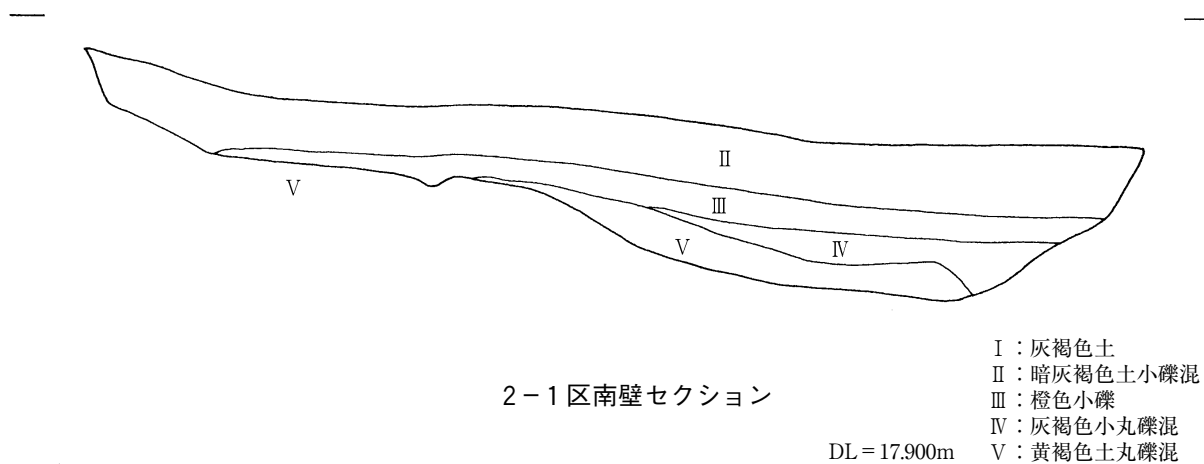
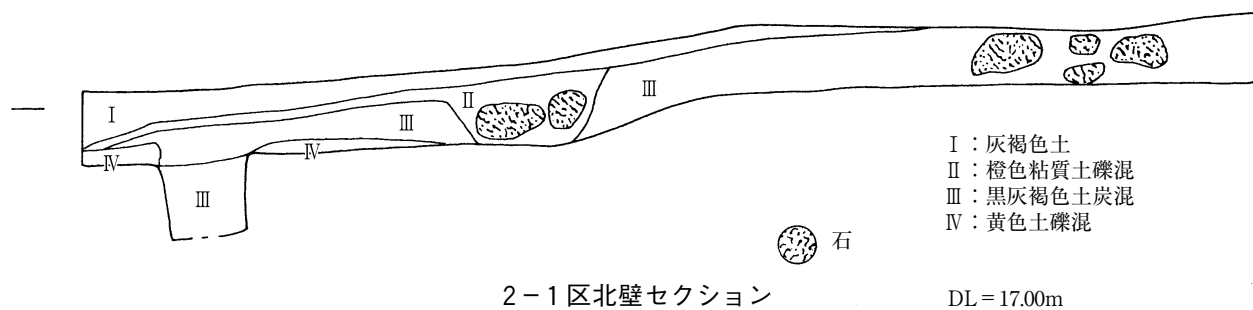
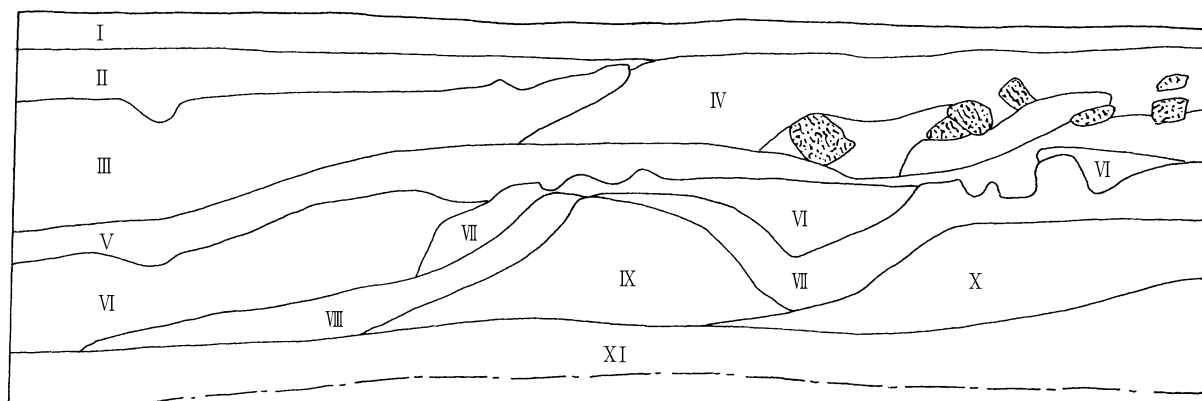


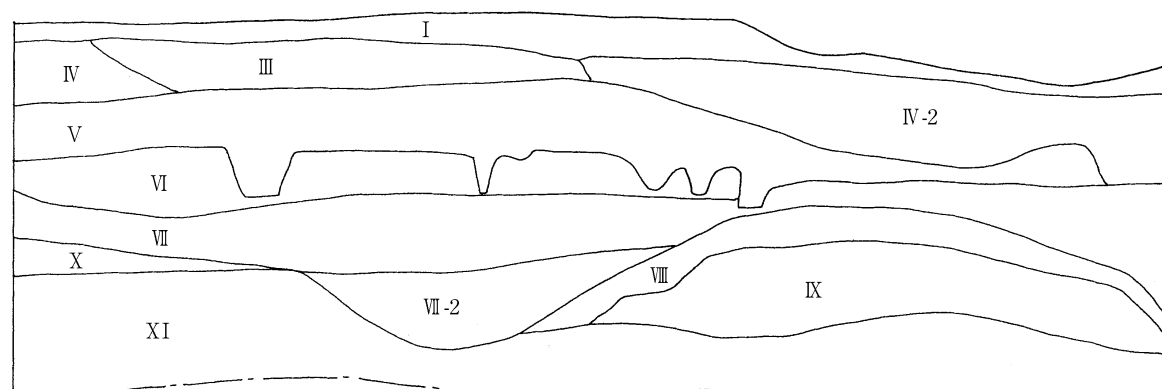
Fig.5 2-1区セクション



2-2区西側北壁セクション



石



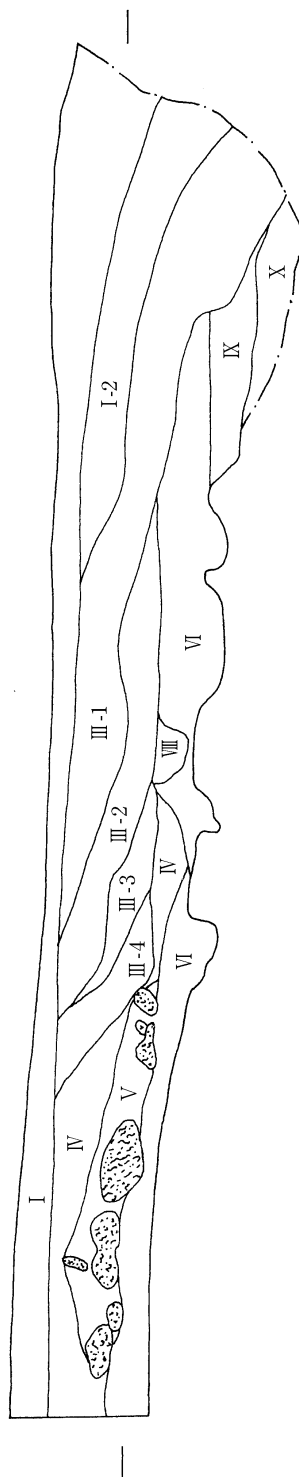
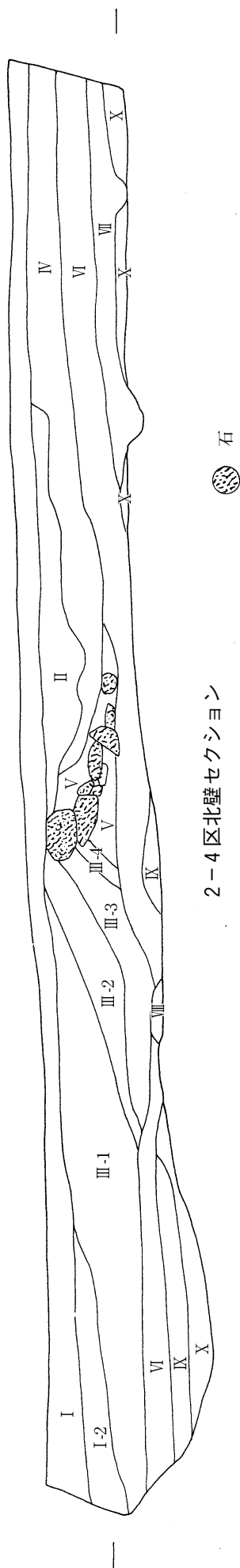
2-2区東側北壁セクション

- I : 暗灰褐色土 (耕作土)
- II : 褐色土
- III : 明黄褐色土礫混
- IV : 褐色土小礫多混
- IV-2 : 褐色土礫混
- V : 黒灰褐色土
- VI : 橙褐色土
- VII : 淡黒灰褐色土小礫混
- VII-2 : 灰褐色粘質土
- VIII : 暗灰褐色土
- IX : 黄灰褐色土礫混
- X : 灰褐色礫
- XI : 黄色粘礫土



DL = 18.500m

Fig.6 2-2区セクション

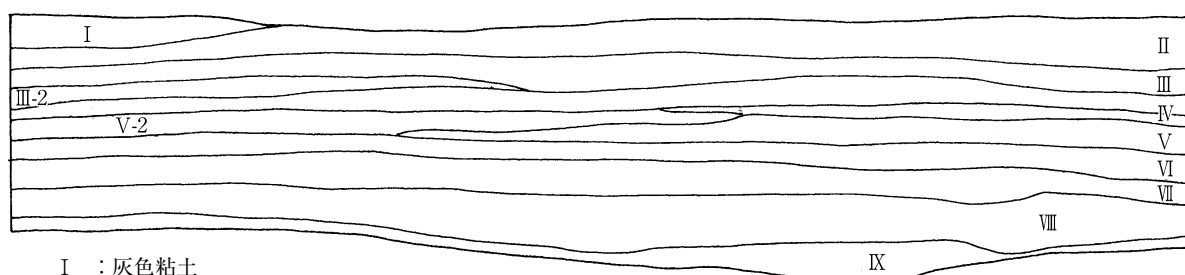


- I : 灰褐色土 (耕作土)
- I-2: 灰褐色土 (土器・礫混)
- II : 暗褐色土 (土器・礫多混)
- III-1: 暗褐色土 (土器・礫多混)
- III-2: 暗褐色土 (土器・礫多混)
- III-3: 暗褐色土 (土器・礫多混)
- III-4: 暗褐色土 (土器・礫多混)
- IV : 暗褐色土 (土器・礫多混)
- V : 暗褐色土 (土器・礫多混)
- VI : 暗褐色土 (土器・礫多混)
- VII: 暗褐色土 (土器・礫多混)
- VIII: 暗褐色土 (土器・礫多混)
- IX : 暗褐色土 (土器・礫多混)
- X : 暗褐色土 (土器・礫多混)



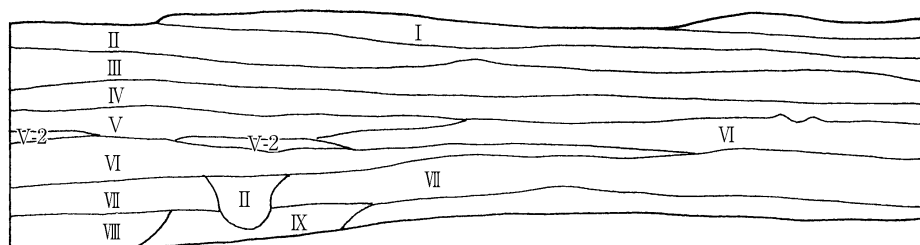
DL = 18.500m

Fig.7 2-4区セクション

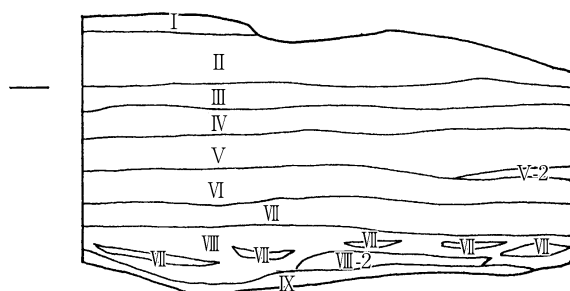


- I : 灰色粘土
 II : 黄灰色粘土
 III : 灰色粘土
 III-2 : 灰色粘土黄色礫混
 IV : 暗茶灰色粘質土
 V : 暗茶灰色シルト
 V-2 : 暗茶灰色シルト (下層に礫混)
 VI : 明灰色シルト
 VII : 黄灰色シルト
 VIII : 暗茶灰色粘土
 IX : 明灰色シルト

3-1 区東側北壁セクション



3-1 区東側南壁セクション



- I : 灰色粘土
 II : 灰褐色粘質土
 III : 暗灰茶色粘質土
 IV : 暗茶灰色粘質土
 V : 暗茶灰色シルト
 V-2 : 灰色砂礫質粘土
 VI : 明灰色シルト
 VII : 黄灰色シルト
 VIII : 暗茶灰色粘土
 VIII-2 : 暗茶灰色粘土細礫混
 IX : 明灰色シルト

3-1 区東側東壁セクション

DL = 14.00m



Fig.8 3-1 区東側セクション

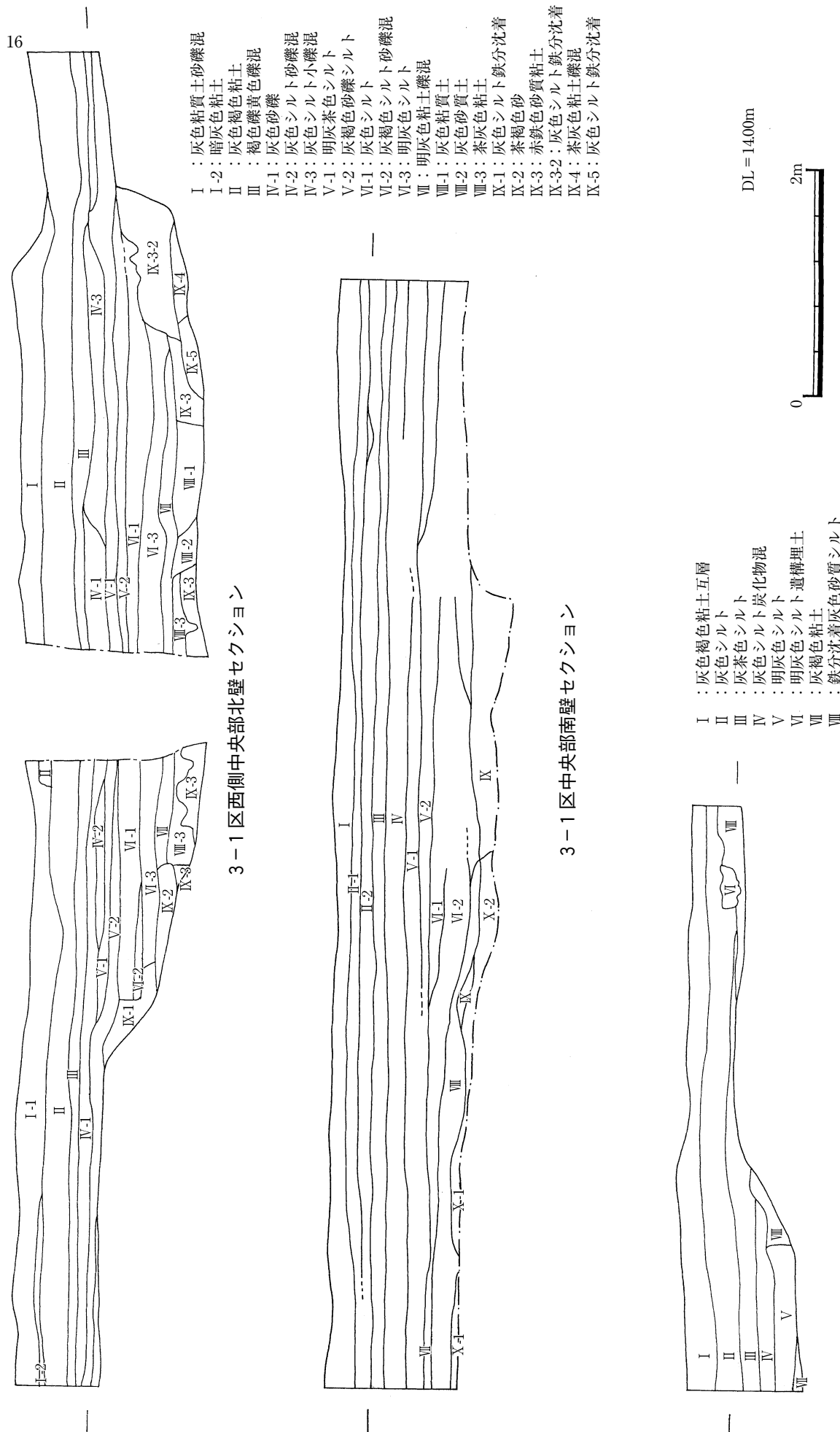
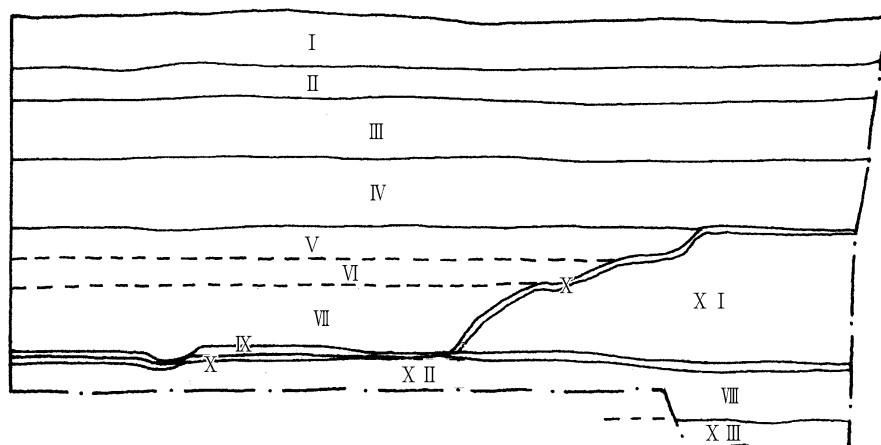
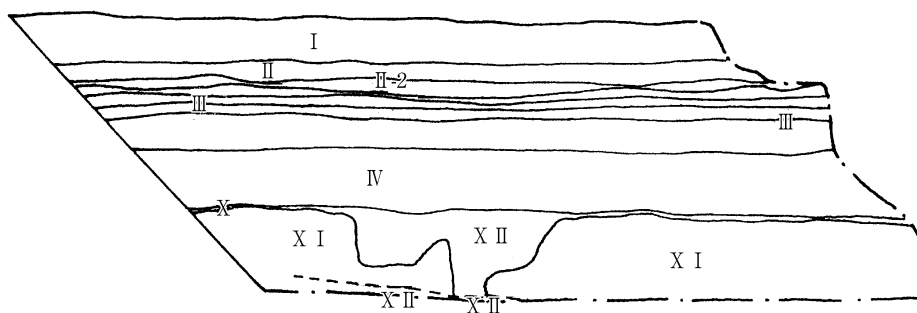


Fig.9 3-1 区西側中央部セクション



3-2区南壁セクション



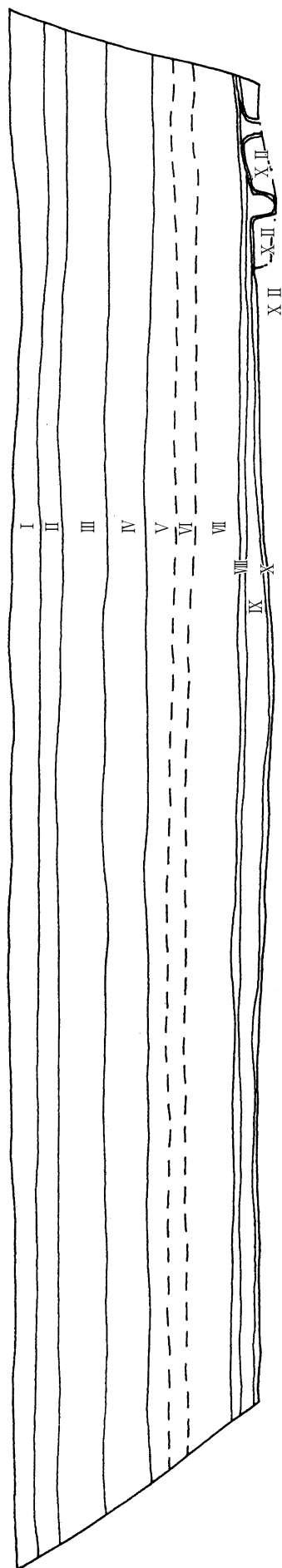
3-2区北壁セクション

- I : 灰褐色土
- II : 橙黄色礫
- II-2 : 灰色粘土
- III : 灰色粘土橙黄色礫互層 (旧耕作土)
- IV : 暗灰褐色粘質土礫混
- V : 茶灰色砂
- VI : 茶灰色砂礫混
- VII : 茶灰色砂
- VIII : 茶灰色粘土
- IX : 茶褐色砂
- X : 鉄分沈着茶灰色砂
- X I : 黒灰褐色砂
- X II : 黒灰褐色砂礫混
- X III : 礫 (川原石)

DL = 15.00m

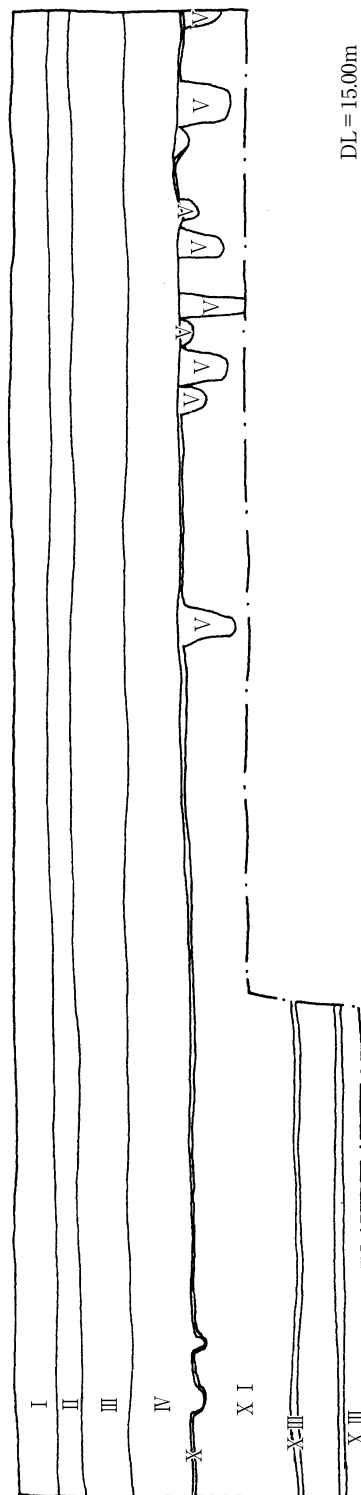


Fig.11 3-2区南北壁セクション



3-2区東壁セクション

- I : 灰褐色土
- II : 橙黄色礫
- III : 灰色粘土橙黄色礫五層 (旧耕作土)
- IV : 暗灰褐色粘質土礫混
- V : 茶灰色砂
- VI : 茶灰色砂礫混
- VII : 茶灰色砂
- IX : 茶灰色粘土
- X : 茶褐色砂
- X I : 鉄分沈着茶灰色砂
- X II : 黒灰褐色砂礫混
- X III : 礫 (川原石)

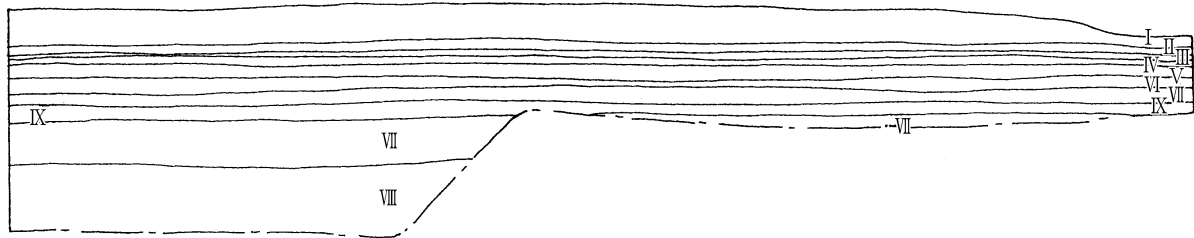


DL = 15.00m



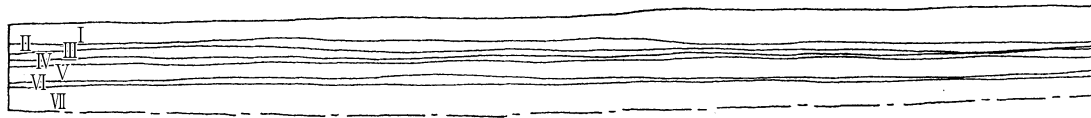
3-2区西壁セクション

Fig.12 3-2区東西壁セクション



3-3区 西壁セクション

- I : 灰褐色土 (耕作土)
- II : 橙色粘質土礫多混 (床土)
- III : 灰色砂質土
- IV : 黒褐色粘質砂
- V : 茶灰色粘質土
- VI : 黒褐色砂小礫混
- VII : 灰色砂礫
- VIII : 礫 (川原石)
- IX : 砂礫 (小礫多)



3-3区 東壁セクション

- I : 灰褐色土 (耕作土)
- II : 橙色粘質土礫多混 (床土)
- III : 灰色砂質土
- IV : 黒褐色粘質砂
- V : 茶灰色粘質土
- VI : 黒褐色砂小礫混
- VII : 灰色砂礫
- VIII : 礫 (川原石)
- IX : 砂礫 (小礫多)



DL = 15.00m

Fig.13 3-3区セクション

2. 検出遺構と遺物

(1) 1区

1-1区については、比較的地山そのものに傾斜がある部分で、遺構の検出はできなかった。遺物については、少量の陶磁器が出土したのみである。

1-2区については、1-2区北側はピットを45・土坑を8・別に近代以降の農業用の土坑を2検出した。建物跡は南北1間・東西2間のものが1棟建つ可能性がある。残りのピットについては多くが柱穴であろうが、建物跡の確認には至らない。遺物は土師質土器の坏・小皿、土錘、青磁の碗、瓦質土器の鍋などが出土しており、中世のものが中心であると考えられる。

1-2区南側第1検出面は、ピットを54・土坑を1検出した。ピットの多くが柱穴であると考えられるが、建物跡の確認には至らなかった。遺物は土師質土器の坏・小皿・壺、瓦質土器の碗、砥石などが出土している。時期は中世を中心にして、古代末のものを含めて出土している。

1-2区南側第2検出面は、ピットを37・溝跡を1検出した。ピットについては半数程度は柱穴と考えられるが、建物跡の確認には至らなかった。遺物は、土師質土器の坏・小皿、瓦質土器の碗・鍋などが出土している。時期は第1検出面同様で、第1検出面と第2検出面との間にそれほど時期差は見られない。

1-3区については、1-3区第1検出面は、ピットを113・土坑を2・溝跡を1検出した。ピットの多くが柱穴であると考えられるが、建物跡の確認には至らなかった。遺物は、土師質土器の坏、土錘などが出土している。時期は中世のものが中心である。

1-3区第2検出面は、ピットを65・土坑を2検出した。建物跡については、やや方角はずれているが、南北2間・東西1間のものが1棟建つ可能性はあるが、残りのピットの多くも柱穴ではあると思われるが、建物跡の確認までには至らない。遺物は、土師質土器の坏、青磁の碗、瓦質土器の鍋、須恵器の壺などが出土している。中世と古代両方の時期の遺物が出土しており、遺構そのものの時期は中世になるものと思われる。

1-4区はピットを40・土坑を3・別に近代以降の農業用の土坑を1検出した。ピットの大部分は柱穴であると考えられるが、調査区の形状などから建物跡の確認には至らなかった。遺物は、土師質土器の底部円盤、陶器の碗などが出土している。この調査区は包含層の堆積があまり厚くなく古代末から近世の時期のものがある。

(2) 2区

2-1区については、2-1区南側第1検出面はピットを28・溝跡の一部を1検出した。ピットの多くが直径30cm程である。調査区が細長く建物跡は確認できなかった。調査区の西側（鏡川側）の水平面が急傾斜し始める部分には南北に1列に並んだピットがあり、これらは柵のための杭の跡であると考えられる。遺物は土師質土器の小皿・坏、土錘、砥石が出土している。またSD1からは、土錘がまとまって出土している。そして同じSD1より、石鏃が1点出土している。石鏃については、周辺（調査対象区域外）に弥生時代の集落などがあり、そこより土錘が活躍していた時代にSD1に混入したのと考えられる。時期は古代末から中世のものである。

2-1区南側第2検出面はピットを9・土坑を1・石列を1検出した。石列については南北方向

に石垣のようなものがあつた跡ではないかと思われる。ピットについては第1検出面同様柵のための杭跡であると考えられる。土坑は第3検出面のSD2よりも下層まで掘られている。この土坑SK1からは多くの遺物が集中して出土している。それらは、土師質土器の小皿・坏・碗・底部円盤などである。第2検出面のSK1以外からは、土師質土器の小皿・坏・碗・羽釜、土錘、瓦質土器の碗、青磁の碗、そして、10点程の緑釉陶器を出土している。時期は古代から中世にかけてのものが出土している。もともと古代の生活面であると思うが、部分的に中世以降の影響があると思われる。

2-1区南側第3検出面はピットを64・土坑を4・溝跡を2検出した。第3検出面は第2検出面とは地形が違っており、中央部にSD2があり、その北側に細い杭跡と思われるピットが並んで検出された。他の柱穴と思われるピットについては、建物跡の確認には至らなかった。遺物は土師質土器の小皿・坏・甕、青磁の碗、緑釉陶器の碗が出土している。中でもSD2から遺物が集中して出土している。時期は第2検出面同様古代から中世にかけてのものが出土している。

2-1区北側はピットを95検出した。多くが直径20cm未満の杭跡であると思われる。それらは、あまり規則性がなく、その性格はよくわからないが、一部に地形の段差に合わせた柵のための杭跡であると思われる列をなしたものもある。遺物は土師質土器の破片が中心で、あまり復元できるものは出土しなかった。

2-2区については、工事との関係で、平面的な検出はできず、土層の確認などの簡単な調査のみ実施した。

2-3区はピットを24・土坑を4検出した。ピットについてはいずれも柱穴であると考えられるが、間隔等が不規則で建物跡の確認には至らなかった。遺物は中世の土師質土器の破片を中心に備前焼の播鉢など近世にかけてのものが出土した。

2-4区については、鏡川側より順に西側・中央部・東側とし、東に行くほど徐々に高くなっている。2-4区西側はピットを30・集石を1箇所検出した。ピットについては、30のうち17は直径10cm程の杭跡で、直径50cm程の柱穴の周囲を囲むように位置しているものもあったが、性格は不明である。また集石については下層の確認を行なったが、特別遺構らしきものは存在せず集石自体のみであり性格は不明である。2-4区中央部はピットを60・土坑を4・井戸を1検出した。ピットについては直径が20~30cmのものが多く、建物跡の確認には至らないが、一部のものは、遺構検出面のもともと段差のある地形にそった杭の跡と思われる。井戸については近代以降のものと考えられるが、井戸跡は大きい礫により密に埋められていた。2-4区東側はピットを42・土坑を2検出した。ピットは多くが柱穴と考えられるが、建物跡は、東西に2間南北は調査区の範囲上1間のものが1棟建つ可能性がある。2-4区の3つの調査区の遺物は土師質土器の小皿・坏など、近世~近代以降の陶磁器、石臼などが出土した。時期は中世から近世、表層近くでは近代以降のものも出土した。

(3) 3区

3-1区については、3-1区東側と3-1区西側にわけて調査を行なった。3-1区東側はピットを51検出した。この検出面は砂質であり直径10~15cmのピットが多く、川の近くあるいは水

の中となる場所の杭跡ではないかと思われる。遺物は少なく須恵器の破片が出土している。3-1区西側は3~4m幅で続くと思われる集石を検出した。石の大きさは大きい石で長径80cm程のものから小さいものは拳大のもので構成されている。河川敷の比較的軟弱な土地の中に石を敷くことにより、しっかりした地盤を造り、道あるいは畦などとして利用したのではないだろうか。また、鏡川を利用した水上運送の船着場関連の施設に関係のあるものかもしれない。遺物は少しの土師質土器の破片のみ出土している。

3-2区については、3-2区西側第1検出面は炭化物と焦土を検出した。3-2区西側第2検出面はピットを9検出した。これらのピットは、第3検出面で土手状の岸の部分に細い杭跡が検出されるのだが、その杭跡よりも太い杭によりしっかりした柵を設けていたのではないかと考えられる。杭間は約1mでありピットの直径は約40cm程である。3-2区西側第3検出面はピットを24・土坑を1・溝跡を1・土手状の部分を1箇所検出した。川側に土手状の部分があり、その土手の東側（陸地側）に杭跡と思われるピットがあり、さらに東側には溝跡と思われる落ち込みがあって、溝跡の埋土も、単なる落ち込みではなく流れがあった様子がうかがえるものであった。

3-2区西側をさらに拡張した3-2区については、ピットを181・土手状の部分を1箇所検出した。土手の東側（鏡川の河川側に対して陸側）に杭跡と思われるピットが並ぶ。土手跡が調査区（発掘区）の境界で切れているため、川側の形状ははっきりはしないが、土層確認のためのトレンチで判断すると、川側は徐々に自然の川原石状態に変化していつている。遺物は土師質土器・須恵器の破片が少し出土しただけである。

3-3区は試掘により遺構の存在しないことが確認され、遺物も出土量が少なかったため本調査は行なわなかった。土層の状態は川原石と砂による自然な状態であった。

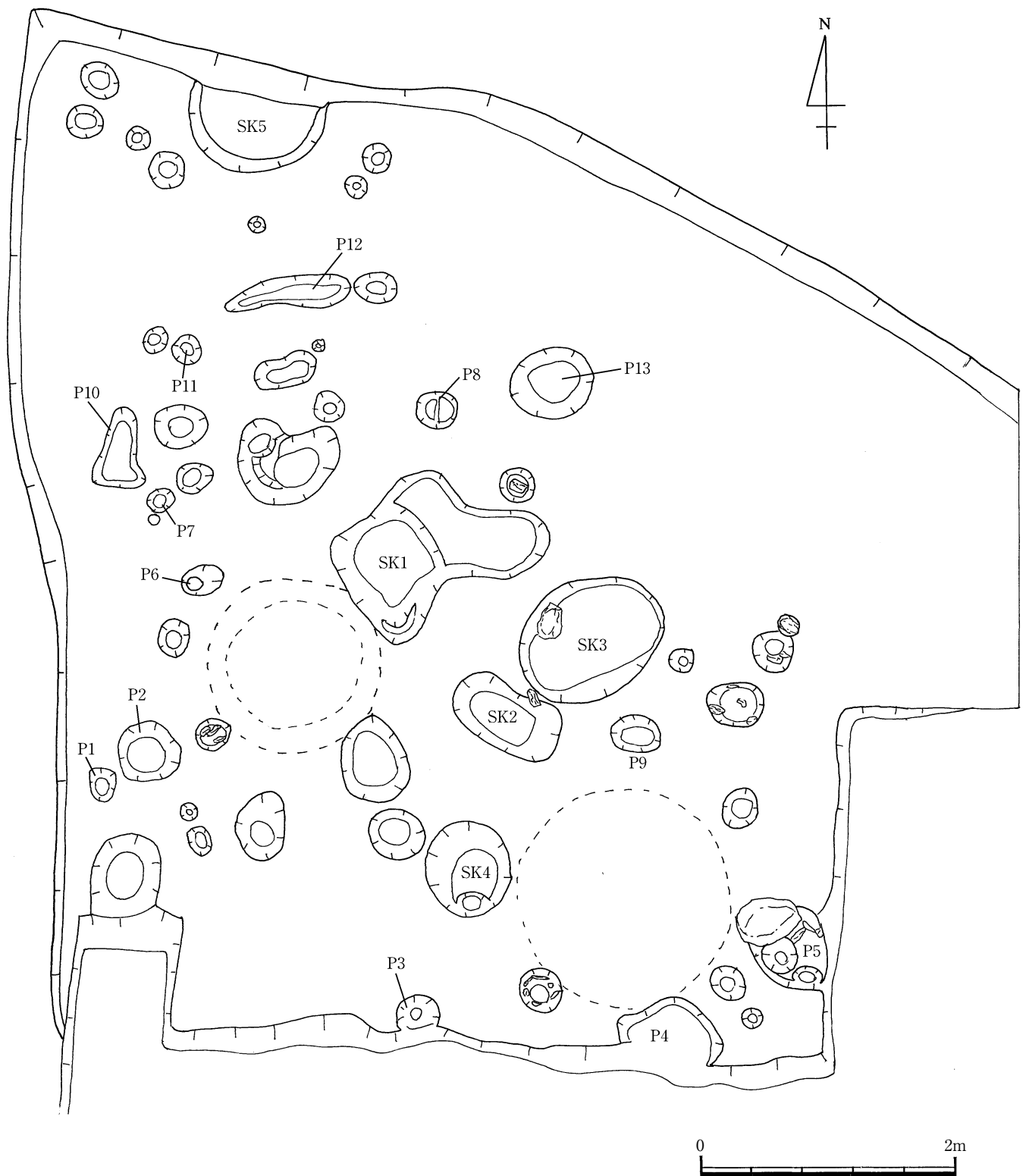


Fig.14 1-2区北側遺構平面図

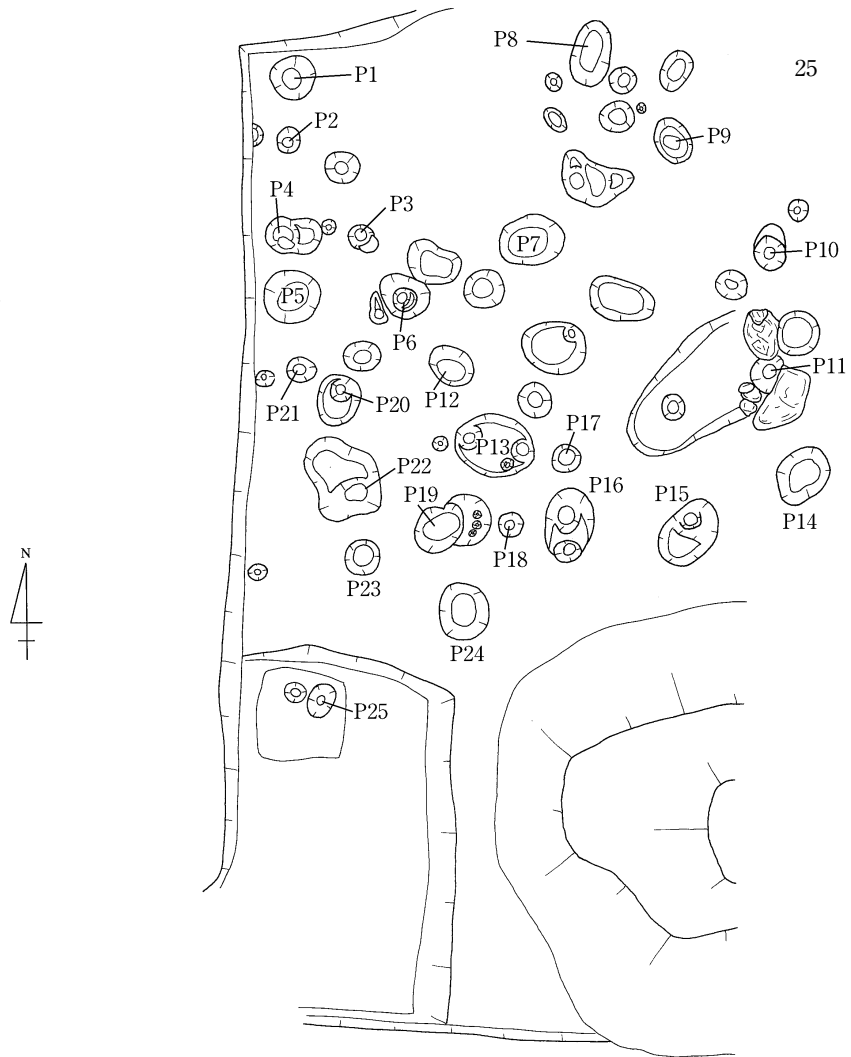


Fig.15 1-2区南側第1検出面遺構平面図

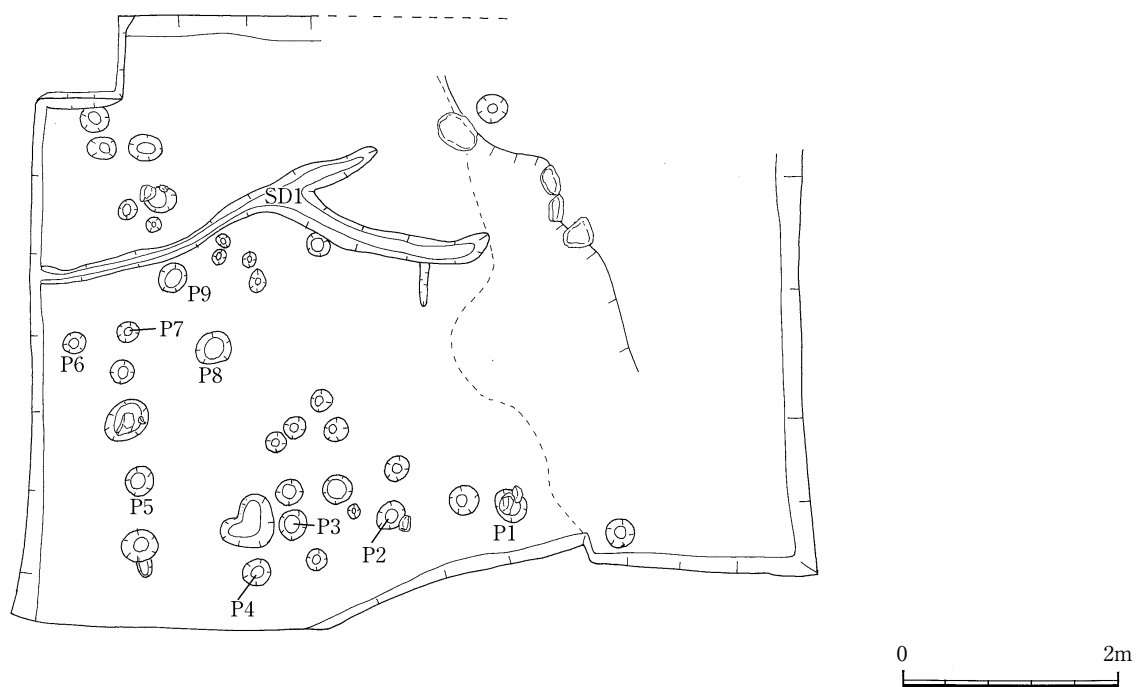


Fig.16 1-2区南側第2検出面遺構平面図

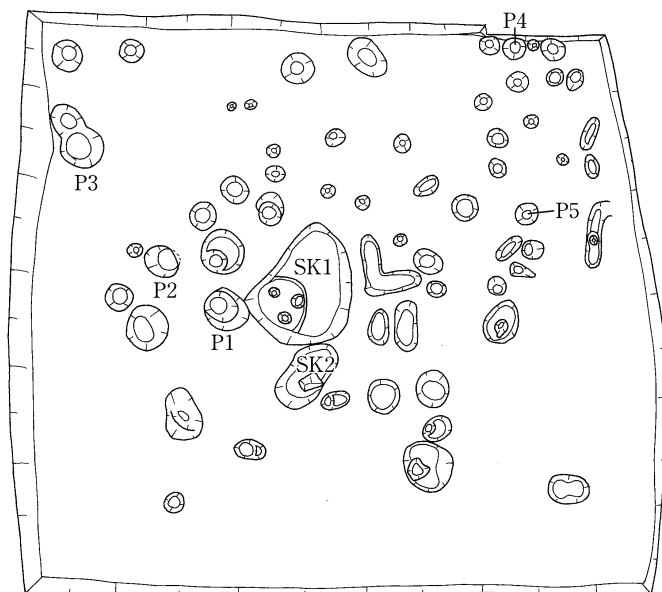


Fig.17 1-3区第2検出面遺構平面図

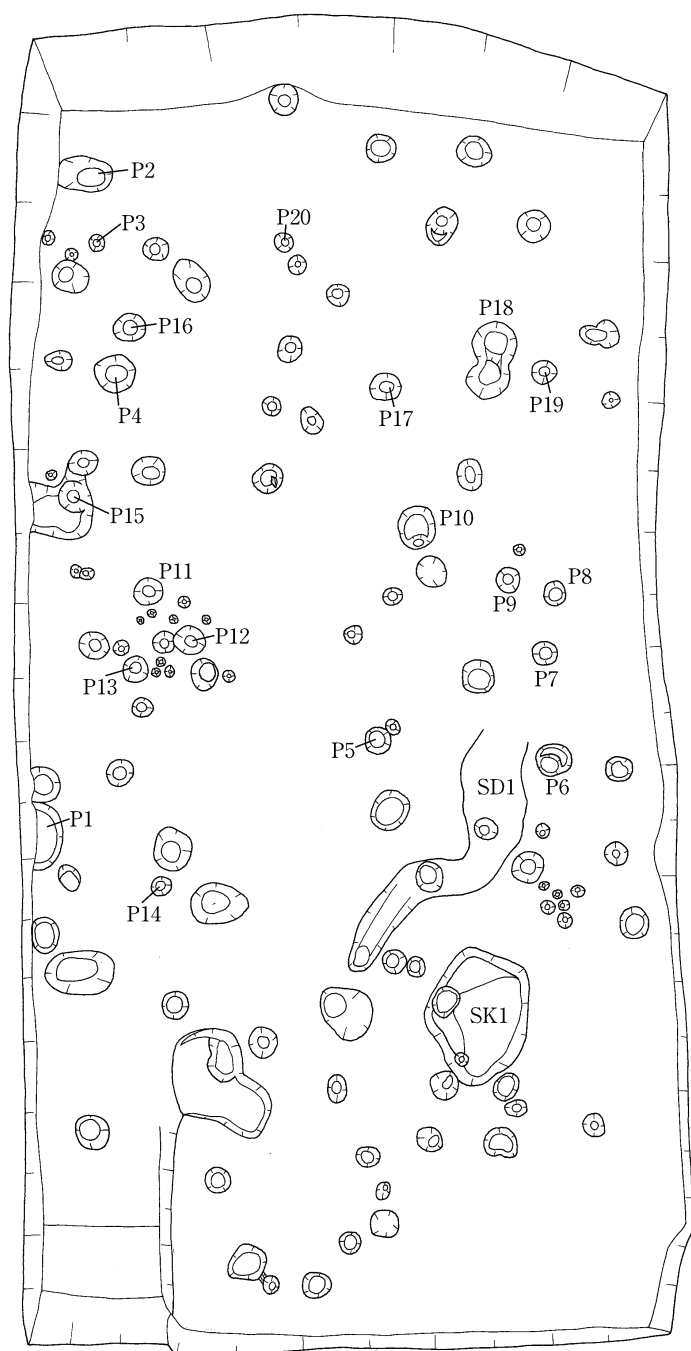


Fig.18 1-3区第1検出面遺構平面図

0 2m

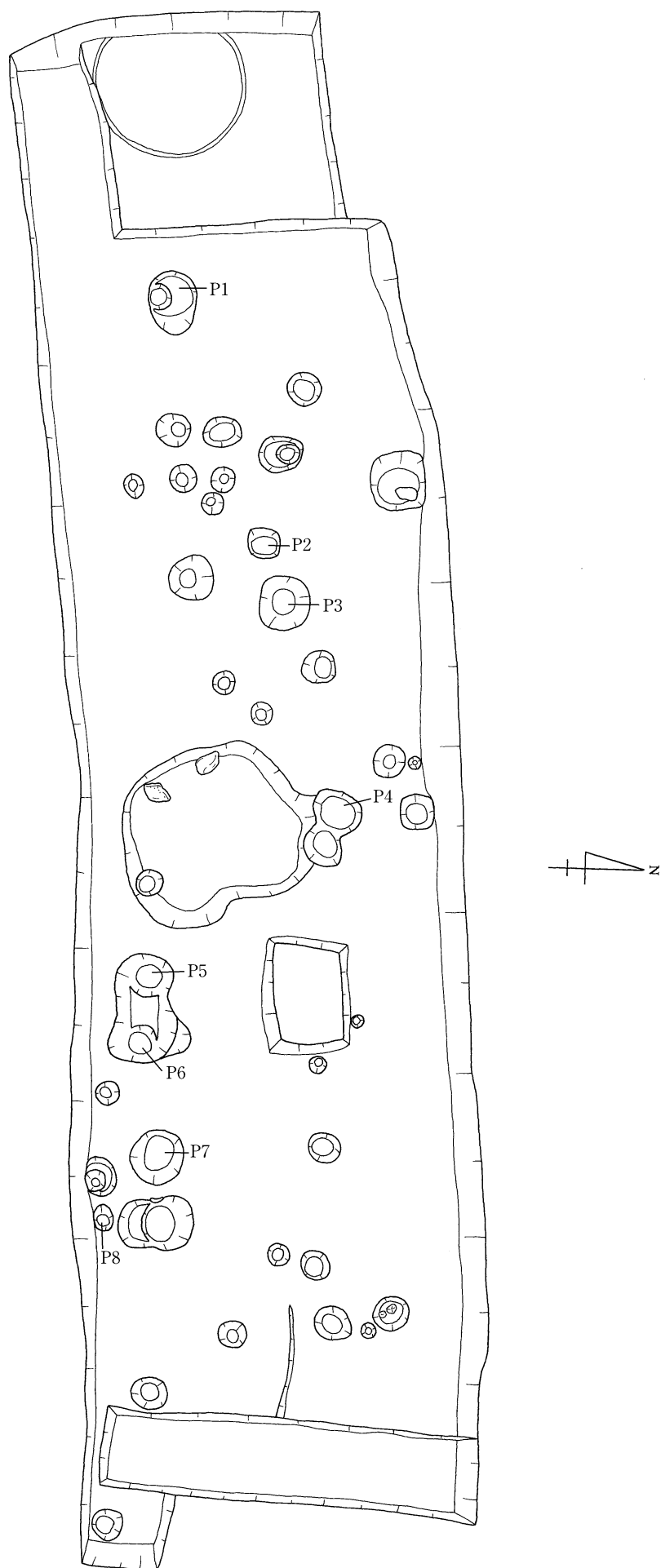


Fig.19 1-4区遺構平面図

0 2m

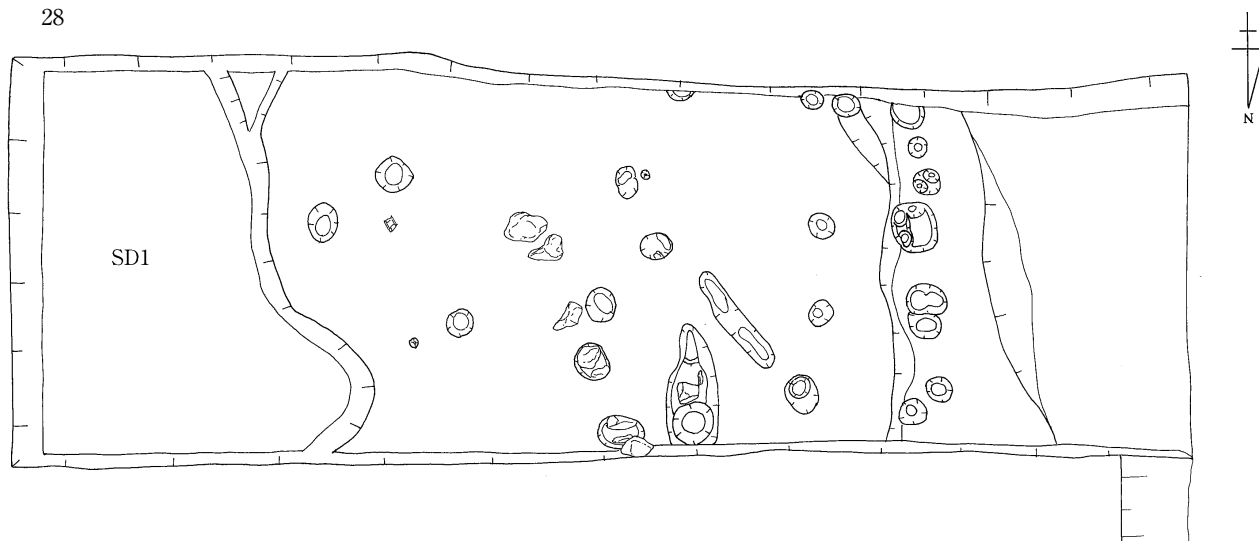


Fig.20 2-1区南側第1検出面遺構平面図

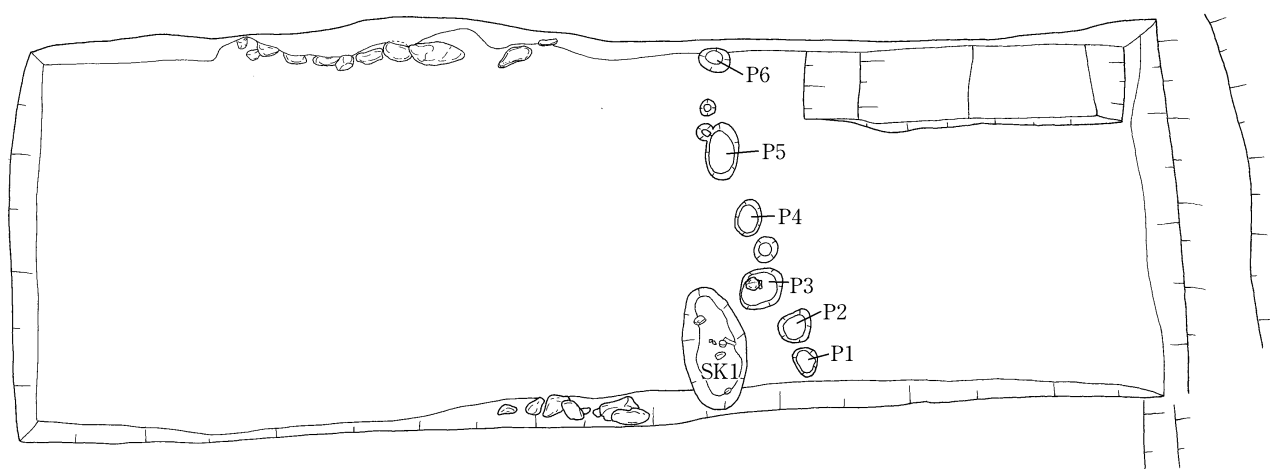


Fig.21 2-1区南側第2検出面遺構平面図

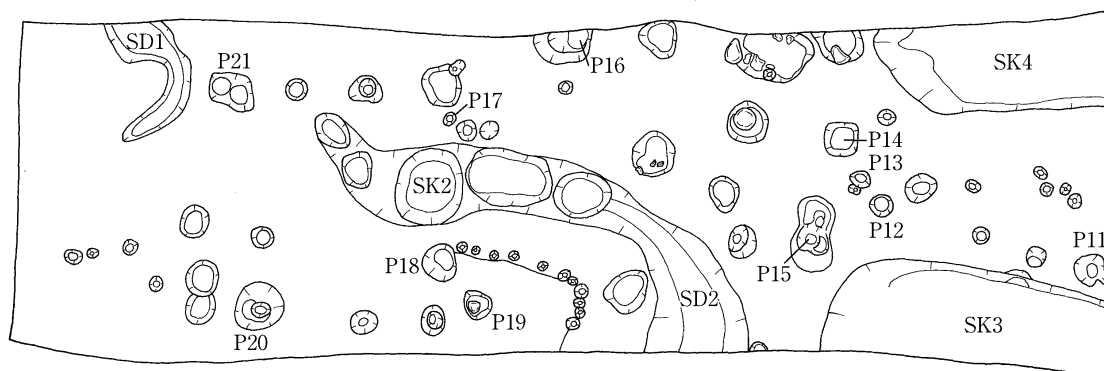


Fig.22 2-1区南側第3検出面遺構平面図

0 2m



Fig.23 2-1 区北側遺構平面図

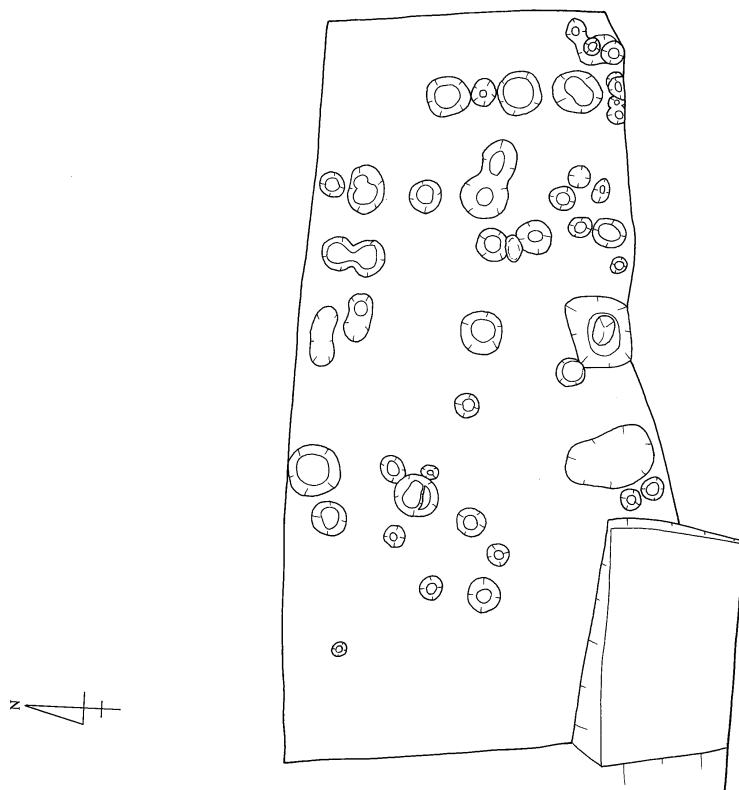


Fig.24 2-4区東側遺構平面図



Fig.25 2-4区中央部遺構平面図

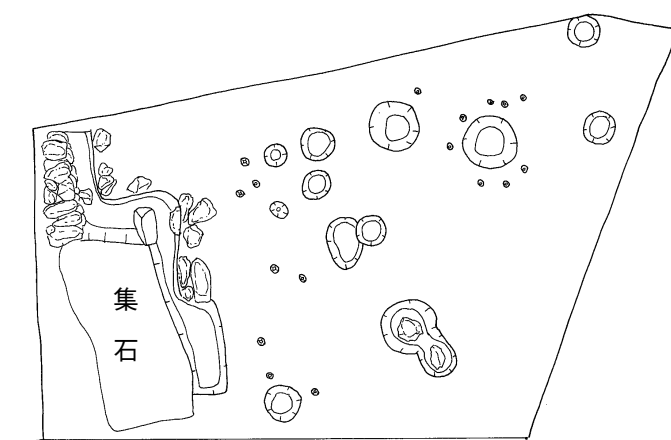


Fig.26 2-4区西側遺構平面図

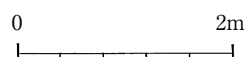
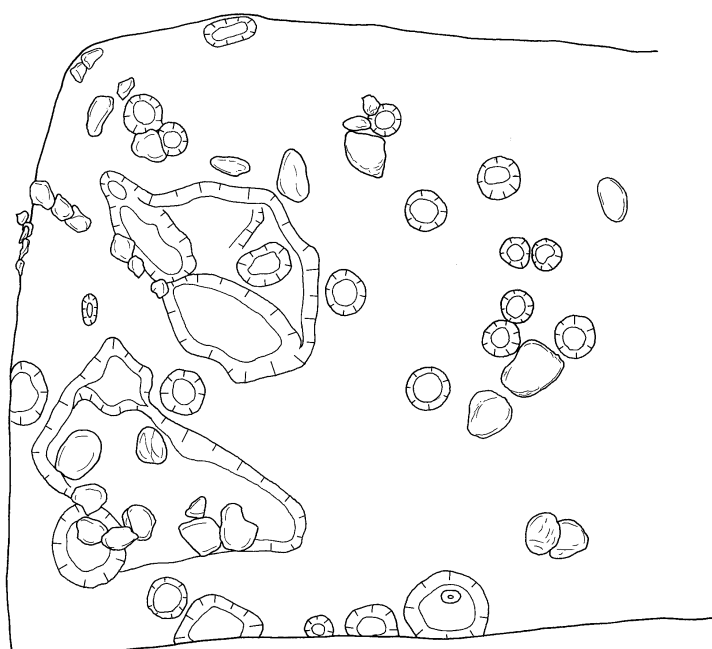
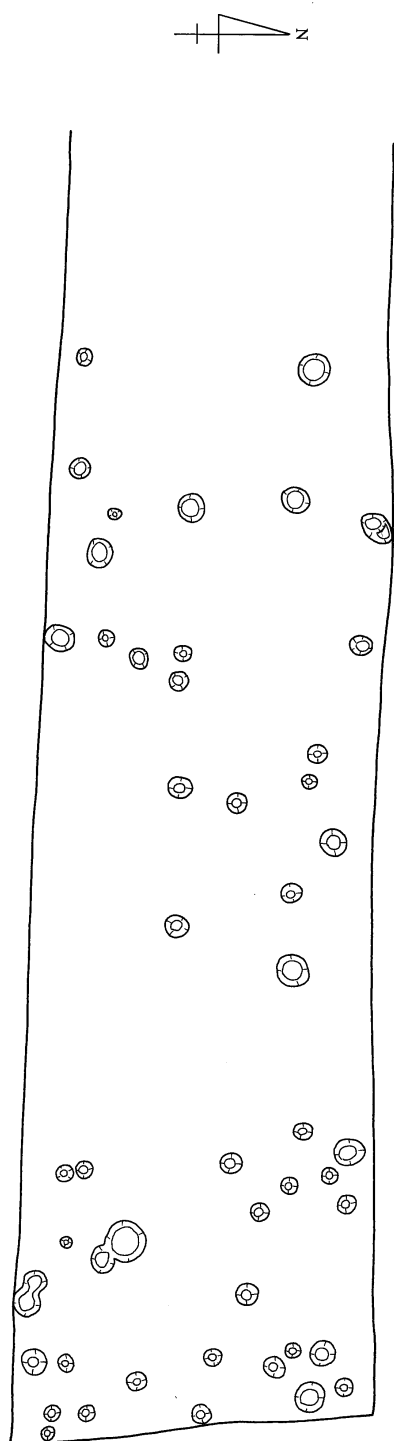


Fig.27 2-3区遺構平面図



Fig.29 3-1区西侧遺構平面図

Fig.28 3-1区東側遺構平面図



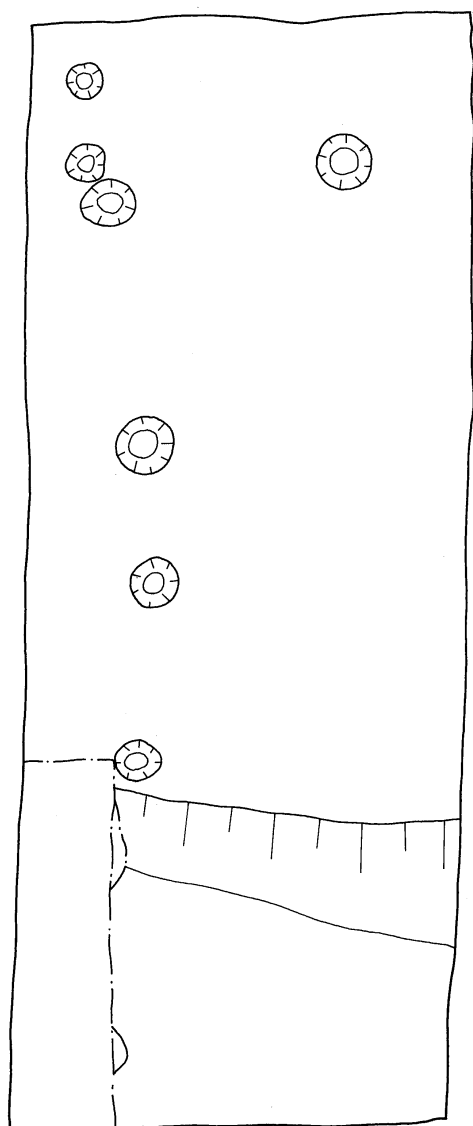


Fig.31 3-2区西侧第2検出面遺構平面図

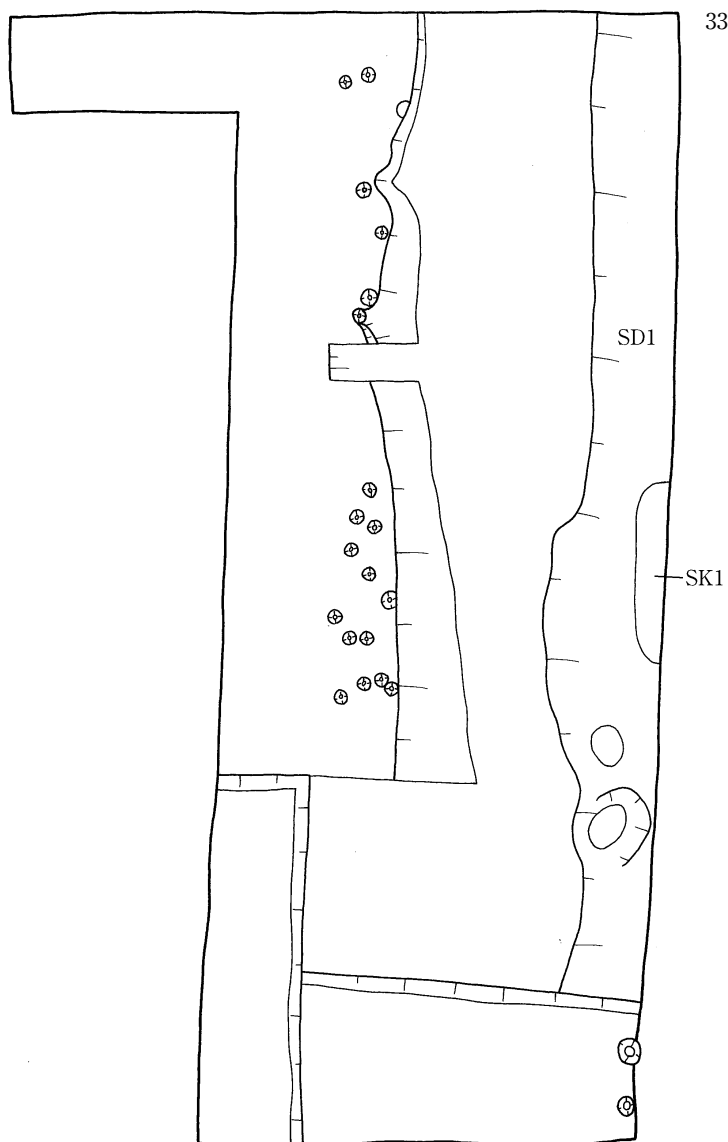


Fig.32 3-2区西侧第3検出面遺構平面図

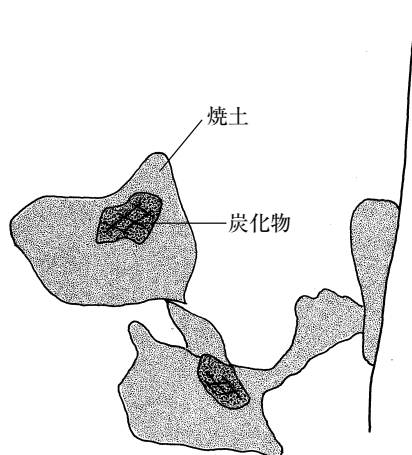


Fig.30 3-2区西侧第1検出面遺構平面図





Fig.33 3-2区遺構平面図

第Ⅳ章 考 察

1. 鏡川中流域における尾立遺跡の位置付け

尾立遺跡は鏡川の中流域の河川敷から河岸段丘上に展開する遺跡であり、鏡川中流域における要衝として、その立地には興味深いものがある。近世以前の河川交通、海上交通は現代では想像を絶するほどに重要な交通手段であった。特に県土の八割以上が山地であり、海に開かれた南側以外の三方を山地に囲まれた土佐においては、他地域以上に各種の流通の手段として果たした役割が大きかったことは容易に想像できる。

今回の発掘調査の結果、3区より土手状の遺構や石列を検出している。まず、鏡川の流れに沿う形で土手状の遺構が存在しており、それより陸地側に水路状の遺構があり、さらに陸側に石列が造営されている。また、遺物として、京都産の緑釉陶器や、貿易陶磁である青磁などが出土していることから、この遺構は船着場であった可能性が大きい。調査区の関係上全貌を明らかにすることはできなかったが、調査区外にも展開していたと推測される。遺物から判断して10世紀前半に始まり中世へと続く時期に機能していたと推測され、平安時代に始まる船着場である可能性が考えられる。この遺構は、尾立遺跡の調査成果のひとつである1区2区の柱穴群や、まとめて出土した緑釉陶器などと時期を同じくし、また、この時期の周辺の遺跡の存在などからも、10世紀前後における尾立遺跡の重要性を、総合的な関係で捉えて考えていく必要性ができてくる。

船着場について考えていくうえで、尾立遺跡につながる鏡川、浦戸湾、土佐湾について見てみると、まず土佐湾についてだが、天候と黒潮の関係で波が荒く、交通の難所ではあったようで、古くは「日本書紀」天武天皇13年11月3日条に記述があったりする。紀貫之も承平4年（934）12月帰京にあたり、大湊（現南国市前浜）で滞在を余儀なくされ、「土佐日記」同5年1月4日5日に記してあり、10日も滞留している。出航しても土佐湾を乗り切ることは容易ではなかったようである。とはいっても、古代・中世には土佐湾は人々の往来や物質流通の重要な航路であり、上方との海上交通は甲浦（現安芸郡東洋町）から南下して室戸岬を回り、土佐湾に入って東より室津（現室戸市）、浦戸（現高知市）、その後、県内の西方の港に寄港している。甲浦に寄港する前には徳島県の幾つかの港に寄港しながら来ていると考えられる。

この土佐湾につながる浦戸湾について見てみると、浦戸湾は高知市南部に土佐湾が深く入り込んだ内海で、南北7kmで湾の南端は西から浦戸、東から種崎に挟まれた海峡を形づくり土佐湾につながる。北端は鏡川・国分川が流入する。湾周辺には五台山竹林寺・吸江寺・雪蹊寺・浦戸城跡などが点在し、浦戸湾を中心とする土佐の歴史の一端をうかがわせる。浦戸湾は古くはもっと大きく、現高知市の平地部の大部分は海底であったといわれ、また複雑に入り組んでいたという。現在は考えられないことだが、大津（現高知市）は内海における港であり、「土佐日記」承平4年（934）12月27日条に「おほつよりうらどをさしてこぎいづ」とみえ、国司紀貫之が都への帰途、大津より乗船、浦戸を経ている。四国山地の険しい山々に囲まれた土佐にとっては海路が重要な役割を果たし、浦戸湾も国衙の表玄関として用いられてきた。この入海と複雑な海岸線は、荒海太平洋を通過する

船の寄港地として利用され、室町時代には明との勘合貿易の際に、細川氏と界商人の貿易船は、瀬戸内海を大内氏に制圧されたため土佐沖を通過する航路をとり、浦戸などに寄港していた。

そして鏡川についてだが、全長31kmの河川の中流域の、この川が平野に開き始めようとするその場所に尾立遺跡が立地している。この周辺には古代から宗安寺や蓮台寺があり、これらと尾立遺跡との関係がうかがわれる。

船着場については、徳島県中島田遺跡などに類例がみられるが、今回の調査で尾立遺跡が鏡川中流域における流通の拠点であったことがある程度確認された。もし今回の調査で船着場の全貌が明らかになっていれば、古代の港・津としての尾立についてさらに多くの情報が得られていた可能性もある。今後の鏡川流域の調査の成果により河川交通と遺跡との関係を明らかにしていくことが重要な研究課題である。

2. 尾立遺跡と尾立遺跡出土の緑釉陶器について

尾立遺跡の段丘上から京都産の緑釉陶器がまとまって出土した。緑釉陶器自体の出土量は高知県全体で考えても多くなく、官衙や寺院など一部の遺跡から出土するにすぎない。県内における緑釉陶器の出土は、南国市の土佐国衙跡・土佐国分寺・田村遺跡群、野市町の深淵遺跡・曾我遺跡、土佐山田町のひびのきサウジ遺跡、春野町の山根・石屋敷遺跡、大方町の宮崎遺跡、中村市の風指遺跡などの例が挙げられる。最近では中村市の船戸遺跡の調査で緑釉陶器が出土している。⁽⁴⁾ 曾我遺跡では一箇所の遺跡から45点という県内ではもっとも大量の出土例がみられ、また土佐国衙跡でも多数の出土例はあるが、多くの場合は一箇所の遺跡から数点の緑釉陶器が出土するにすぎない。その中で当時（平安時代）の高級品であった緑釉陶器が10点程出土した尾立遺跡の位置付けをどう考えるべきか。また、尾立遺跡で出土した緑釉陶器はどういう物であるのか問題となってくる。

⁽⁵⁾ ここで出土した緑釉陶器は10点すべて同じ時期の、同じ生産地である。生産地は篠地域の黒岩1号窯であるらしい。時期は10世紀の前半、平安京土器編年ではⅡ期新になり900年頃から930年頃にあてはまる。同じ時期の洛西の小塩1号窯のものと特徴的には似ている部分もあるが、この調査で出土した緑釉陶器については篠地域産がその特徴より妥当であると考えられる。

⁽⁶⁾ 緑釉陶器は8世紀末に平安京の遠隔地摂津岸部で開始され、これに前後して平安京近郊の洛北地域でも生産が始まり、9世紀前半代には洛北地域で展開する。9世紀後半には、緑釉陶器の量産化に伴い、洛西地域にまで生産が拡大する。10世紀前半には、さらに篠地域へと展開する。生産のピークは2または3地区が操業していた9世紀後半から10世紀前半であり、10世紀後半には生産の終焉を迎える。この緑釉陶器の生産の流れの中で、尾立遺跡で出土している10世紀前半の物というと、ちょうど量産型の生産の時期で量産化に対応した粗雑化の進んだ特徴もある。

平安京近郊の緑釉陶器の特徴は削り出し高台で、全体の傾向としては平底・蛇の目から、輪高台に変遷する。素地は当初軟陶であるが、9世紀中頃から次第に須恵器化し硬陶に変わる。同じ頃、ヘラミガキ・ヘラケズリの省略化や、重ね焼き焼成となり、量産化に対応した粗雑化が進む。篠地域の生産は、技術的に洛西地域の系譜を引いたと推定できる。洛西地域の中で小塩1号窯の段階では全てが硬陶となり重ね焼きである。篠地域では、前山2・3号窯で生産が始まり、続いて黒岩1

号窯が操業する。碗、皿が主体で、陰刻花文はなく、全て硬陶である。⁽⁷⁾ここで平安京土器編年のⅡ期古からⅡ期新について見てみると、基本器形は前代のものを引き継ぐものもあるが細部で変化して、器形の多様性もやや減少する。体部中位に稜を持った碗、皿が出現するのもこの段階である。山城系の緑釉陶器には前代の技法を引き継ぎ、比較的丁寧に仕上げられたものがあるがその量は少ない。ヘラミガキが粗いものや省略されたもの、二次焼成時に直接重ねたものなどが多数を占め、また釉層の薄いものや底部外面の施釉を省く例が目立ってくる。素地も硬質で須恵器同様のものが主体になってくる。底部の形態は平高台の中央が上方に持ち上がったものが増え、Ⅱ期中以降に増加する蛇の目高台や輪高台も、高台端面の幅がⅡ期古以前のものとは異なり、削りも粗いものも多く、こうした傾向は全体としてみれば漸進的に進行するが、同時期の同生産地の製品にも常に少量ながら良質な製品もあり、これらは工程の省略や原料の調整などにより生産者が意図的に作り分けた結果生じた品質差と理解される。この段階に至って山城系の緑釉陶器は大きな品質幅を持つようになり、精品の占める比率が低いと言えよう。生産窯は遅くともⅡ期中の早い段階で平安京西郊の大原野地区に拡大しており、Ⅱ期新にはさらに篠地区が緑釉陶器の生産を開始する。この時点では平安京北郊の幡枝地区の生産もまだ継続しており、平安京近傍の三箇所が生産が行なわれていたことになる。山城系の緑釉陶器生産の最盛期と言える。Ⅱ期新の後半段階からⅢ期古にかけて施釉陶器をめぐる状況に新たな変化が生じる。器形の種類が減少し、深みのある碗とやや小型化した皿が中心になる。ほとんどの緑釉陶器にはヘラミガキ調整が施されず、全体的に品質は低下傾向を示して、山城系緑釉陶器の生産は篠窯に残るが、製品が小型化し、釉薬の発色も悪く底部外面に施釉しない粗製品が増える。篠窯の生産もⅢ期中には終熄する。

以上のような時期の緑釉陶器が尾立遺跡において消費されているのだが、この時代尾立の位置付けはどのようなものかということだが、今回の調査区を含む段丘上に広がる平坦な地形、北約100mにある土塁状の地形などから遺跡地の北方への広がりが予想されるのだが、今回の調査では緑釉陶器の消費場所についての明確な位置付けは難しく、今後の調査における課題とされる。

3. 尾立遺跡と周辺の遺跡との関連・・・高知市蓮台寺等・・・

尾立遺跡の近くには二箇所の古い寺院が在り（一箇所は記録が残っており）少し見てみると、まず現存する寺院は、鏡川を挟んで尾立遺跡の対岸、鏡川の西岸の丘陵地に所在する宗安寺である。この寺院については、天和年間（1681～84）の火災で旧記は焼失しているが、寺伝では大同2年（807）の開創といい、古くから、高知市長浜の雪隠寺、高知市五台山の吸江寺と並ぶ土佐の臨済宗三大禅寺の一つであった。戦国時代以降も長宗我部氏に保護されたようで、天正17年（1589）の地検帳では宗安寺村のほとんどが宗安寺分であり、尾立村・朝倉村などにも寺領を有している。

そして、記録に残されているもう一箇所の寺院についてだが、尾立遺跡から北東に、鏡川の支流大筋川を上流に遡ると、標高299mの鴻ノ森の北西に蓮台地区がある。四方を山に囲まれた所に約30件の民家が点在している。この集落の中、鴻ノ森の北麓にかつて密教系の山岳寺院が存在していたことが蓮台寺の梵鐘の銘文の拓本から明らかになっている。それによると、⁽⁸⁾天曆10年（956）の2月にこの蓮台寺の鐘が造られており、他の寺院の例からも、最後に梵鐘ができて寺が完成すると

いうことより、蓮台寺の落成が天暦10年の2月ということになる。そして、「蓮台村切図」にある地名や「南路志」の記述などから次のことがわかってくる。入り口に仁王門があり、曲がりくねった山の参道が本堂へと続く。参道の両側には多くの坊があった。「南路志」によると坊は12あり、それぞれの坊の僧侶が共同して蓮台寺を運営していたということになる。

平安時代には最澄や空海が天台宗や真言宗を開宗し、この時代から寺は平地ではなく山の傾斜地に造られるようになり、天台宗は比叡山、真言宗は高野山に本山を置いている。こうした山岳寺院といわれるものが蓮台にも造られたということである。

今は「堂の本」と呼ばれる平坦地に神社が残っており、この神社は「蓮台村切図」ではハヤノミコ社、「南路志」では三王権現となっており、ハヤノミコとは早尾の神で、日吉山王21社の1社で、三王権現とは山王権現で日吉神社のことを言う。日吉神社は比叡山の鎮守であり、蓮台寺は天台宗の寺ということでなければならない。蓮台寺は平安時代には天台宗の寺として出発しているのだが、鎌倉時代には禅宗の寺に変わっている。「長宗我部地検帳」ではすでに蓮台寺はなくなっており、仁王門のあったところには惣門ヤシキの地名が付いている。つまり長宗我部元親の時代には仁王門の跡を惣門と呼んでいる。寺の門の呼び名と宗派の関係より、天台宗は仁王門、惣門と呼ぶのは禅宗の寺に限られることより、長宗我部元親以前の時代に、蓮台寺は天台宗から禅宗に変わっていたということになる。

さて、平安時代に造られたこれらの寺院の存在は、尾立遺跡の性格を考える上で重要となる。尾立遺跡の位置は宗安寺にとっては対岸、蓮台地区にとっては鏡川からの唯一の進入ルートであり、10世紀以降の尾立遺跡が寺院へ物資を供給する重要な役割を果たしていたと想定される。あるいは山岳寺院蓮台寺や宗安寺といった寺院自体が尾立周辺をその掌中に収めていた可能性も十分に考えられ、古代の港・交通の要衝と寺院勢力の結びつきを考えていく上で興味深い遺跡となる。

この頃になると仏教についても、従来の官的な統制から、これまでとは別のものを求め、比較的自由になり、勢力を持ち始めた寺院も多く、その多くが山岳寺院という形態を取ってきている。文献・伝承共に残っていない例の多い山岳寺院の姿が最近徐々に増え始めている調査により明らかになり始めている。

尾立遺跡出土の遺物の時代と、蓮台寺の存続する時代との共通性というものも興味深いものがある。これらのことは考古学・地理学及び関連諸科学の連携により明らかにされつつある。今後も考古学のみならず地理学や文献史学との連携により歴史の実像を明らかにしていくことが今後の課題であろう。

[註]

- (1) 『高知県の地名』日本歴史地名大系40巻 平凡社 1983年
- (2) 『39高知県』角川日本地名大辞典 角川書店 1986年
- (3) 福家清司 『中島田遺跡 南島田遺跡』県道徳島鳴島線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 徳島県教育委員会 1989年
- (4) 高橋啓明・吉原達生 『曾我遺跡発掘調査報告書』 野市町教育委員会 1989年

- (5) (財)京都市埋蔵文化財研究所 平尾政幸氏の御教示による。
- (6) 上村和直 「平安京周辺の施釉陶器生産」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東3施釉陶器－』 古代の土器研究会 1994年
- (7) 平尾政幸 「緑釉陶器の変質と波及」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東3施釉陶器－』 古代の土器研究会 1994年
- (8) 岡本健児 『ものがたり考古学－土佐国辺路五十年－』 (財)高知県文化財団歴史民俗資料館 1994年

出土遺物法量表

〔() は復元及び残存値〕

挿図 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	外 内(断)	出 土 地 区 出 土 遺 構 番 号	備考
			口径	器高	胴径	底径				
1	土師質土器	小 皿		(0.7)		4.6	灰白色		1-2区南 1	
							〃		P14	
2	〃	小 皿		(1.2)		6.0	にぶい黄橙色		2-1区南 1	
							暗灰黄色			
3	〃	小 皿	9.3	1.6		7.2	にぶい橙色		2-1区南 3	
							〃		SD2	
4	〃	小 皿	9.2	2.0		5.8	にぶい橙色		2-1区南 2	
							〃			
5	〃	小 皿		(1.7)		8.0	にぶい橙色		2-1区南 2	
							〃			
6	〃	小 皿	9.6	1.4		7.2	浅黄橙色		2-1区南 3	
							〃		SD2	
7	〃	小 皿	10.0	1.9		7.4	浅黄橙色		2-1区南 2	
							〃			
8	〃	小 皿		(0.9)			浅黄橙色		2-1区南 3	
							〃			
9	〃	小 皿	10.2	1.4		7.0	にぶい橙色		2-1区南 3	
							〃		SD2	
10	〃	小 皿	9.2	1.7		6.4	にぶい橙色		2-1区南 2	
							〃			
11	〃	小 皿		(1.3)			橙色		2-1区南 3	
							〃			
12	〃	小 皿	9.4	1.5		6.4	にぶい橙色		2-1区南 3	
							〃		SD2	
13	〃	小 皿	9.8	1.7		7.0	にぶい橙色		2-1区南 2	
							〃			
14	〃	小 皿	9.4	1.8		6.0	橙色		2-1区南 2	
							〃			
15	〃	小 皿	8.3	1.6		5.6	橙色		2-1区南 2	
							〃			
16	〃	小 皿	9.8	2.1		7.2	にぶい橙色		2-1区南 3	
							〃		SD2	
17	〃	小 皿	9.8	1.5		7.2	にぶい黄橙色		2-1区南 2	
							〃			
18	〃	小 皿	9.2	1.9		6.6	にぶい橙色		2-1区南 2	
							橙色			
19	〃	小 皿	9.0	1.9		6.4	橙色		2-1区南 3	
							〃		SD2	
20	〃	小 皿	8.6	2.0		5.8	浅黄橙色		2-1区南 2	
							〃			

出土遺物法量表

〔() は復元及び残存値〕

挿図 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	外	出 土 地 区 出 土 遺 構 番 号	備 考
			口径	器高	胴径	底径		内(断)		
21	土師質土器	小 皿	8.4	1.8		5.2	にぶい橙色		2-1区南 3 SD2	
							〃			
22	〃	小 皿	11.0	1.5		8.4	にぶい橙色		2-1区南 3	
							〃			
23	〃	小 皿	8.8	1.3		5.4	橙色		2-1区南 2	
							〃			
24	〃	小 皿	11.2	1.6		7.6	にぶい橙色		2-1区南 3 SD2	
							〃			
25	〃	小 皿	11.6	(2.0)			黒色		2-4区	
							〃			
26	〃	小 皿	9.2	1.6		5.2	橙色		2-1区南 2	
							〃			
27	〃	小 皿	11.7	2.0		8.2	にぶい橙色		2-1区南 3 SD2	
							〃			
28	〃	小 皿	11.0	1.6		6.6	浅黄橙色		2-1区南 2	
							〃			
29	〃	小 皿	9.4	1.7		6.6	橙色		2-1区南 2	
							〃			
30	〃	小 皿	9.2	1.9		7.0	浅黄橙色		2-1区南 3 SD2	
							〃			
31	〃	小 皿	10.0	1.7		7.0	浅黄橙色		2-1区南 3	
							〃			
32	〃	小 皿	10.4	1.9		7.2	にぶい黄橙色		2-1区南 2	
							〃			
33	〃	小 皿	9.6	1.5		7.4	にぶい橙色		2-1区南 3	
							〃			
34	〃	小 皿	14.4	1.6		10.4	にぶい橙色		2-1区南 3	
							〃			
35	〃	小 皿	9.6	1.6		6.0	浅黄橙色		2-1区南 2 SK1	
							〃			
36	〃	小 皿	9.0	1.5		6.8	灰白色		2-1区南 2 SK1 No. 1	
							〃			
37	〃	小 皿	9.0	1.4		6.0	にぶい黄橙色		2-1区南 2 SK1	
							〃			
38	〃	小 皿	9.8	1.5		5.4	浅黄橙色		2-1区南 2 SK1	
							〃			
39	〃	小 皿		(1.2)		6.0	淡黄色		2-1区南 3 SK1・3	
							〃			
40	〃	小 皿	8.2	1.5		4.4	にぶい橙色		2-1区南 2 SK1	
							〃			

出土遺物法量表

〔() は復元及び残存値〕

挿図 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	外	出 土 地 区 出 土 遺 構 番 号	備考
			口径	器高	胴径	底径		内(断)		
41	土師質土器	小 皿	8.8	1.6		5.0	にぶい橙色		2-1区南 2	
							〃			
42	〃	小 皿	9.6	2.2		7.4	にぶい橙色		2-1区南 2	
							〃			
43	〃	小 皿	8.0	2.0		7.0	にぶい橙色		2-1区南 2	
							〃			
44	〃	小 皿	9.8	1.2		7.0	橙色		2-1区南 2	
							〃			
45	〃	小 皿	9.2	1.7		3.5	浅黄橙色		2-1区南 2	
							〃			
46	〃	小 皿	9.6	(2.1)		6.8	橙色		2-1区南 2	
							〃			
47	〃	小 皿	9.2	2.1		7.4	橙色		2-1区南 2	
							〃			
48	〃	坏	11.5	3.2		4.2	橙色		1-2区北	
							〃			
49	〃	坏	9.4	2.3		6.7	浅黄橙色		2-1区南 2	
							〃			
50	〃	坏	12.8	(2.8)			にぶい橙色		2-1区南 2	
							〃			
51	〃	坏	11.8	2.5		4.4	橙色		1-2区北	
							〃			
52	〃	坏	13.4	(3.2)			にぶい橙色		2-1区南 2	
							〃			
53	〃	坏	13.8	4.2		7.2	橙色		2-1区南 2	
							〃			
54	〃	坏		(1.5)		6.4	黒色		1-2区北	
							淡黄色			
55	〃	坏		(2.2)		8.2	灰白色		1-2区南 1	
							〃			
56	〃	坏	14.2	3.2		6.8	浅黄橙色		2-1区南 2	
							〃			
57	〃	坏		(2.0)		7.6	にぶい黄橙色		2-1区南 2	
							〃			
58	〃	坏		(2.5)		5.4	浅黄橙色		1-2区南 2	
							〃			
59	〃	坏	14.4	3.2		10.0	浅黄橙色		2-1区南 2	
							〃			
60	〃	坏	13.6	3.1		7.0	橙色		1-3区 1	
							〃			

出土遺物法量表

〔() は復元及び残存値〕

挿図 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	外 内(断)	出 土 地 区 出 土 遺 構 番 号	備 考
			口径	器高	胴径	底径				
61	土師質土器	坏		(2.7)		7.8	にぶい橙色		2-1区南 2	
							〃		SK 1 No. 4	
62	〃	坏		(2.5)		4.8	浅黄橙色		2-1区南 2	
							〃		SK1	
63	〃	坏		(1.7)		8.2	にぶい黄橙色		2-1区南 2	
							〃			
64	瓦質土器	坏		(1.4)		6.2	黒色		2-1区南 2	
							〃			
65	土師質土器	坏		(3.0)		7.2	にぶい橙色		1-3区 2	
							〃			
66	〃	坏		(1.3)		7.6	浅黄橙色		2-1区南 2	
							にぶい橙色		SK1 No. 2	
67	〃	坏		(3.4)		8.0	にぶい橙色		2-1区南 2	
							〃			
68	〃	坏	13.4	(2.3)			橙色		2-1区南 3	
							〃		P13	
69	〃	坏	14.8	(2.8)			橙色		1-3区 2	
							浅黄橙色			
70	〃	坏	14.0	2.9		8.8	橙色		2-1区南 3	
							〃		P13	
71	〃	坏		(2.7)		7.8	にぶい橙色		2-1区南 2	
							〃			
72	〃	坏		(1.8)		7.6	にぶい橙色		2-1区南 3	
							〃		SD2	
73	〃	坏	14.0	3.9		8.4	にぶい橙色		2-1区南 3	
							〃		SD2	
74	〃	坏		(1.8)		9.0	橙色		1-2区南 3	
							〃			
75	〃	坏		(3.9)		6.4	にぶい橙色		2-1区南 2	
							〃			
76	〃	坏		(2.1)		7.8	にぶい黄橙色		2-1区南 3	
							〃		SD2	
77	〃	坏		(1.4)		8.4	にぶい橙色		2-1区南 2	
							〃			
78	〃	碗	18.0	(4.2)			浅黄橙色		2-1区南 2	
							〃			
79	瓦質土器	碗	15.2	(2.6)			灰色		1-2区南 2	
							〃		P1	
80	土師質土器	碗	14.8	4.0			灰白色		2-1区南 2	
							〃			

出土遺物法量表

〔() は復元及び残存値〕

挿図 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	外	出 土 地 区 出 土 遺 構 番 号	備考
			口径	器高	胴径	底径		内(断)		
81	土師質土器	碗	15.0	(2.9)			浅黄橙色		2-1区南2	
							〃			
82	〃	碗	15.6	4.7		6.2	淡黄色		2-1区南2 P3 No. 1	
							〃			
83	〃	碗	17.0	5.4		7.0	淡黄色		2-1区南2 SK1	
							浅黄橙色			
84	〃	碗	16.6	4.9			浅黄橙色		2-1区南2	
							〃			
85	〃	碗	18.6	(5.4)			浅黄橙色		2-1区南2	
							〃			
86	〃	碗	15.4	(4.4)			灰白色		2-1区南2 SK1 No. 3	
							〃			
87	〃	坏		(2.1)		6.6	橙色		1-2区北 P11	
							〃			
88	〃	碗		(2.0)		6.5	浅黄橙色		2-1区南2 SK1	
							〃			
89	土錘	—	全長 (4.1)	全幅 1.2	孔径 0.4	重量g (5)	にぶい橙色		1-2区北 P11	
							〃			
90	〃	—	全長 (3.7)	全幅 1.2	孔径 0.4	重量g (5)	橙色		1-3区1 P13	
							〃			
91	〃	—	全長 (4.2)	全幅 1.2	孔径 0.4	重量g 5	浅黄橙色		1-3区2	
							〃			
92	〃	—	全長 (4.8)	全幅 1.1	孔径 0.4	重量g 7.5	浅黄橙色		2-1区南2	
							〃			
93	〃	—	全長 (4.8)	全幅 1.2	孔径 0.4	重量g 7	にぶい黄橙色		2-1区南1	
							〃			
94	〃	—	全長 (2.2)	全幅 1.2	孔径 0.4	重量g (5)	浅黄橙色		2-1区南2	
							〃			
95	〃	—	全長 (2.6)	全幅 1.1	孔径 0.4	重量g 2.5	浅黄橙色		2-1区南2	
							〃			
96	〃	—	全長 (3.1)	全幅 1.2	孔径 0.5	重量g (5)	浅黄橙色		2-1区南1 SD1	
							〃			
97	〃	—	全長 (4.2)	全幅 1.6	孔径 0.5	重量g (9)	灰白色		2-1区南1	
							〃			
98	〃	—	全長 (3.0)	全幅 8.5	孔径 0.35	重量g (7)	黄灰色		2-1区南1	
							〃			
99	〃	—	全長 6.0	全幅 1.8	孔径 0.5	重量g 21	にぶい黄橙色		2-1区南1 SD1	
							〃			
100	〃	—	全長 (4.2)	全幅 1.7	孔径 0.6	重量g 9	灰白色		2-1区南1 SD1	
							〃			

出土遺物法量表

〔() は復元及び残存値〕

挿図 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	外 内(断)	出 土 地 区 出 土 遺 構 番 号	備 考
			口径	器高	胴径	底径				
101	土錘	――	全長	全幅	孔径	重量g	灰白色		2-1区南1	
			3.7	1.6	0.4	10	〃		SD1	
102	〃	――	全長	全幅	孔径	重量g	浅黄橙色		2-1区南1	
			(4.2)	1.0	0.35	4	〃			
103	土師質土器	底部円盤	全長	全幅	全厚		にぶい黄橙色		1-4区	
			5.0	5.1	1.9		〃			
104	〃	底部円盤	全長	全幅	全厚		にぶい黄橙色		2-1区南2	
			5.4	5.2	1.6		〃		SK1 No. 7	
105	〃	底部円盤	全長	全幅	全厚		にぶい橙色		2-1区南2	
			4.9	5.0	1.1		〃		SK1 No. 2	
106	〃	皿底部 (穿孔有り)		(1.2)		6.4	黄橙色		2-1区南1	
							〃			
107	鉄製品	釘	全長	全幅	全厚	重量			2-3区	
			6.7			4.3g				
108	〃	釘	全長	全幅	全厚	重量			2-3区	
			6.7			7.1g				
109	キセル	――	全長	全幅	全厚	重量			2-1区南2	
			(3.5)			2.2g			P5	
110	緑釉陶器	碗		(2.5)			浅黄色		2-1区南2	
							〃			
111	〃	碗		(2.3)			オリーブ黄色		2-1区南2	
							〃			
112	〃	碗		(1.8)			オリーブ黄色		2-1区南2	
							〃			
113	〃	碗	14.4	(2.0)			浅黄色		2-1区南3	
							〃		東側	
114	〃	碗		(1.7)		6.1	オリーブ黄色		2-1区南2	
							淡黄色			
115	〃	碗		(1.7)		6.4	オリーブ黄色		2-1区南3	
							〃		東側	
116	〃	碗		(2.1)		5.0	浅黄色		2-1区南2	
							〃			
117	〃	碗		(2.1)		5.7	オリーブ黄色		2-1区南2	
							〃		東側	
118	青磁	碗		(2.3)			オリーブ灰色		2-1区南2	
							〃			
119	〃	碗		(3.4)			オリーブ灰色		1-2区南3	
							〃		SK2	
120	〃	碗	(12.6)	(2.9)			オリーブ灰色		2-1区南2	
							〃			

出土遺物法量表

〔() は復元及び残存値〕

挿図 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	外	出 土 地 区 出 土 遺 構 番 号	備考
			口径	器高	胴径	底径		内(断)		
121	青磁	碗	14.2	(2.5)			オリーブ灰色		1-2区北	
							〃		P8	
122	〃	碗		(4.0)			オリーブ黒色		1-3区 2	
							〃			
123	白磁	碗		(1.9)		7.6	灰白色		2-3区	
							〃			
124	陶器	碗	11.7	3.6		4.3	灰白色		1-4区	
							オリーブ黄色		1-2区北	
125	青磁	碗	12.8	(1.8)			オリーブ灰色		1-1区	
							〃			
126	陶器	皿		(2.1)			灰白色		2-1区南 2	
							〃			
127	須恵器	碗		(4.2)			灰黄色		2-1区南 2	
							〃			
128	染付	碗		(2.2)		6.0	明緑白色		1-1区	
							〃			
129	須恵器	壺	9.4	(8.0)			淡黄色		1-3区 2	
							〃			
130	土師質土器	壺		(4.7)	8.8		にぶい黄橙色		1-2区南 1	
							浅黄色		東壁	
131	須恵器	――		(2.7)		6.8	灰白色		2-1区南 3	
							〃			
132	土師質土器	甕		(5.4)			橙色		1-2区南 2	
							灰褐色		P6	
133	〃	羽釜	24.0	(3.3)			浅黄橙色		2-1区南 2	
							〃			
134	〃	羽釜	21.6	(5.4)			にぶい橙色		2-1区南 2	
							〃			
135	〃	羽釜	21.0	(3.7)			浅黄橙色			
							にぶい黄橙色			
136	瓦質土器	鍋	19.0	(3.4)			灰色		1-2区南 2	
							〃		P7	
137	〃	鍋	22.0	(5.1)			灰色		1-3区 2	
							〃			
138	〃	鍋	19.0	(6.7)			灰色		1-2区南 2	
							〃		P5	
139	〃	鍋	15.8	(6.0)			灰色		1-2区南 2	
							淡黄色		P5	
140	〃	鍋	20.8	(3.8)			灰色		1-3区 2	
							〃		1-2区北	

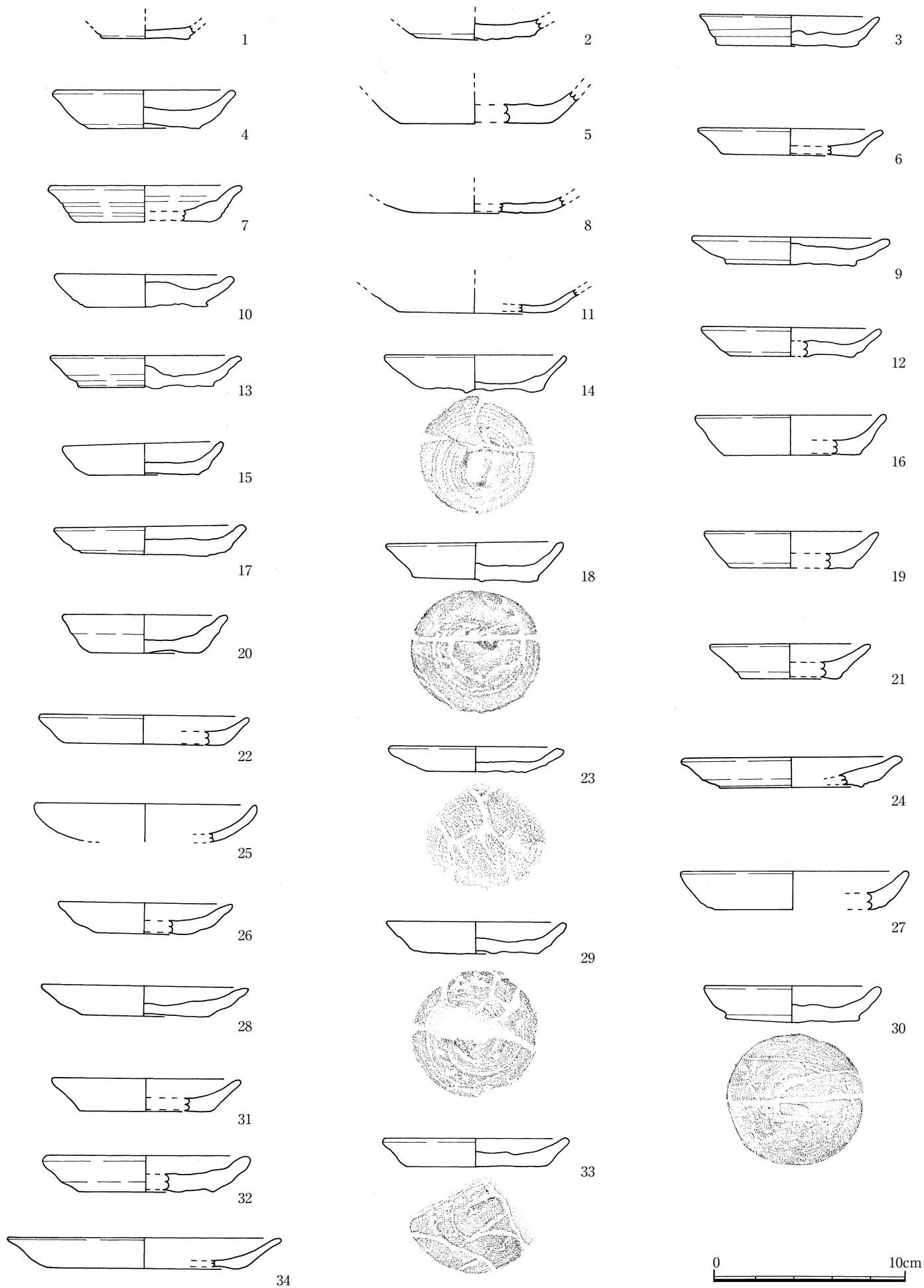


Fig.34 出土遺物実測図

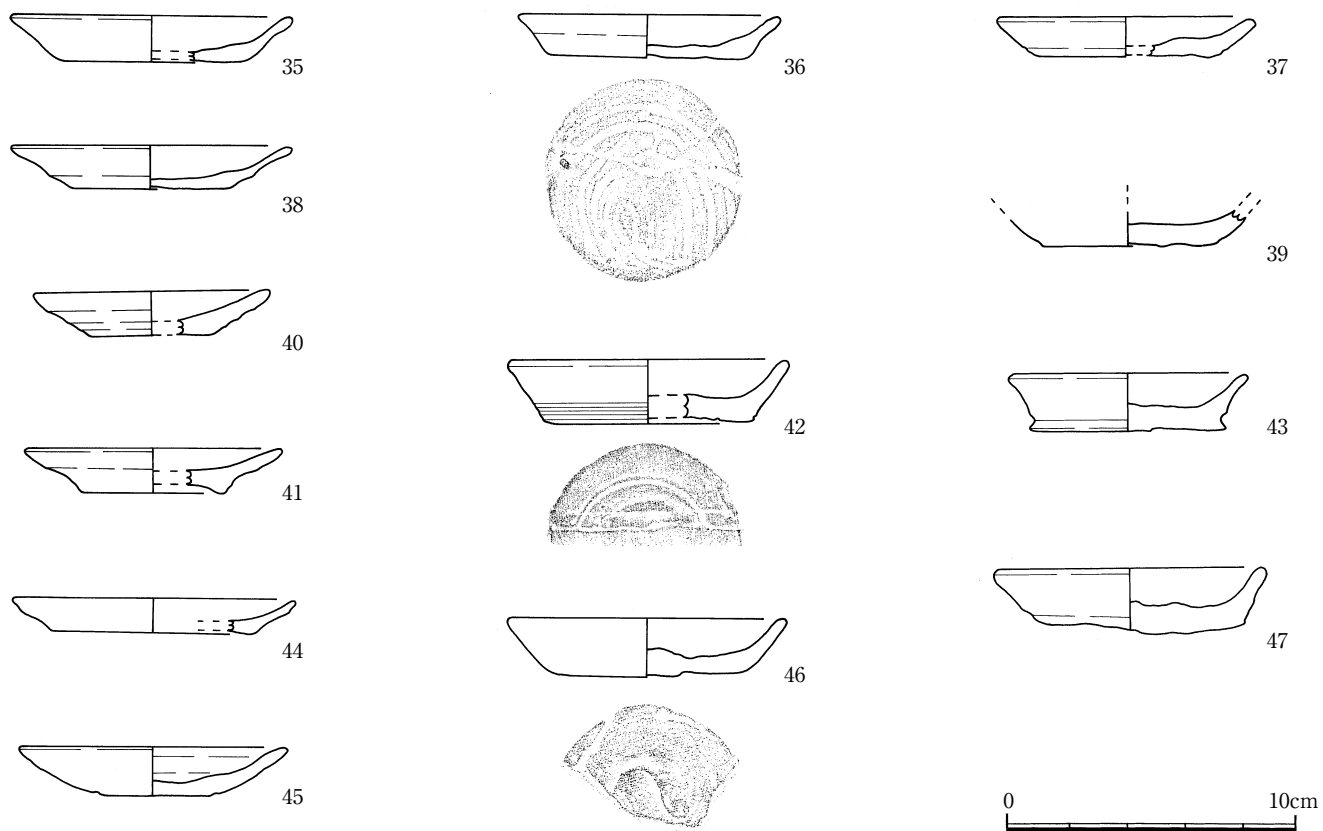


Fig.35 出土遺物実測図

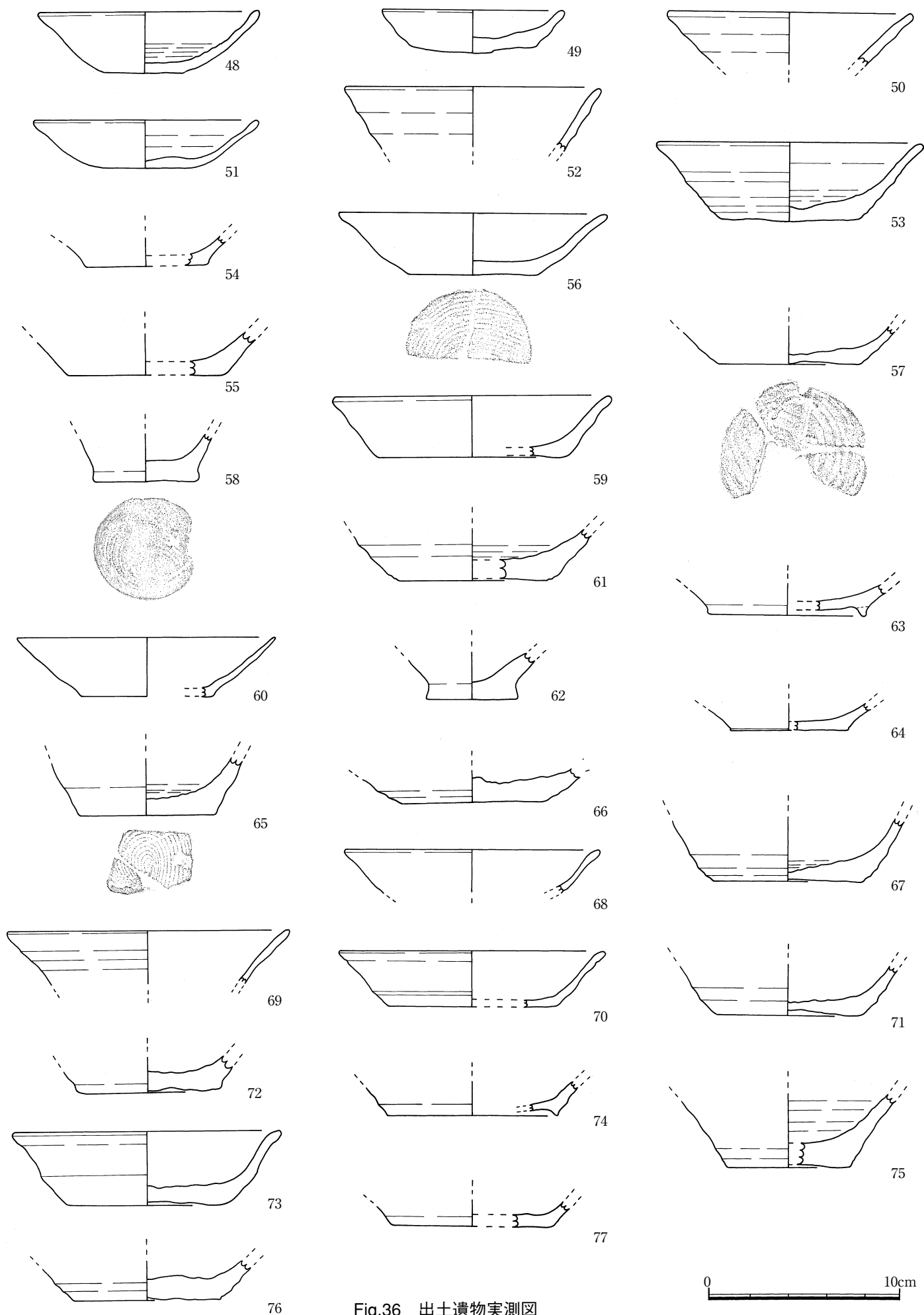


Fig.36 出土遺物実測図

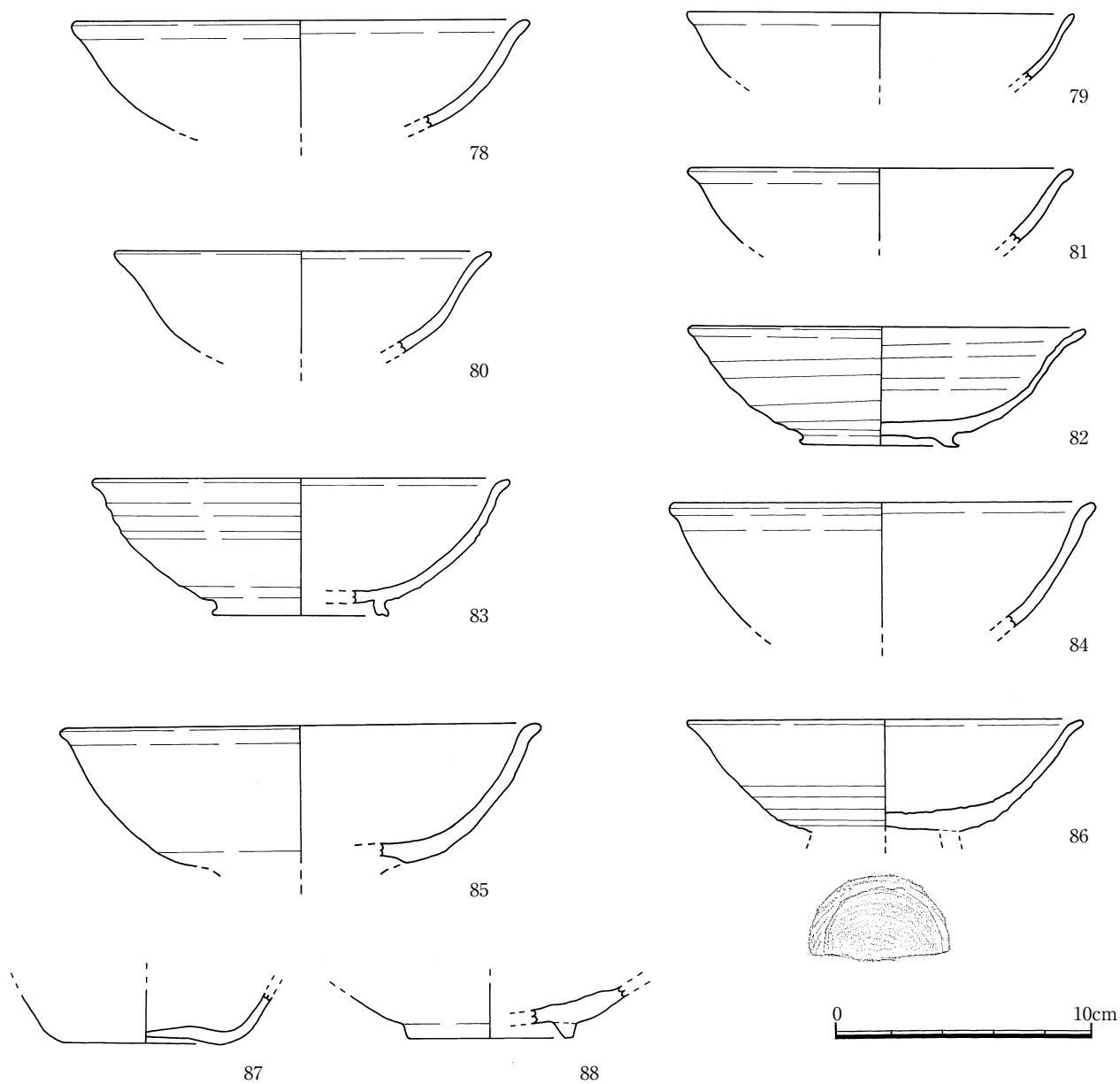


Fig.37 出土遺物実測図

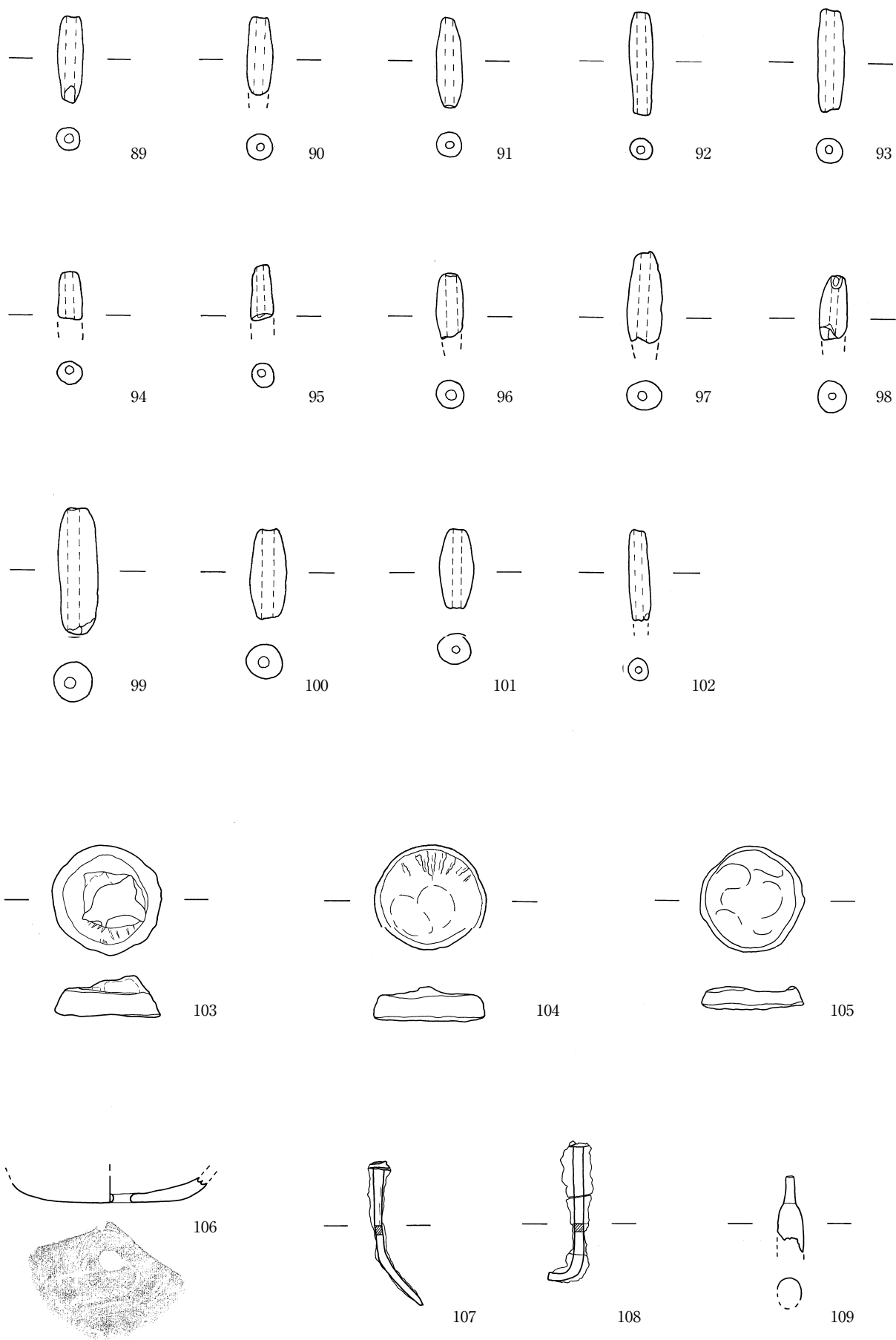


Fig.38 出土遺物実測図



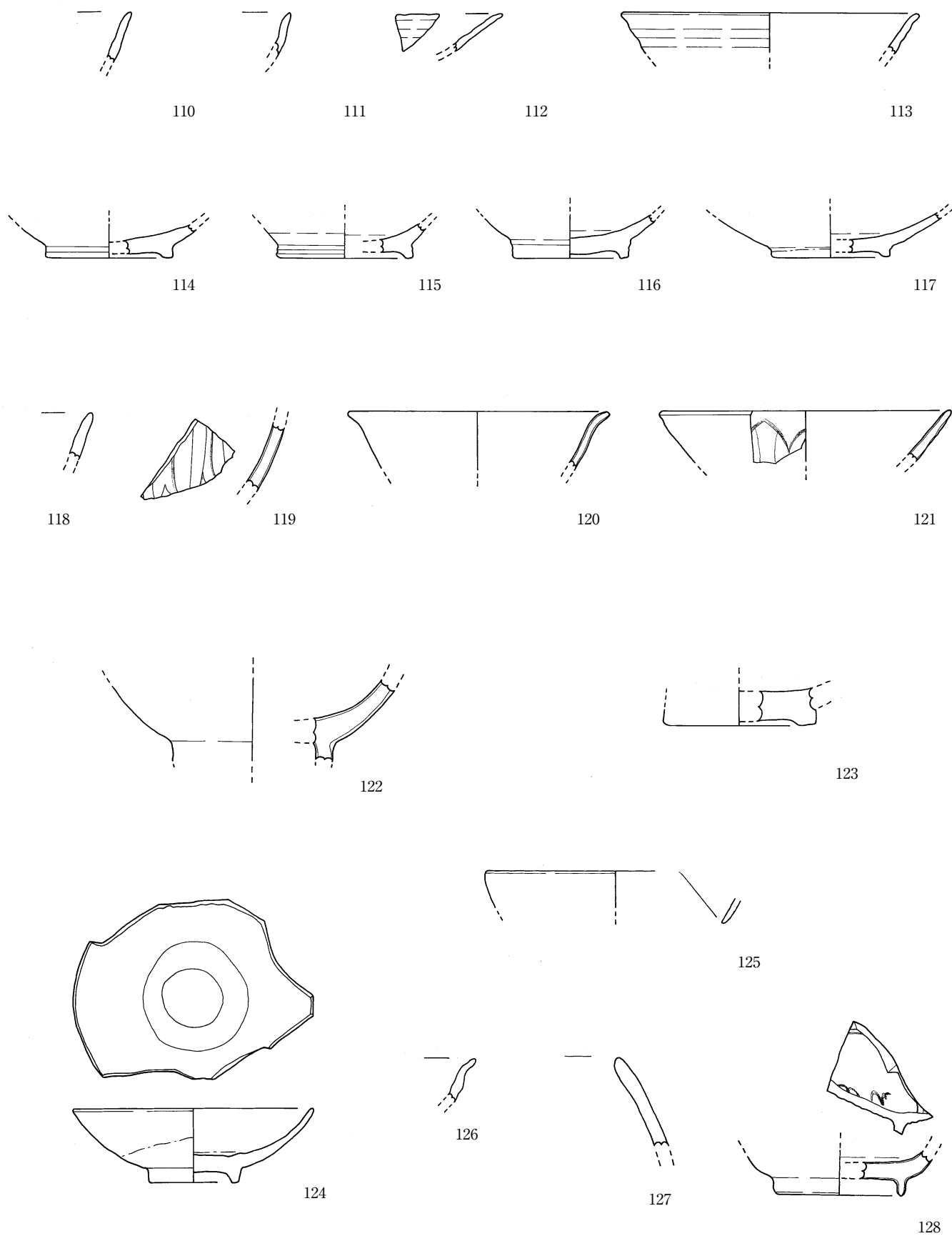


Fig.39 出土遺物実測図

0 10cm

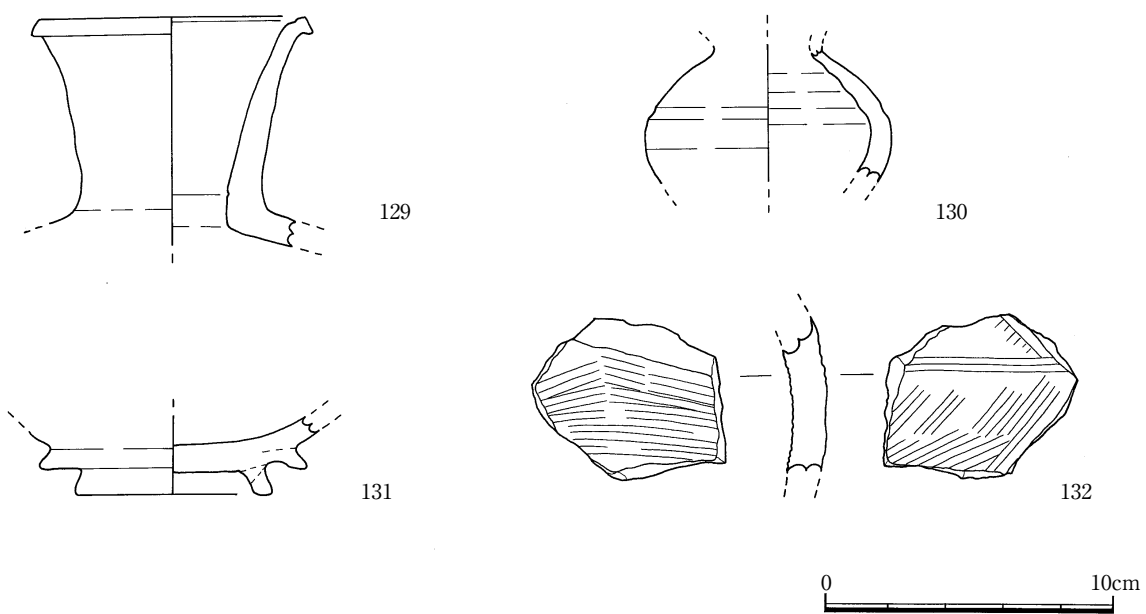
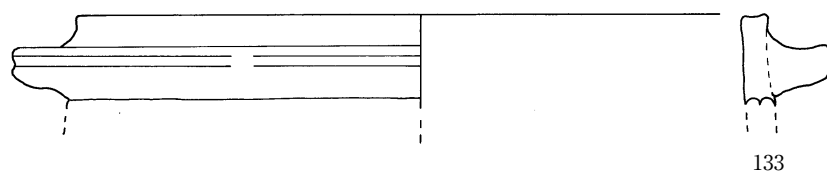
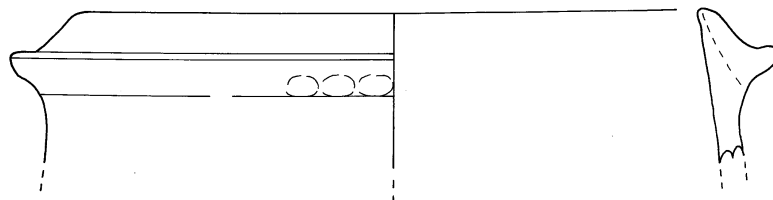


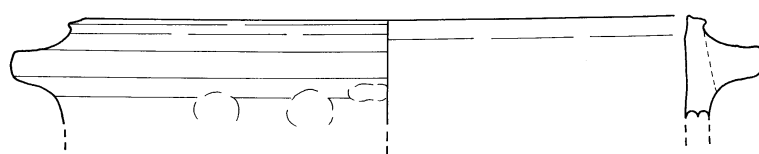
Fig.40 出土遺物実測図



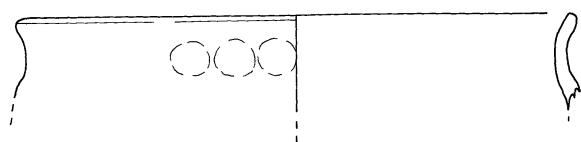
133



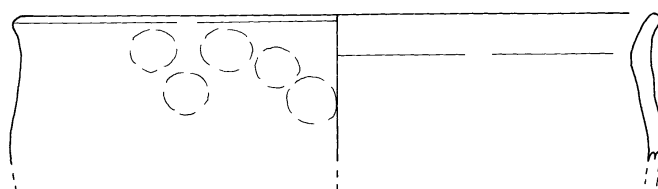
134



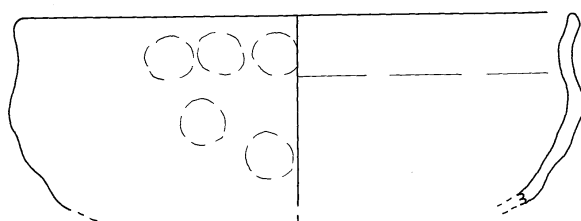
135



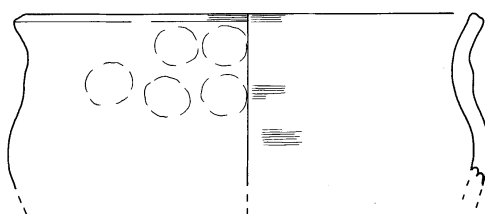
136



137



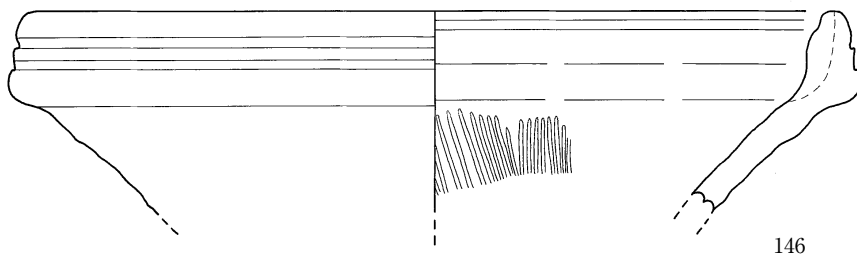
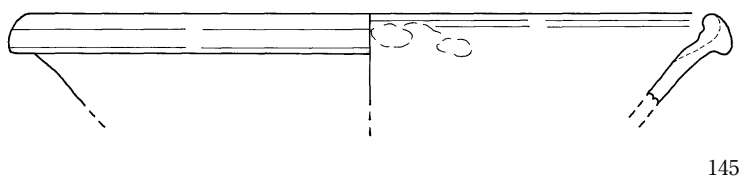
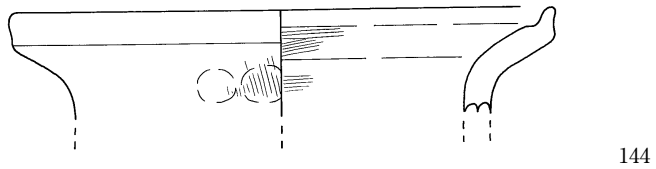
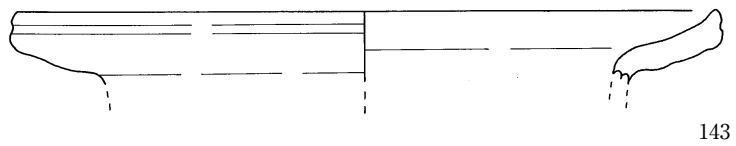
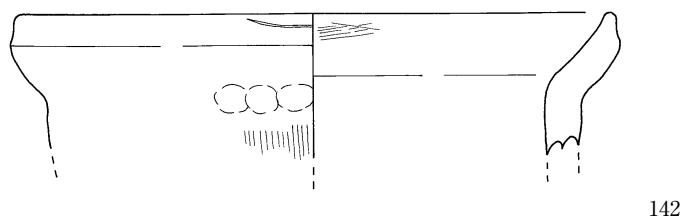
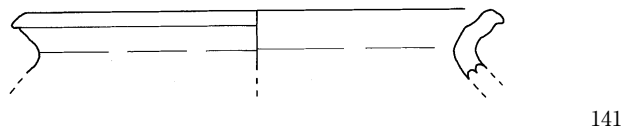
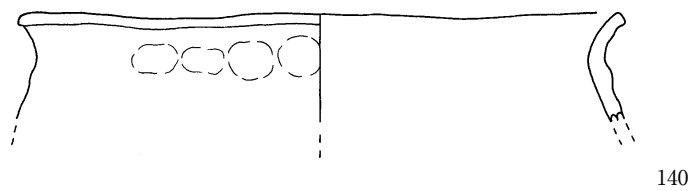
138



139

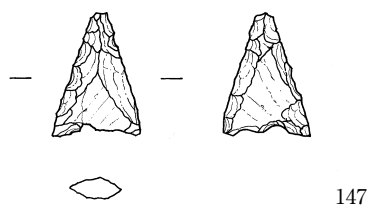
Fig.41 出土遺物実測図

0 10cm

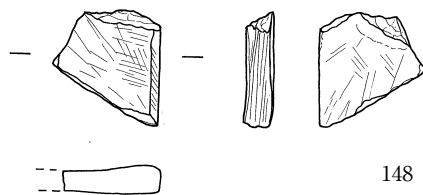


0 10cm

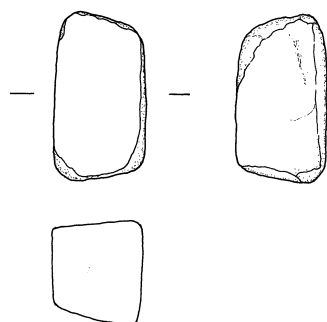
Fig.42 出土遺物実測図



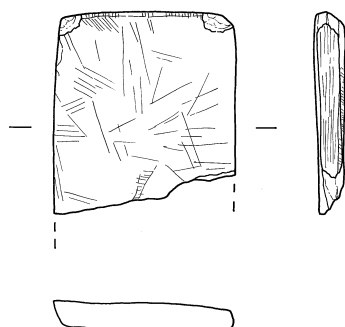
147



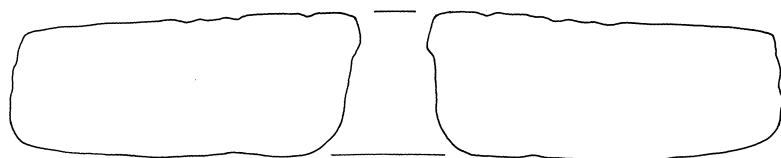
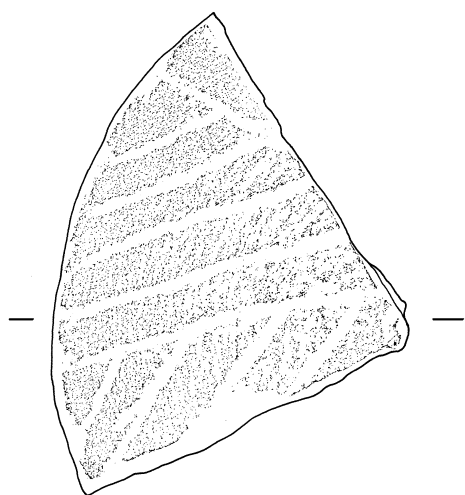
148



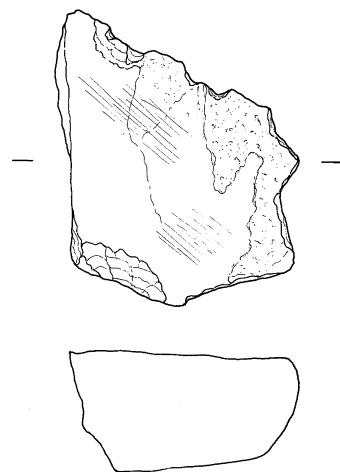
149



150



151



152



Fig.43 出土遺物実測図

写真図版



発掘調査前風景



3-3区TR1発掘状況



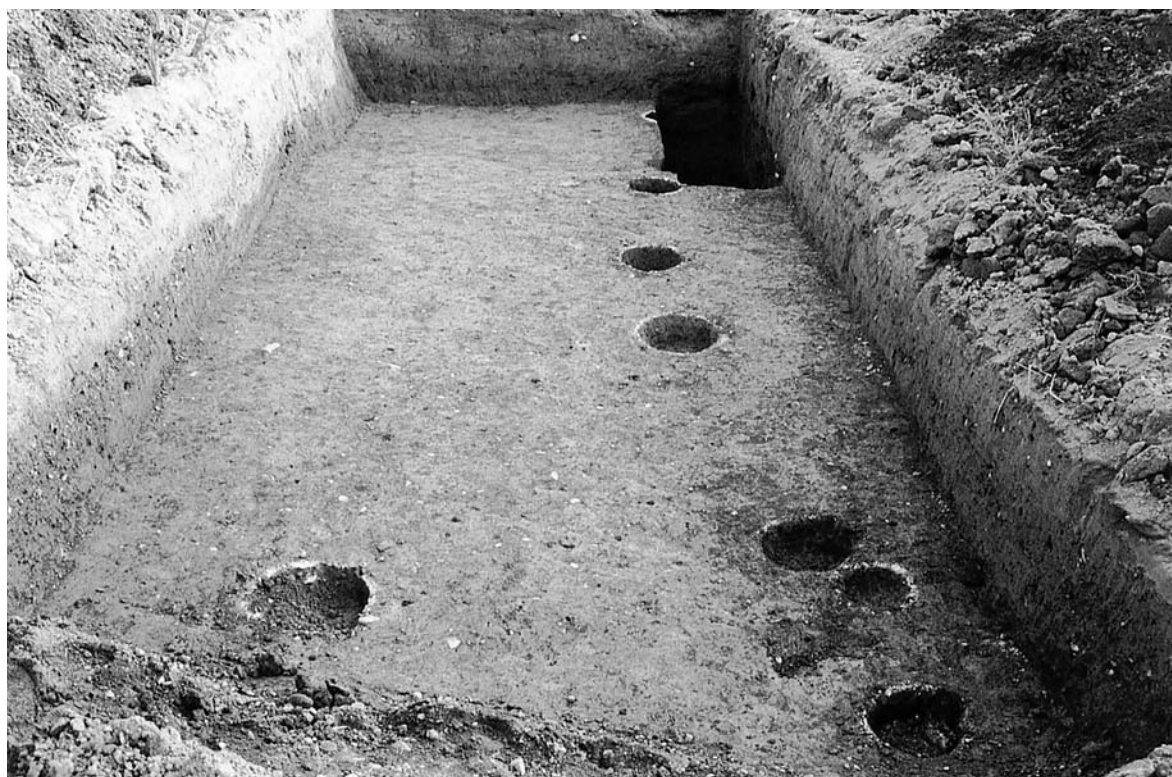
3-2区TR2検出状況



3-2区TR2検出状況



3-2区TR2検出状況



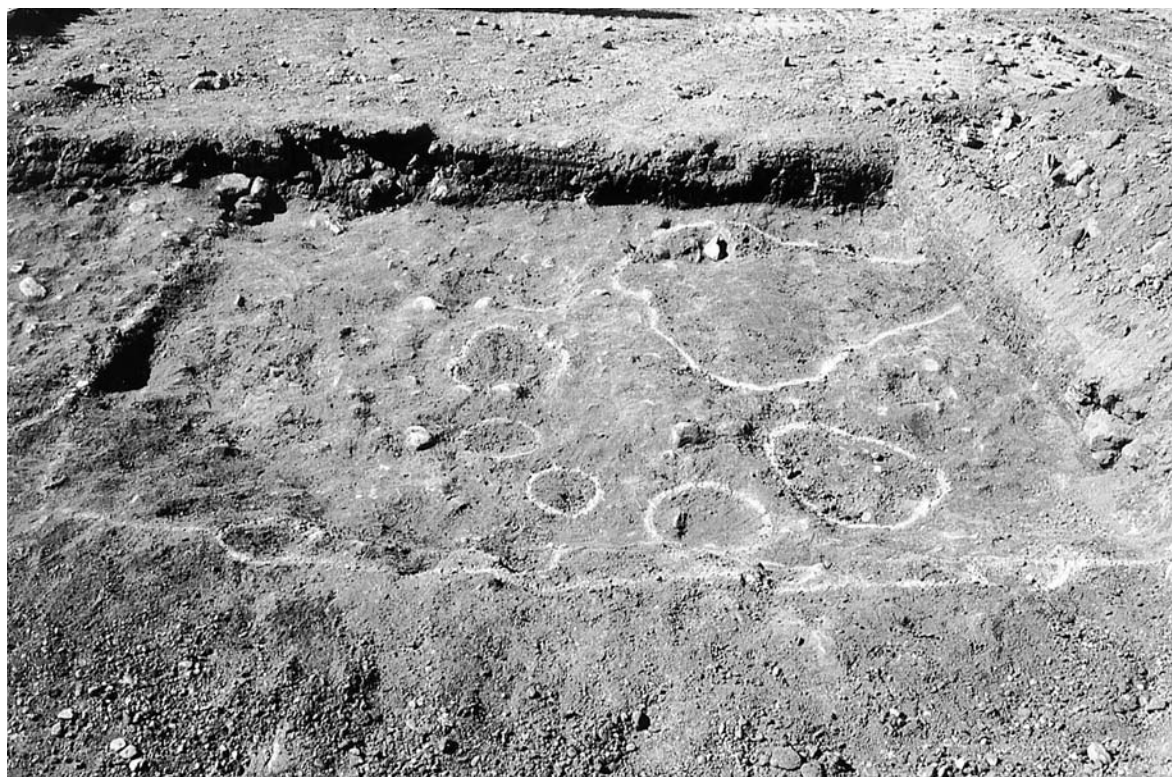
3-2区TR2完掘状況



3-2区TR2検出状況



3-2区TR2完掘状況



2-4区TR3検出状況



2-4区TR3完掘状況



2-4区TR3完掘状況



2-4区TR3集石遺構



2-3区TR4検出状況



2-3区TR4発掘状況



1-2区TR5完掘状況



3-1区石列遺構状況



3-1区石列遺構状況



3-1区完掘状況



3-2区完掘状況



3-2区完掘状況



3-2区完掘状況



遺物出土状況



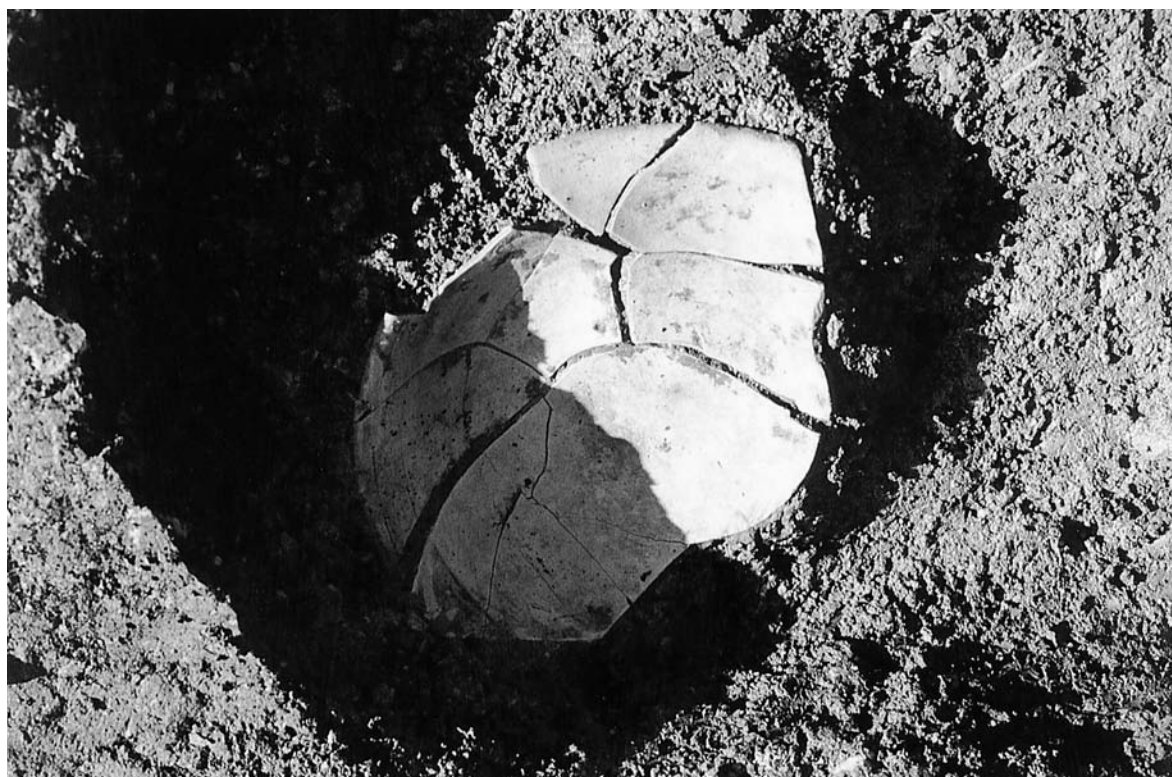
遺物出土状況



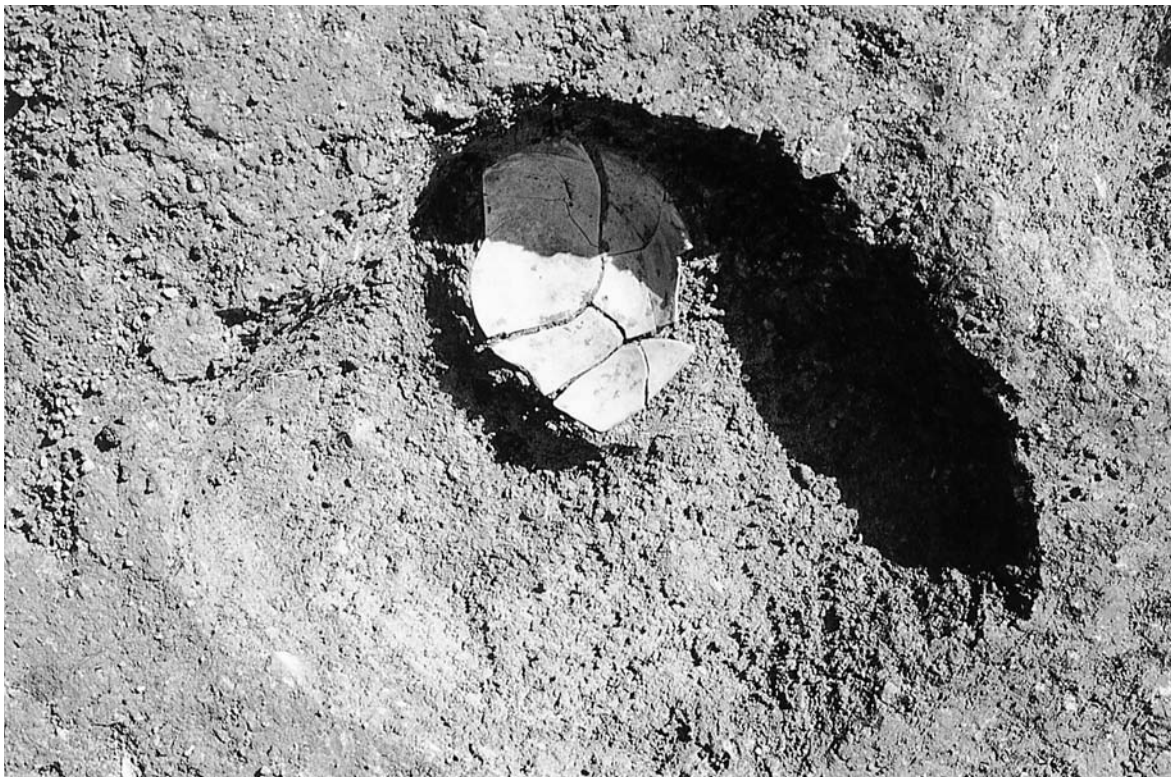
遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況



2-4区完掘状況



2-4区完掘状況



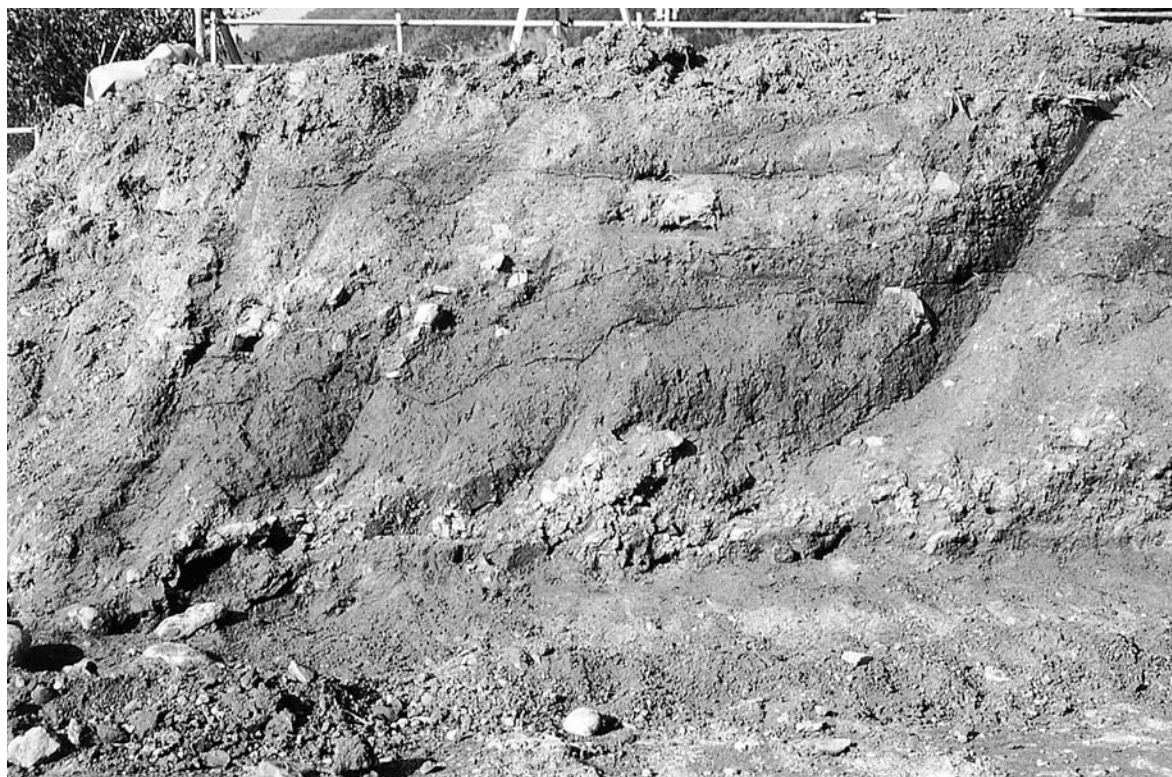
2-3区完掘状況



2-3区完掘状況



2-3区完掘状況



2-2区セクション



2-1区完掘状況



2-1区検出状況



2-1区完掘状況



2-1区完掘状況



1-4区完掘状況



1-4区完掘状況



1-3区完掘状況



1-3区完掘状況



1-3区完掘状況



1-2区完掘状況



1-2区1-3区完掘・検出状況



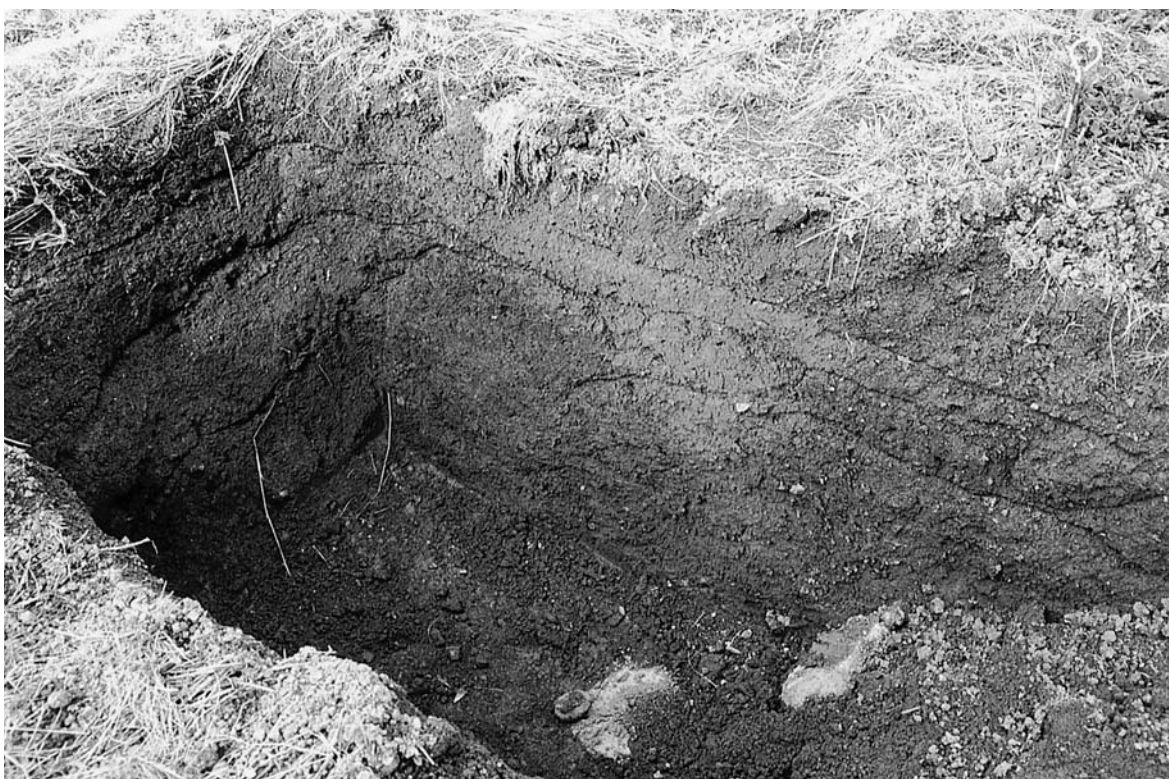
1-2区完掘状況



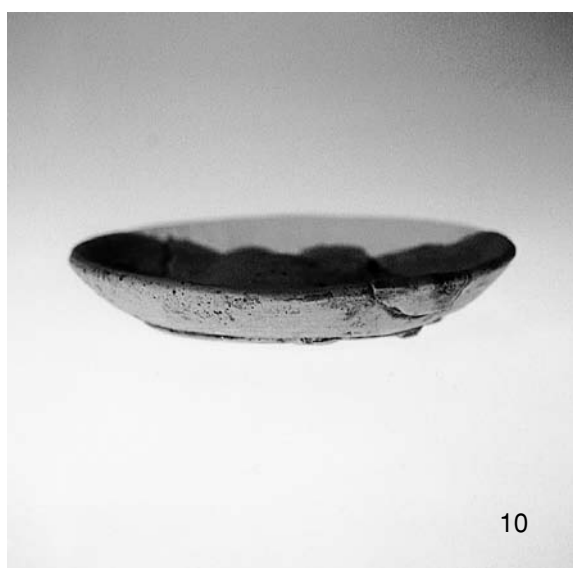
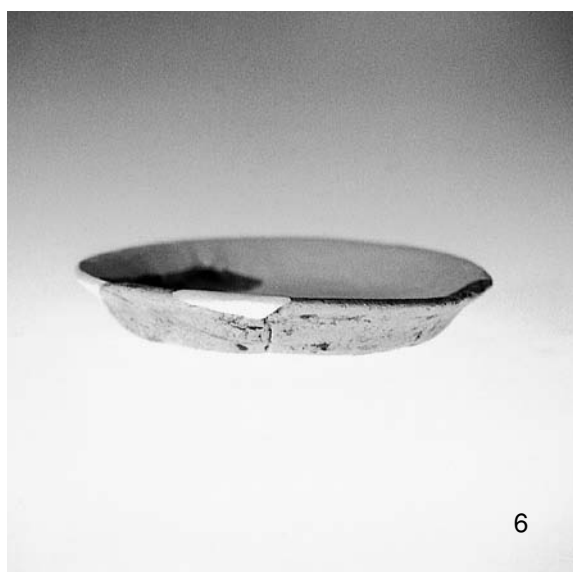
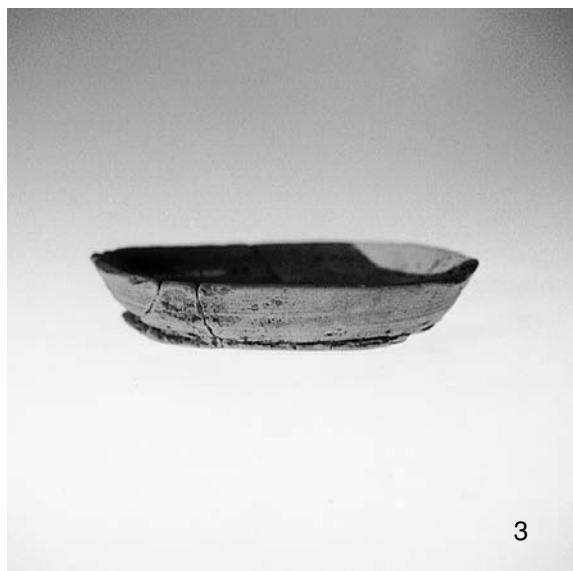
1-2区完掘状況



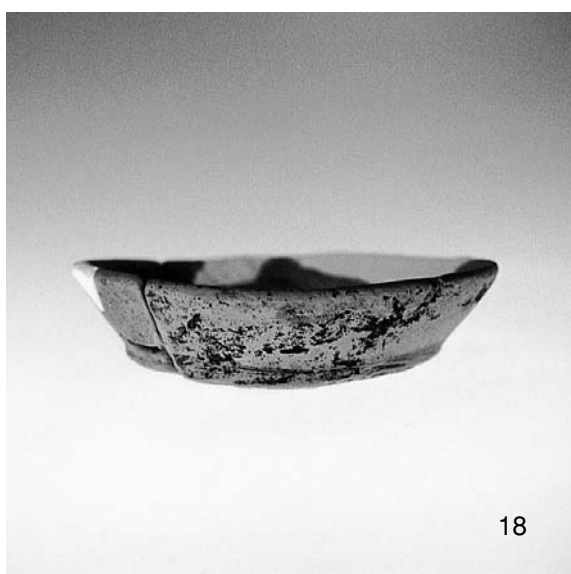
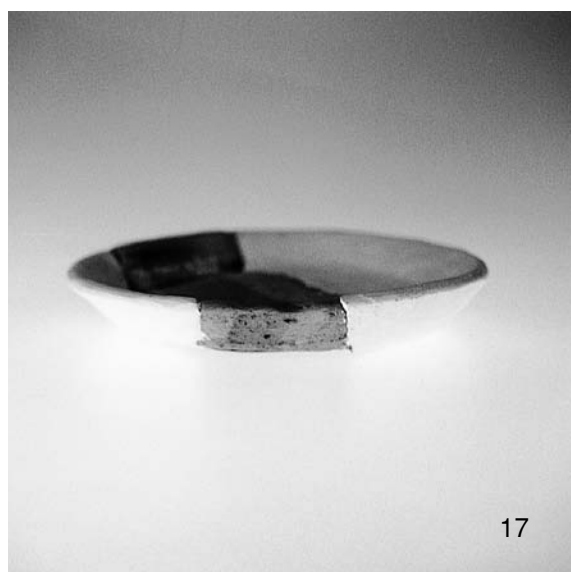
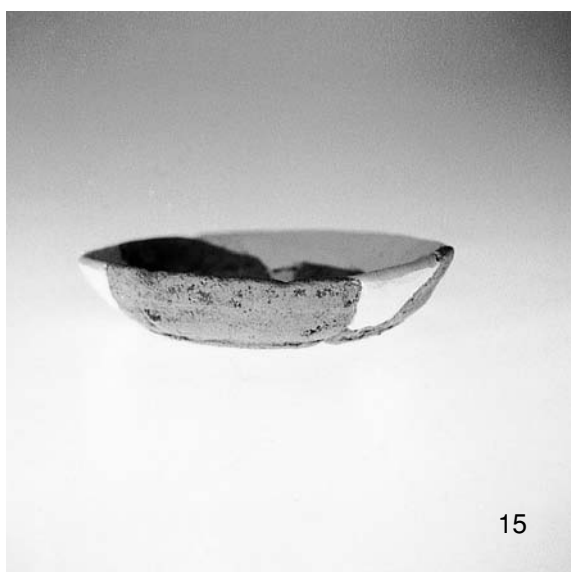
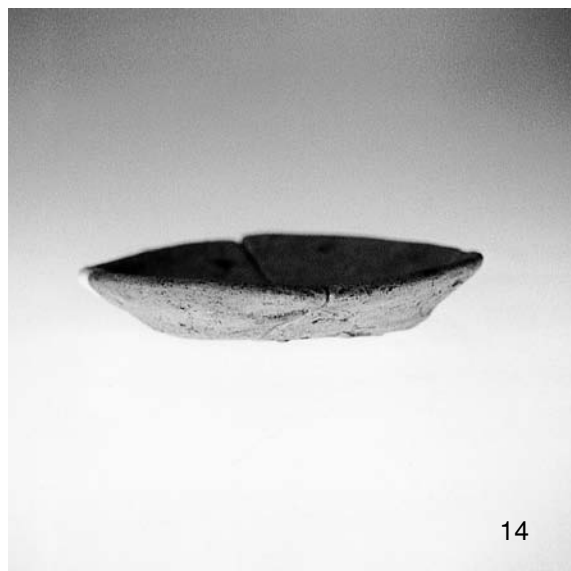
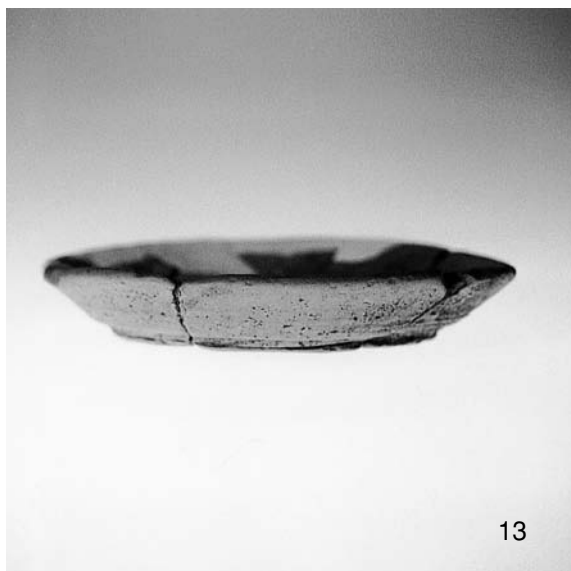
1-1区発掘状況



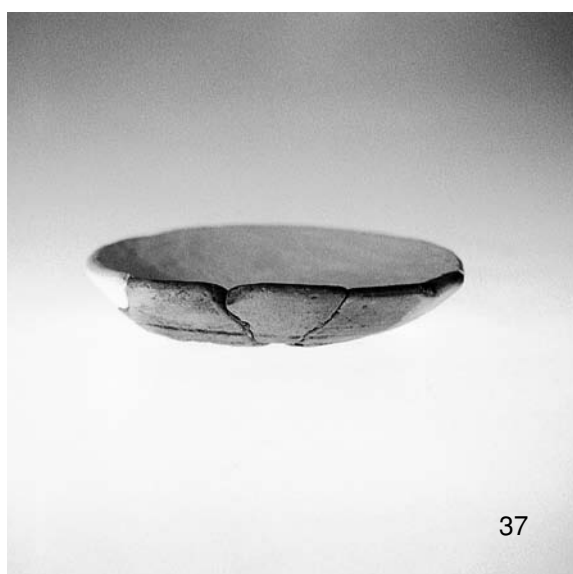
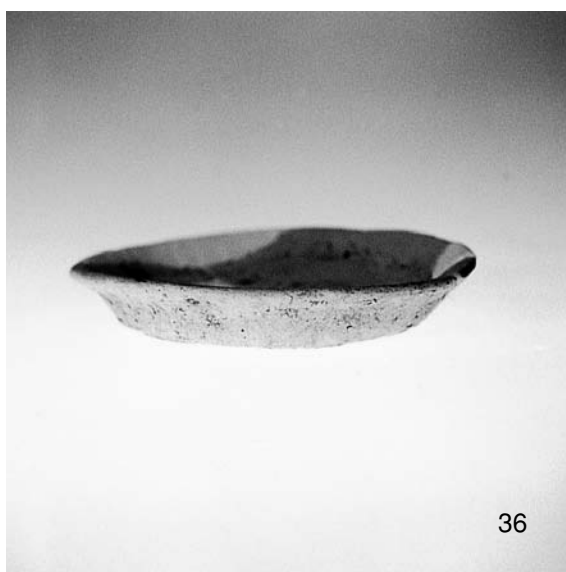
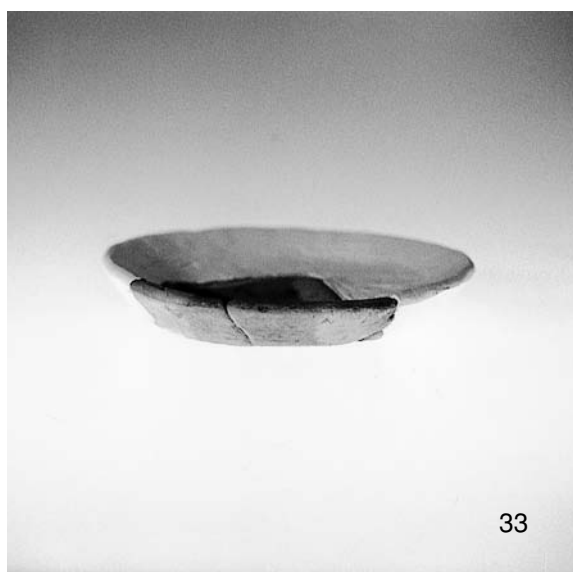
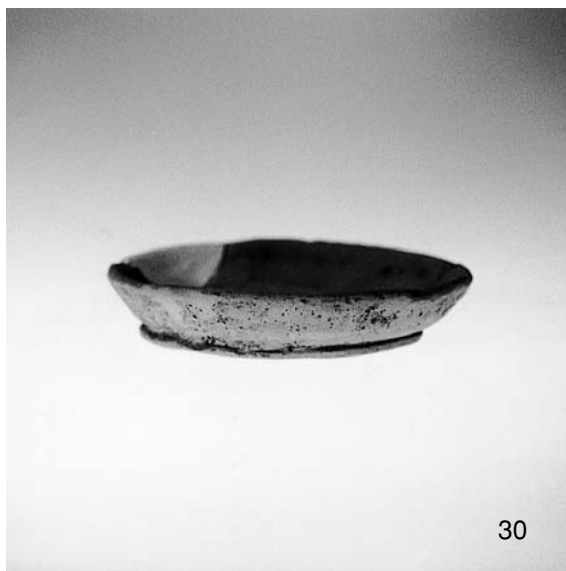
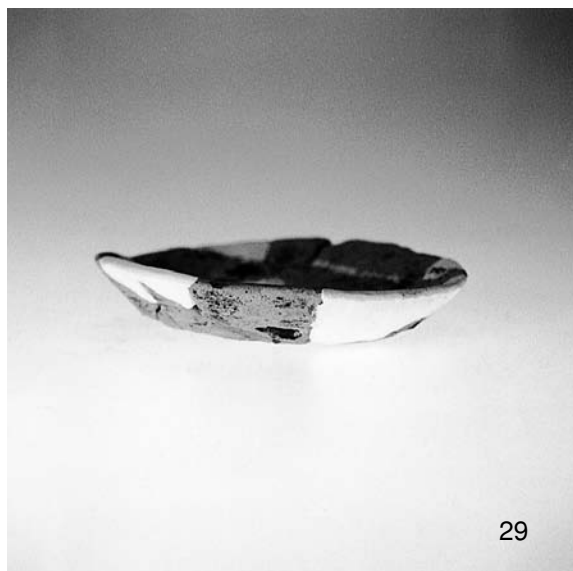
1-1区発掘状況



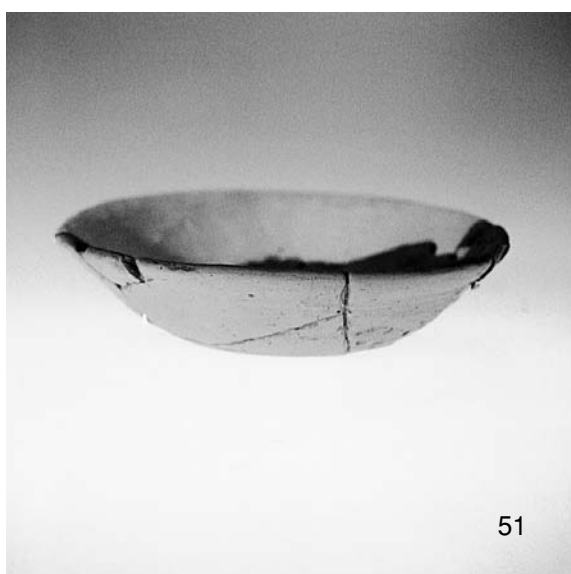
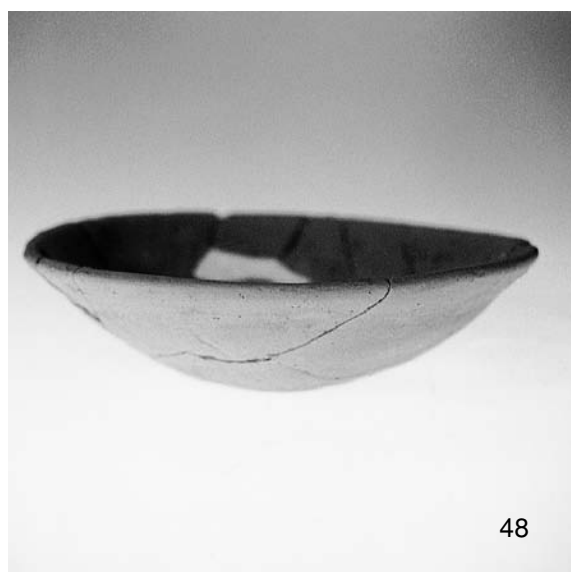
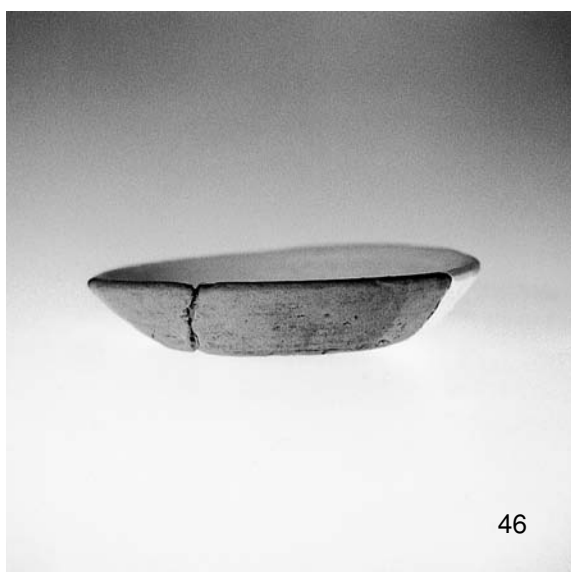
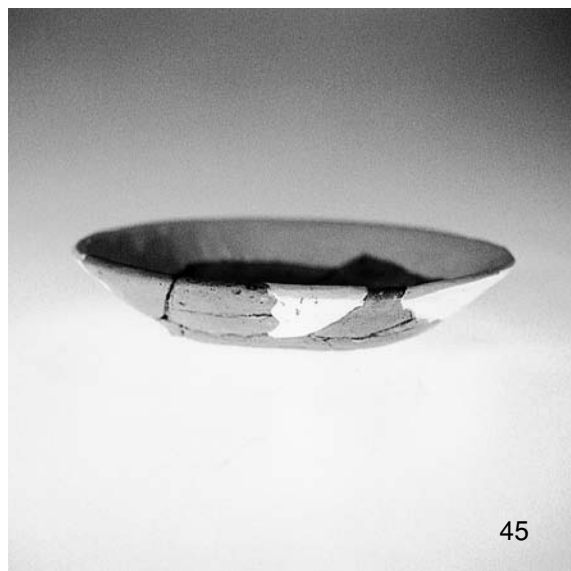
出土遺物（土師質土器）



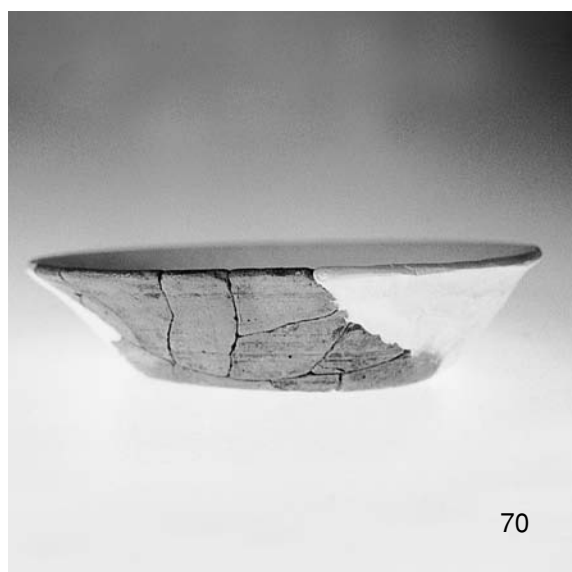
出土遺物（土師質土器）



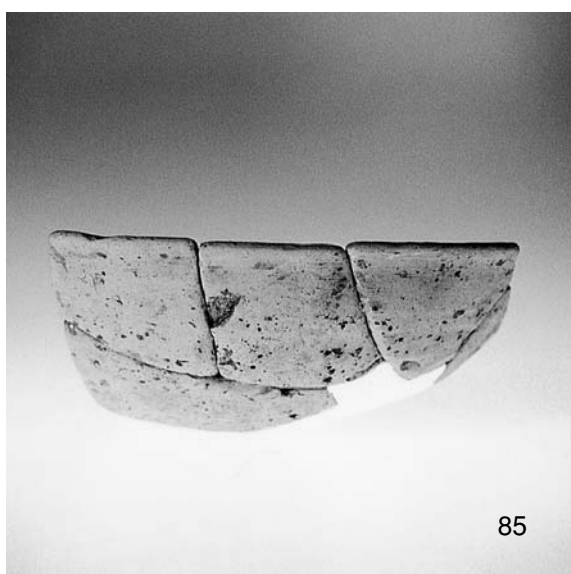
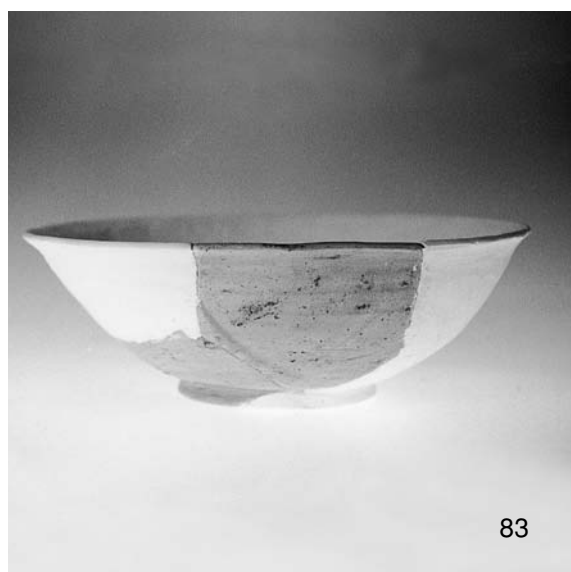
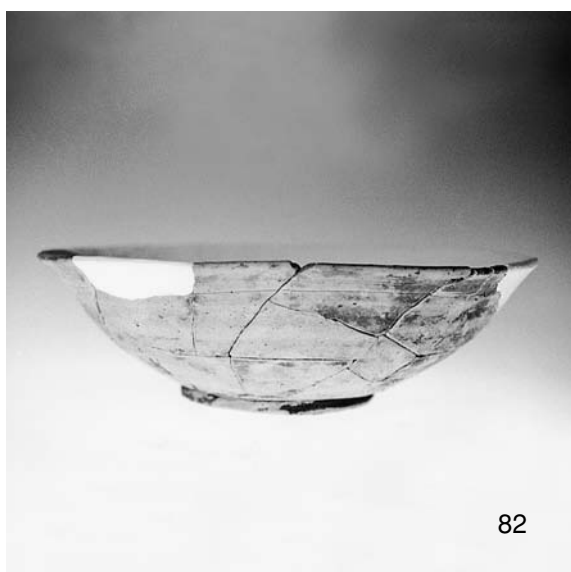
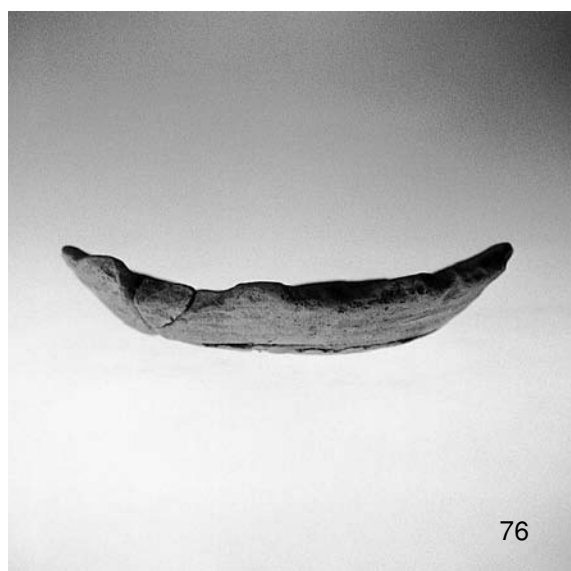
出土遺物（土師質土器）



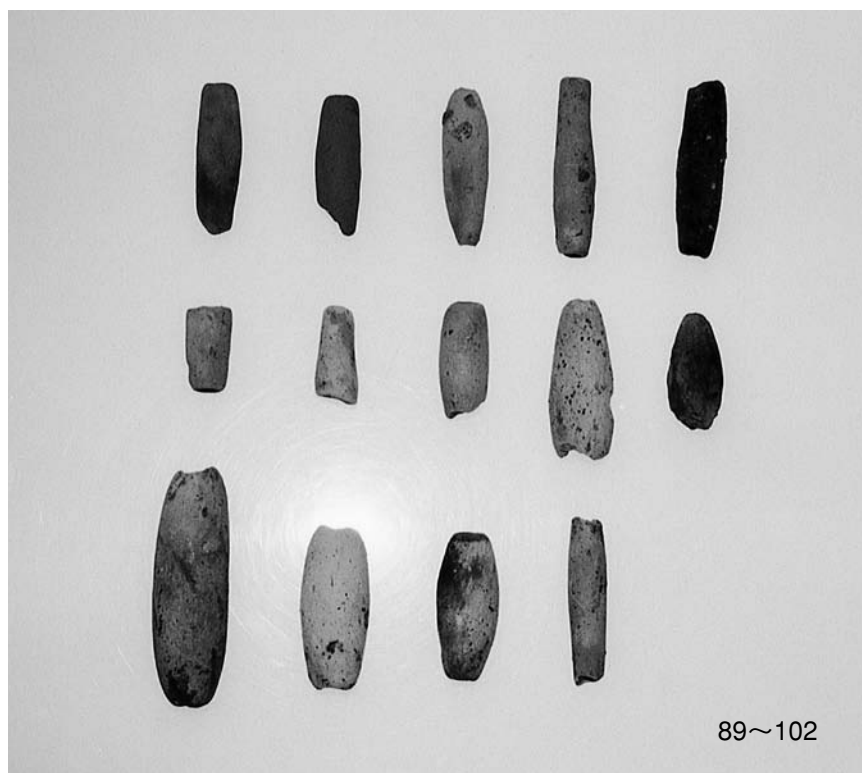
出土遺物（土師質土器）



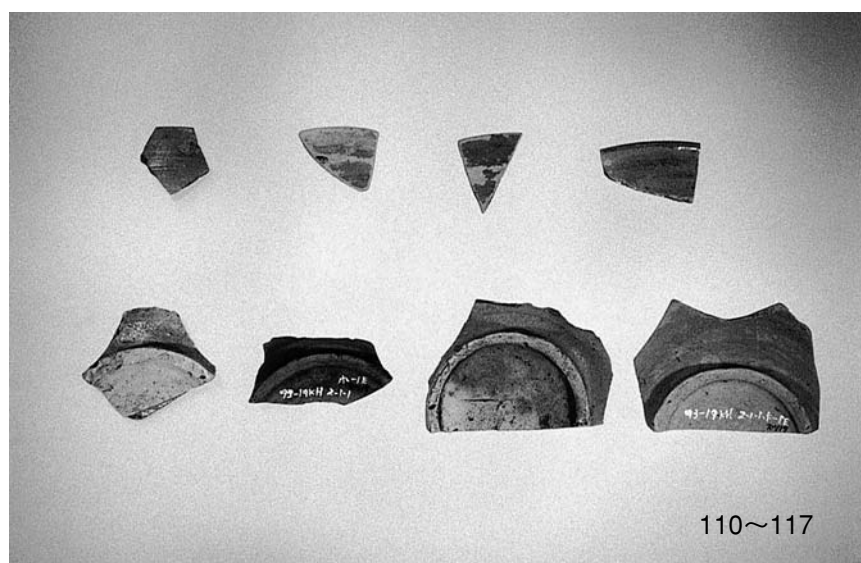
出土遺物（土師質土器）



出土遺物（土師質土器）



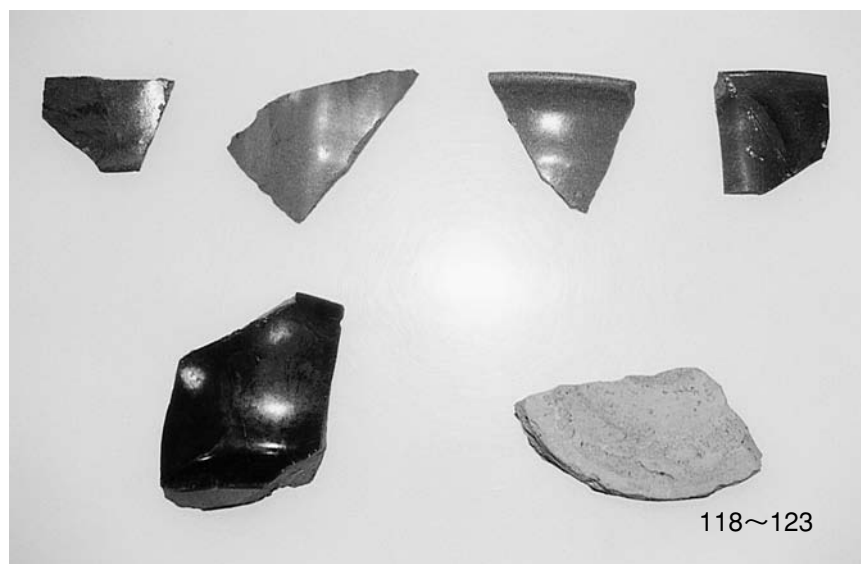
出土遺物（土錘・土師質土器）



出土遺物（金属・緑釉陶器）



出土遺物（緑釉陶器）



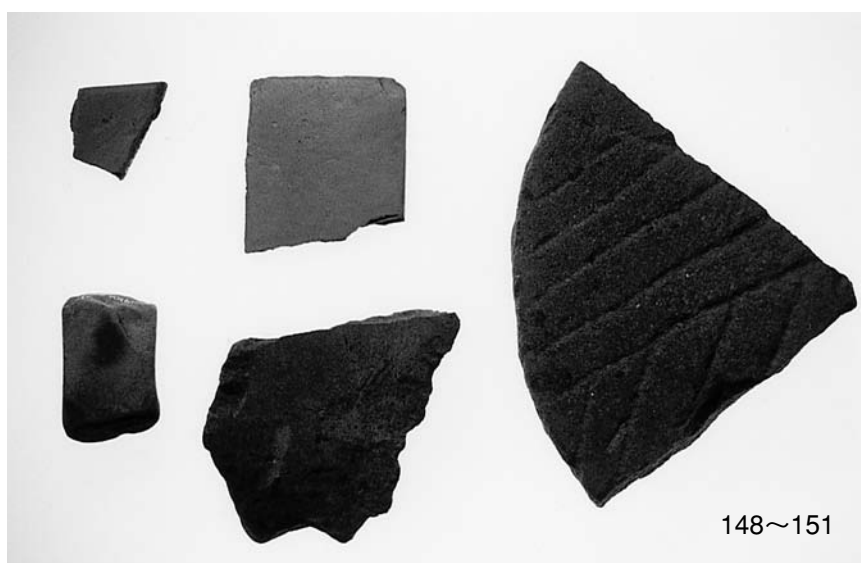
出土遺物（青磁・陶磁器等）



出土遺物（土師質土器・須恵器・陶器）



出土遺物（土師質鍋・瓦質鍋・陶器等）



報告書抄録

ふりがな		ひじいせき						
書名		尾立遺跡						
副書名		四国横断自動車道（南国～伊野）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次								
シリーズ名		高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書						
シリーズ番号		第23集						
編著者名		江戸秀輝・松村信博						
編集機関		高知県文化財団埋蔵文化財センター						
所在地		〒783 高知県南国市篠原南泉1437-1 TEL 0888-64-0671						
発行年月日		西暦 1995年 3月31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
ひじいせき 尾立遺跡	こうちしひじ 高知市尾立 129-4	39201	010159	33° 34′	133° 29′	1993. 10.15～ 1994. 01.21	1600	四国横断自動車道（南国～伊野）建設に伴う事前の発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
尾立遺跡	集落跡 その他	弥生時代～ 近世		柱穴 土杭 集石遺構 土手（堤防） 溝状遺構 井戸 等		土師質土器 緑釉陶器 青磁 瓦質土器 須恵器 陶磁器 石鏃 等		

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第23集

尾 立 遺 跡

四国横断自動車道（南国～伊野）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1995・3

発 行 高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県南国市篠原南泉1437-1
TEL 0888-64-0671

印 刷 有限会社 飛 鳥
高知市針木東町21-18
TEL 0888-44-6022